中央公論

本號目次

口繪

公論

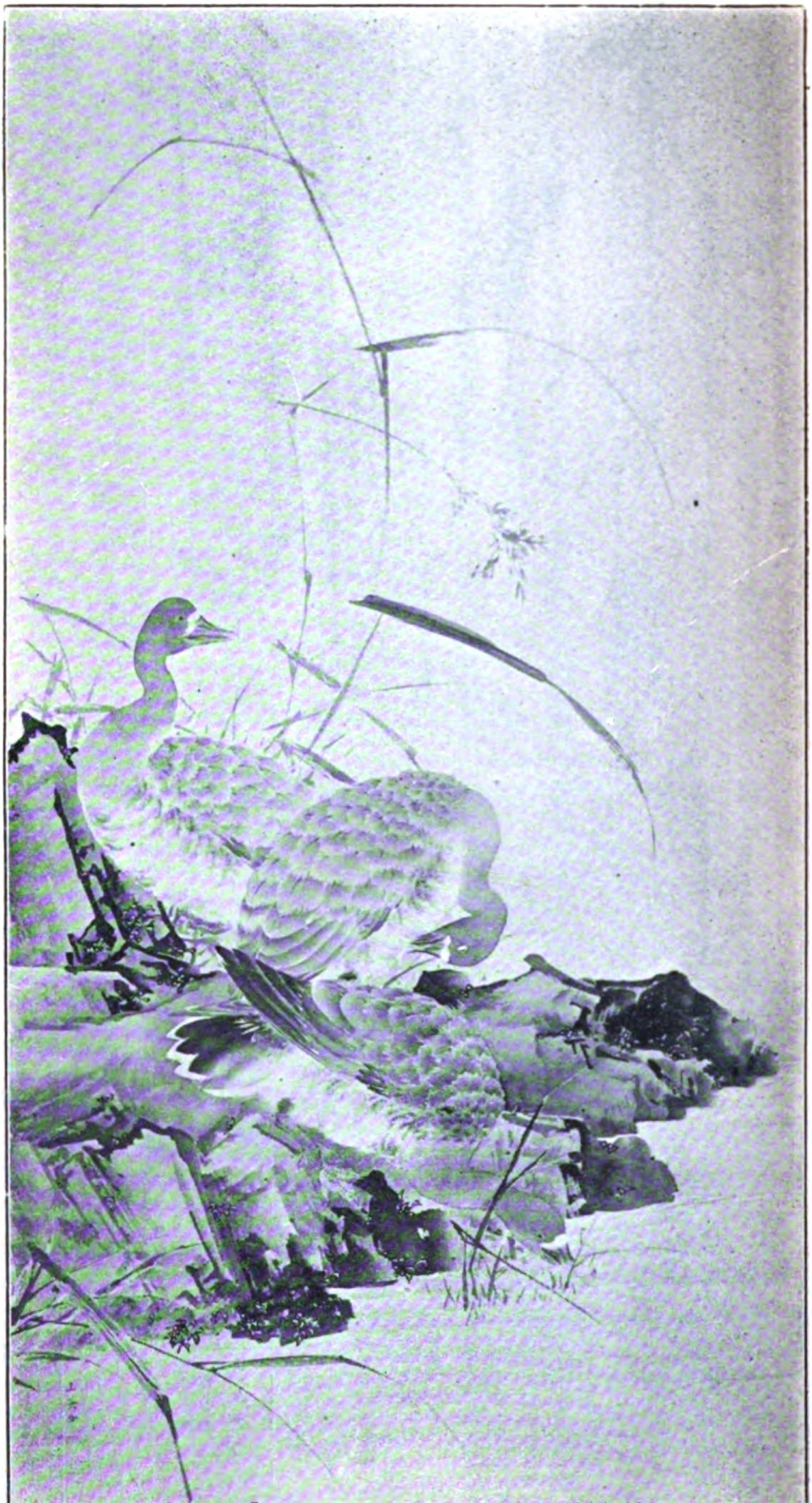
海外新潮

雜錄

詞藻

思潮

評論



N.154

中央公論　第十六年第拾貳號

中央公論

明治三十四年の概觀

三百六十五日剩すところ僅に二十餘、匆々たる烏兎吾人を驅て、本年最終の論壇に讀者と相見えしむるに至れり。小さき島帝國内の驢事馬事、未だ世界に影響を及ぼす程の大仕事を演出せずと雖、吾人國民は他日の大を成すが爲めに、將來の光榮を謳はんが爲めに、鋭意新舊の過渡を泳ぎつゝあり。顧みて過去一年の行課は果して如何なりしかを見る。喜ぶべきか、悲むべきか、ハタ得意か不得意か。請ふ吾人をして明治三十四年の總勘定を一瞥せしめよ。

社會的方面

社會的方面の今年は、慥かに明治以來最も効果の多かりし一年なりき。

▲公德問題の勃興　不規律、無調子、無制裁、沒同情、日本國民が公德缺乏の聲は、本年に至つて社會の四隅より起れり。蓋しこれ巴里博覽會に見物者の多く去來せしと、其他の洋行歸りの一時に輻輳せし結果。彼等が彼此社會の外面を比較して、我國の遙かに彼れに及ばざるを悟り、見劣りたるを耻ぢ、一齊に公德を叫びしに依ると雖。又我國進歩の機運が、此方面の改造に着手すべき時代となりしに由らずんばあらず。政治家も實業家も、敎育家も宗敎家も、記者も學者も悉く此問題を捕へて之を考究し、之を奬勵せざるものなし。蓋しこれ本年の出來事として吾人が最も注意すべきの事に屬す。

▲風俗改良の實行　も亦本年に入りて著しく効果を奏せり。衣食住の改良論者、及び改良實行者の一時に多くなりしことこれ一。特に女服改良の聲喧しく、女學生の方面より兎に角舊來の服裝を一變するの傾向を生じたることこれ二。寄席の風紀矯正されて都下ドヽスル連の一時に屏息したることこれ三。寄席の構造及び來客に對する取締を警視廳の發表せることこれ四。牛馬の虐待を取締まれることこれ五。左側通行跣足禁止の令を出せることこれ六。萬朝の唱道に依て茶代廢止が世の風潮となれることこれ七。以上皆本年都下の新事實な

り。これと同時に、板伯統率の下に在る風俗改良會が、本年に入りてより大に活動を始め。世界の冷罵を意とせず、熱心なる板伯の行動は、民權自由を唱へし當年の勇氣を、此風俗改良の一點に湊注せんとするが如きの槪有り。思ふに他日世界的日本の新風俗を現出する時代に向て、本年は正しくそれが出立點にありと云ふべし。

▲社會的事業　　出獄人保護事業の進歩。感化院養育院孤兒院等の整頓。本願寺が數百万の慈善財團を組織せる。板伯の消費組合を唱道せる。或は工場取締規則の發布と云ひ、無料宿泊所の新設と云ひ、慈善旅行と云ひ、雇人奬勵會と云ふ。皆記憶すべき事なり。彼の昨年後半より新たに興りし自由廢業なるものは、爾來益す之を行ふもの多く、醜業婦の統計、現に昨年に比して東京のみに於て一千餘名を減少せり。亦是れ本年に特筆すべき出來事ならずとせんや。

▲社會主義者　　何々協會、何々學會、何々團、單に研究を主旨とするもの、專ら實行に着手せるもの、我國社會主義者の團躰少しとせず。而してこれらは皆本年に至て大に規模を盛んにして各活動を初めたり。徒らに無垢にして且つ無苦なる勞働者を煽動し、挑發して得々たる、似非社會主義者の妄動や、強て國情に合せざる民主思想を極端に遂行せんとする、社會民主黨の發生や、亦これ今年に於て見るところなりしは、吾人の大に遺憾とするところなるも、大勢は兎に角此問題に向て眞面目なる行動を促がすの運に向へり。

此他新聞紙面不德文字の減少、商人の不信用問題、動物愛憐の聲、音樂改良の聲等、いづれか喜ぶべきの現象ならざらん、要するに本年の社會的方面は明治以來初めて祝すべき希望多き年を送りたり。

只公平なる社會制裁力の薄に依て微弱なる事や、伊庭想太郎の如き病的思想の國民に充溢せる事や、學生墮落の益す甚き事實、軍人風紀の頽敗せる始末、未成年者禁酒法案の否決等、一々悲觀し來れば數限りも無く、本年も亦長大息を以て送るべきならんも、吾人は公平なる觀察を以て、本年の社會的方面は他の方面に比して、最も光明ある道程に上れるものとして慶して之を送らんとす。

教育の方面

更に眼を教育界に轉ぜしめよ、夫の明治三十二年來の宿題たる、學制調査、國語調査、教科書編纂、大學及

高等學校の増設の如き、今果して如何、而して學生の風紀は如何、文部省の無能無氣魄無定見は如何。

▲當局無能の聲　明治三十三年の末、第五回高等教育會議に諮問して、その可決するところとなりし、中學校に於ける漢文科廢止のこと、頑冥固陋なる漢學者の盲動に怖れて、遂にこれを斷行するに至らざりしが如き、又樺山氏大臣たりし時に引き下げたる、中學校數學の程度を、菊池氏大臣たるに及びて、俄に内訓を四方に飛ばして原狀に復せしめたるが如き、妄りに豫算の削減に逢ひて、新事業企劃の希望全く絶え、數年來の宿題をもこれを解決すること能はず、殊に頃者、視學制度をさへ破壞せられむとして、纔に所屬を內務省に轉じ、辛くもその命脈を繫ぎしが如き、是れ豈明に文部省の無能無氣魄無定見を發表せるものにして、信を下に失ふの所以ならずや。

▲學生の風紀　學生の墮落學生の腐敗、その原因は多くの議者によりて探究せられたり、これが救濟の方法も、また講じ盡されて遺憾なきが如し。しかも一昨年よりは昨年、昨年よりは今年、年一年に、墮落の數を增し腐敗の度を高め來るが如きものあるは何ぞや。蓋し言ふは易く行ふは難し、世の議者また、たゞ言ふの易きを採ッて、行ふの難きに就かず、是を以て、千言萬語、聲は高く理は密なりと雖も、遂にこの滔々たる頽勢を防止すること能はざるなり。殊に一種の文學者と稱するものありて、能くこの學生の弱點を看破し、嗜好を審にし、戀を語り愛を說き、著書に雜誌に、詩に文に、彼等の弱點に乘じ彼等の嗜好に投じ、血氣未だ定まらざる彼等を誘惑して、邪路に彷徨せしめ魔道に墮落せしむ。未だ彼等の救濟に從ふものを見ず、しかも淫猥の氣は文學の名によりて四方に起り、以て彼等が良心の明を奪ひ道義の光を掩ふ、學生の腐敗墮落、恐らくは尚その勢を增さむなり。

▲悲むべき事　嗚呼大臣幾度か交迭して、文部省の無能無氣魄無定見は舊態を改めず。學生の墮落を慨くの聲愈盛にして、學生の墮落倍々甚だし。今や明治三十四年を送らむとして、更に思を日本將來の教育に馳す、吾人の心頗る安からざるものあり。

中學校令は改正せられたれども、未だ甚だ不備たるを免れず。高等教育會議規則の改正、またたゞ無用の議員を增したるに過ぎず。而して、明治の先覺者福澤諭吉氏の逝きしもこの年なり、一世の快男兒星亨氏の兇手に斃れしもこの年なり、伊藤圭介、蒲生重章、渡邊

洪基等諸氏の死せしもまたこの年なり、數へ來れば、得るところ少くして失ふところ多しの感なくむはあらず。

▲喜ぶべき事　然れども、明治三十四年の教育界、また二三の歡ぶべきものなきにしもあらず。昨年以來、第一流の學者は、各々自己の宗教意見を公にして、宗教と道德宗教と教育等の問題に論及し、從ッて一般世人、また意を宗教の論議に傾け、道德の根底、教育の根底となるべき、何ものをか求めむと欲するに至れるが如し、是れ明に吾人が懷抱するところの、教育及び道德は、宗教(形式的宗教を言ふにあらず)の根底の上に立たざるべからずといふ意見に、一歩を近づけたるものなること、これ一。教育學が、個人的研究より社會的研究に進みしこと、昨年に比して更に著しきものあること、これ二。菊池氏文相となりて、從來甚だ振はざりし實業教育の奬勵をなしたること、これ三。世界の學界に向ッて誇るに足るべき、マクスミュラア文庫の我帝國大學の有となりしこと、これ四。女子大學開校せられて、我國の女子教育に、一生面を開きたること、これ五。片山醫學博士が、眞面目なる大學制度改善論を公にし、殊に敎文科大學新設の議を唱へたること、これ六。瀕死の中江兆民氏が、『一年有半』と『續一年有半』とを著して、洛陽の紙價を貴からしめたること、これ七。言文一致漸く普及せむとすること、これ八。世界一周といひ、徒歩競爭旅行といひ、自轉車旅行といひ、無錢旅行といふ、多少年少子弟の冒險的氣象を誘起し、獨り冒險譚の彼等の間に愛讀せらるゝのみならず、夜を徹して東京横濱間の旅行を試みるといふが如きことも、彼等の間に行はるゝに至り、少くとも彼等のみは、腐敗墮落の渦中に捲き込まるることなからざらむこと、これ九。從來仇敵として、火花を散して利を爭ひし、金港堂、普及舍、集英堂の三書肆は、協同して一圖書株式會社を設立したり、爾後幾何か、謂はゆる教科書運動なるものゝ醜陋を減ずるを得べきこと、これ十。

要するに、明治三十四年の教育界は、小事紛々として頗る騷々しかりき。然りたゞ小事のために騷々しかりしのみ、その所得の甚だ尠少なりしが如きは、もとより怪しむに足らず。來れ明治三十五年、吾人請ふ汝と共に國家將來の教育を語らむかな。

宗教界方面

▲モルモン教とラマ教　本年の教界に於て最も奇異の現象となす可きは之を東よりしては一夫多妻主義のモルモン教の渡來あり、之を西よりしては一妻多夫主義のラマ教僧の來朝あり、後者は素より宗教傳布の目的を以て來れるものに非ず、唯觀光遊覽し去りたるに過ぎざりしと雖も又以て好一對の觀に供すべきものなりし。然れども唯是れ一種の見世物に過ぎずして是等二教が吾國精神界を搖蕩したるの迹、素より見る可からざるのみならず、今後と雖も彼等夫れ遂に如何とも爲す能はざらん。唯吾人の特にモルモンの徒に感ずる可きは彼れ妖教を以て万里海を航して意氣堂々として來て吾邦諸教屹立の間に傳道せんとする是也。之を世界の最大宗教と稱し、之を教理よりし、之を勢力よりし天下無雙の宗教を以てし尙逡巡爲す所を知らざるものに比し頗る尊敬す可きもの非るか。而して又彼のラマ僧アチャフトニトの如きは特に高級の僧位を有し、西藏本部に於て亦大勢力を有せりと云ふもの、吾國の佛教徒が宜しく多年經營せる入藏の好因緣を結ぶ可きものにして徒らに政治家の引ッぱり紙鳶たらしめて止みしは如何にも遺憾の至と云ふべし。吾十万の僧徒諸氏は彼能海寛氏が雪殘風虐、身を西藏僧に扮し、千山万嶽の間に間關す、茲に四年、今や其行迹をすら聞くなからんとするを知るや知らざるや。

▲アウンパラパー　茲に尤も教界の視聽を動かしゝものは西田某なるものがアウンパラパーとか稱する妖教を唱へ、唯に下等無智朦昧の徒を風靡するのみならず、案外の處に勢力を得たる是也。一方には無神無靈魂を絕叫して盛に物質論を鼓吹するの間に亦是の如き迷信妄教の跋扈を見る、世は實に樣々なる哉。さりながら是れ決して雲烟過眼視す可きの現象にあらず、今や社會は實に或るものを求む、或る宗教を求む、彼等の宗教に渴するは水に渴するよりも太し、彼等の宗教に饑ゆるは食に饑ゆるよりも太し、彼基督教大學傳道なるものが本年に入てより幾万の信徒を得たりと云ふを以てするも亦箇中の消息を知る可き也。想ふに今日に於て信火炎々として一天四海皆歸妙法的意氣を鼓して第二の親鸞第二の日蓮其人の出でゝ天下に號呼するあらば吾國の精神界は實に其の覇を稱するに任せん。

▲村上專精氏の脫籍　吾人は氏が數々豪語を吐きながら動もすれば所謂腐敗佛教に服屬して和衷協同の福音を傳道して得々たりしが如きに服す能はざりし。而

して今や佛教統一論の新著の出づる遂に氏をして自ら決せざる可らざらしむに至れり、吾人は氏が脱籍理由書なるものを讀て、其の去就の極めて堂々として頗る戰國武士的氣概あるを喜ぶ、而して脱籍の理由たる其内部の魂膽の如何を問はず、實に學術上枉ぐ可らざるにあるが如き學者の本分として博士に於て尤も服す可きの行動と稱す可き也。翻て大谷派本願寺に見るに村上氏の處分は今日本山の威嚴として亦已むを得ざる處なりと云はゞ云ふべしと云へども今日の如く徒らに舊時の典型を墨守し、文明的研究の何たるを解せず、苟も一新説を發揮するあれば直に是れ異安心のみ、異解者のみと擯斥せんとするに於ては大谷派本願寺なるもの、遂に一人物を得る能はざるに至らんとす、而して是尚可也唯天下の大勢を如何せん、本願寺たるもの深く考ふ可き處とせざるか。

▲教育と宗教　教育は宗教を待て始めて完全なるを得べしとは吾人年來の主張なりしが一時排宗教の氣炎頗る當り難かりし教育界も今や稍々寛容の氣風を增加し、帝國大學内に教文科の設立を主張せらるゝ片山博士の如きあり、（本號論説參照）或は京都大學に佛教學科を置く可しといひ、或は早稻田大學に宗教科を加ふべし（本誌前號評論參照）と云ふが如き、又各宗教學校にも各中學同等の資格を與へんとするか如き皆共に吾教育界が宗教の何たるを認め始めたるものとして尤も喜ぶ可き一事と云はざるを得ず、而して曩には本願寺大學の京都より高輪に移轉するあり、今又東本願寺大學の巣鴨に新築せられたるあり、宗教對教育を裁判する二大標準を輦下に得たるもの也、二大學の徒奮起せざるべけんや。

其他數へ來れば日も維れ足らずと雖も唯本願寺慈善財團が已に應募金百万圓に達したりと稱するは喜ぶべし、東本願寺の財政增急迫せんとするは悲しむ可し、而して所謂各宗淸僧の間に肉食妻帶の名論の頗る囂しきが如き來年の總選擧に乘じて還俗代議士たんとする幾多高僧の準備亦おさ〱怠らずと稱するが如き稍注意し置くの價値なしと云はず。

最後に新佛教を唱道する佛教淸徒諸氏がユニテリヤン會堂を借り得て時々佛教演説を開始したるが如き、想ふに今後教界の一新氣運を開發し來らざらんや、蓋し是れ苟も宗教觀潮者たるもの、看過すべからざる處たるべし。之を本年の概觀となす。

政治の方面

▲内治　希望の光の赫々たりしにもせよ、計らずも我政界の進路は暗澹たりき。政黨の腐敗と、財界の紊亂とは、其日誌の全頁なりき。されども、政黨の腐敗は、世既に聞き倦き、吾人亦之を口にするに忍ひず、せめては其財界紊亂の次第に就て評せしめよ。

今日、我財界の清まざるは、其源流の濁れたるに因て來れる、自然の結果なりと云はざるを得ず。甲午戰役後に於ける財政計畫の、不精確なりしに因らざるを得ず。されば政友會内閣が、第十五議會に於て、二千百万圓の増稅を通過せしめんが爲めに、畏しくも聖詔を累はせしも、萬止むなきに出て、間もなく藏相の事業繰延案を提出せしも、是非なき業なれ。無き袖は何人も振る能はざるなり。故に桂内閣の代て立ち、新手腕を振はんとするに於ても、等しく其同陰影を逃らずんばあらず。外資輸入と云ひ、公債賣出と云ひ、はては貯金制増、臺灣富籤を叫びしが如き、破れたる喇叭は、益々亂調子の音を吐けり。而して其唯一の最後策として頼みし、五千万圓しきの公債賣出しすら、見事失敗の悲運に陷るの今日とはなれり。止むなくんば夫れ事業繰延か。さりながら吾人は、之を以て桂内閣の爲めに失望せざるなり。賣債の失敗は、寧ろ彼等の幸福なり。逆待は遂に彼等をして、獨立せしめんとするものなり。若夫れ現内閣をして此に鑑みるあり、出來得る限り事業の繰延をなし、出來得る限り軍備擴張の經費を節約して、目下の急を救ひ、本年度、明年度、乃至將來に於て、公債財源に依頼するなく、所謂借金政略を斷止するに於ては、其運命を保つ上にも、財界整理の上にも、止むなきに出づるの最良策たらんか。來る可き年度に於ては、過ぎし増稅の結果二千百万圓あり、國債償還費約千万圓あり、加ふるに今の場合に於て、陸海軍費六百万圓位の節減は、左程難事にあらじ、さあらんには、既に三千餘萬圓の剩餘金は現存せり。之を別て一部分の時借り返濟に當て、他一部分を以て公債支辨に充つ可し、斯くて漸次に病痾の療養を施さんには、敢て遣繰算段の苦痛を嘗めずとも、日本財政の基礎漸く固く、やがては宿病平癒、再び健全強壯の體たらんか。一時の彌縫策、借金政略は、竟に永遠安固の策にあらざる也。

兎にも角にも、時運は我暗黑の財界に向つて、一縷希

望の光明を放てり。要は政府の決意に在り。パーメルストン內閣に於ける倶氏の英斷を行ふに在り。

內情如此し、然らば其外交は如何。

▲外交　支那帝國の老朽に因て、北清團匪の暴動に因て、二十世紀の劈頭に於ける世界の大問題は、亞細亞に集中せり。世界外交の焼點は、老清國となれり。一葦帶水の日本は、如何なる方針に出でつゝあるか。」團匪の暴擧に對ては勇戰せり。北清事局の談判に於ては、利益と光榮とを全して、今や媾和調印濟となり。而して尙より重大なる問題の殘存せるあり、曰く滿州問題と支那將來の開發問題と也。

露滿問題は、該事件中の重要なる問題なりき。而して今尙ほ問題となれり。列國は、飽く迄て露國を滿州より逐放せんとするか。縱ひ露清條約を破毀したればとて、之を以て滿露の關係は絕ゆるものにあらず、滿州は實際上、十中九分迄は露國の有となれり、列國は、實に其十分一の殘餘に向つて言を弄するものなり。されば、よしや其條約の破毀せられたればとて、露國は實際上其打擊の爲めに、幾分の苦痛を感ぜざるなり。故に若し絕對に彼を逐放せんとするは、恰も英國を埃及より斥け、墺國をボスニヤより退くると等しく、決して外交策のなし能ふ所に非ず、止むなくんば、手段は遂に血を見んか。されども滿州は兵力によりて爭ふの價値あるを認めざるなり。何となれば滿州は露國に於てこそ必要あれ、清國のためにも東洋の爲めにも、左程の必要地にあらず。即ち滿州は貿易地にあらざるを以てなり。列國若し露國を逐はゞ、果して能く彼地を開發し得可きや。より多望なる要地を棄てゝ、揚子江沿岸の地を去つて。價値なく多望ならざるの地は、寧ろ渴望せる露國をして開かしめよ。

今日の支那は到底亡びざる可からざるなり。今は實に支那をして强制して迄も其國土を開放せしめ、根本より改造して、確乎たる、整頓したる國家たらしめ、之と共に正當なる貿易によりて、利益を收む可き方法を講ぜざる可からず。之れ支那の安全の爲めにも、列國貿易の爲めにも、相互の利得なり。而して此任に當る可き主たる國は、彼れと慣習に大差なき、土地の最も近き關係ある、而も最も能く事情に通ずる日本たらざる可からず。困窮せる財政を以て、要なき滿州の爲めに血路を開くが如きは、日本狂せずんば能はざる也。幸に事局に通し、而も能く彼れが事情を熟察したる外相、其上に在り、我國將來の方針はたして如何。

文壇の方面

▲大家の屏息　三十四年の文壇に於て、先づ最も著るしき現象は、所謂大家先生屏息してほとんど筆を執らず、新進の作家競ひ起つてその虚を充たしたるにあり。一派の觀測者は、この現象を評して、大家先生の壽命すでに盡きて新進作家のために文壇の存在權を奪はるゝものとなす。しかれども、これ非也。新進作家競ひ起つて文壇の四境に切つて出でたることはこれあるも、未だ一躍大家先生に取つて代るべきほどの人豪は出でざる也。隨うて、大家先生を以て壽命すでに盡きたりとなすは早計の觀察たるを免れず。しからば、斯の如き現象を呈するに至りたるは何が故ぞ、答へていはく、時運の進歩也、時運實に文壇をして斯の如くならしめたる也。

思ふに、明治の文學は、その初め消閑の具として社會に遇せられ、而して、作者もまたみづから道樂を以てこれに任じたりき。中には、春のや氏の如き、二葉亭氏の如き、小說の何たるを知り、文學者の天職を自覺して、眞率に筆を執りたるもののなきにあらずといへども、多くは、かの硯友社一派が『我樂多文庫』の刊行を以て道樂と放言して顧みざりしが如く、道樂なる觀念を以て文學に對するものゝみなりき。漸く進んで二十二三年に至り、文學の流行、盛を致して雜誌小說の出づるもの頻々相踵きしといへども、作家の情を注ぐは形式にあつて內容にあらず、言文一致の如き、雅俗折衷の如き、たゞ修辭に巧を凝らすを以て文學の本旨を了したるものと心得、不知庵氏がこの風潮に激して、文學の目的は人生を批評するにありて修辭の巧拙にあらざるを說き、正太夫氏が『明治小說評註』を草して、暗に形式に偏するの弊を刺りたりといへども、文壇は依然として、所謂です〱發矢の一致文、神ぞ、ぞかしの折衷文を渇仰して修辭以外、形式以上、小說の根抵たるべき內容に向つて意を致すものあらざりき。更に進みて戀愛小說に對する反動起り、慘酷悲酸の事件を描いて實感的興趣を挑發する作風の流行を喚び起したりといへども、柳浪氏をしてたま〱名をなさしめたるの外、內容に於ては何等の進步したる所なく、慘事心中の類型的材料に局して人生の問題もしくは時代の特相等に向つて眼を注ぐものあらざりき。當時、某の評家が明治の時代精神を描けといへる、實にこの風潮に慊らずして發したるもの、もとより時代精神なるもの未だ形成せられざるを以てこれを描くこと難しといへども、しかも、この要求に對して少なくとも時代の風潮にすら觸れんとしたる作はあらざりし也。斯の如く、數年以前の文壇は甚だ幼稚にして、その捉る所の人物、その描く所の境地は悉く作家の閱歷もしくは空想の外を出でず、明治時代の特相感は近代社會の全面に向つて嘗て筆を着けたるもののなく、たゞ修辭に於て聊か採る所あるの外、內容に於ては、小說として「明治」なる冠字を冠するに殆んど難んずるもののみなりき。しかるに今日に至りては然らず、輓近文學に關する學理の進步とともに、作家漸くこれに影響せられて、小說なるものは決してゆるがせにすべからざるを覺え、而して、社會、また消閑の具としてこれに對したる舊日の態度を變じて、これによりて世想人生に對する批評解釋を

聞かんと求め、作家と社會と、こゝに時運の進步に促がされて、單純にして且つ幼稚なる曩日の態度より一轉して眞面目なる態度を執るに及べり。文壇の風潮かくの如くなるに加へて思想界の形勢を見れば、倫理道德に關する研究甚だ盛にして內部的文明の施設に對する各種思想の簇出するあり。社會民主黨の設立、利己主義の唱道、爲我主義の鼓吹、惡時代精神の顯著等、雜多の思想こも〴〵生起して天下到所に橫溢せんとせり。而して、この風潮は流れて文壇に入り、作家をして時代思想に對する考察の必要を認めしむるとともに、社會をしてまた時潮に接觸したるものにあらざれば小說として價値あるものとなさざるの傾向を生ぜしめたり。これを以て、二十年前後の文壇に比すれば、その進步頗る多大にして、その間ほとんど區劃を分つものといふべく、若し三十年以前を以て文壇の第一期なりとせば、氣運は既に第一期を經過して將に第二期の紀元に入らんとするものゝ如し。

時運すでに斯くの如し。こゝに於て、作家は曩日の用意を一變して輿望に應ずるの作を出さざるべからず、而して、これを出さんとせば、須らく現代思想に接觸して實社會の深處、高處に涉らざるべからざる也。しかれども、斯の如きは、今日の作家に於て、よくし能ふ所にあらず。これに於て、作家は筆を執るにあたりて甚だ惑ふ所あり、幾たびか思索に耽りて遂に得る所なく、鬱惱煩悶、筆を拋つて稿を廢するの已むを得ざるに至る。紅葉氏は何が故に俳句の選者たるか、露伴氏は何が故に歷史小說にのみ筆を執るか、紅葉氏は決して小說を草し得ざるにあらず、露伴氏また歷史小說の外、作なきにあらざる也。しかるに、一は俳句に隱れ、一は歷史小說に轉じて現代小說に筆を染めざるは何が故ぞ、疑ふらくは、これ作家、自家の職責、容易ならざるを覺つてみだりに手を着け得ざるにあらざるか、若くは、將に着手せんとして深く考慮する所あり、而して、未だ懷疑に陷りてこれを脫却し能はざるがためにあらざるか。しからざれば何ぞ文壇を新進作家が蹂躙に委して顧みざるの甚しきや。人或は、紅葉氏の『金色夜叉』を以て、明治時代の實相を描寫したるものとなす。しかり、『金色夜叉』は紅葉氏の作中、最も明治的色彩を帶べるものにして、金と情との衝突に悶ゆる可憐の少年少女を描けり。愛を棄てゝ利に嫁き更に利に飽いてなつかしの昔の戀を趁ふお美代、戀に敗れて金に成功し而して情の誘惑に逢うて將に意志を挫かんとする貫一、いづれも現代に於てあり得べき人物にして、愛よりも金を重しとする明治氣質、榮華競むる時ありて愛情盡くる期なき人間本具の特質、ともに能くこの作に現はれたり。しかれども、これらは明治社會の通有事にして、紅葉氏ならざるものといへども、尙ほ描くを難んぜざる所、吾人が氏に見んとするは、これにあらずして、寧ろこれより後にあり。反抗意氣はいかほどまでに情を制し得るか、後れたる悔悟は遂に前過を繕ふ能はざるか、而して運命はいかなる邊にまで人間を飜弄せんとするか。換言すれば、氏は人生をいかに觀じ、現代をいかに解釋したるか、蓋し從來世に出てたる所は『金色夜叉』の前提にして、その新案はこれより將に現はれんとする作者の腹笥にあらざるべからず。しかも、『金色夜叉』中絕えて既にほとんど一年、稿を續くの噂しば〳〵傳へられて今に至るまで續く能はざるは何ぞや。思ふに、作者これより後に於て、その對時代觀を發揮せんとする所あり、而して疑ふらくは、是を發揮せんがために考察に沈みて未だ懷疑の境を脫し得ざるか。これを要するに、『金色夜叉』は未だ輿望に副へるの作にあらず、今に於ては金龍たゞ僅に鱗を現はしたるのみ。全身悉く出づるあらずは決して是非を分つ能はざる也。斯くの如く、所謂大家先生は時運の進步に伴うて自家

の位地容易ならざるを覺り、作を出だすにあたりて大に躊躇する所あり、而してその屏息するの間、しらず〳〵文壇の空位を新進作家に占めらるゝ至りし也。その文學的壽命のこゝに盡きたるか否かは、當來の問題にして今に於て輕々しく斷案を下すべきにあらず。かの壽命すでに盡きたりといふが如き畢竟早計の觀察たるを免れざる也。

▲新進作家　所謂大家先生屏息して出でず、文壇の上位は空虛となれり。こゝに於て、之を充たさんとして出でたる者新進作家也。『不如歸』の蘆花氏、『己が罪』の幽芳氏、『無花果』の春雨氏、これその最も著大なるものにして、而してこれに次ぐに關月、春葉、霜川、癸山、活東の諸氏あり。いづれも新進少壯の意氣を以て清新有趣の作を試み、文壇の上位、空虛なるに乘じて一躍その場所を占領せんとせり。就中、蘆花、幽芳、春雨の三氏の如き、時代思想の一面を捉へて人生の問題を解釋せんとし、從來作家が觀到し能はざる邊に向つて新境地を拓きたるを以て、その作は倘ほ瑾玼多かりしにかゝはらず、大に輿衆の歡迎を蒙りて忽ちにして名譽と位地を博取するを得たり。謚し、いづれの時といへども新進作家の發生せざることあらず、過去の文壇また每歲一二の新秀才を加へて文運推移の基をなしたりといへども、今年の如く多數にして且つ一擧、上層の地位を占めたる新文士を出だしたるは、從來に於て未だ嘗てあらざる所となす。これ實に今年の文壇にかける特徴にして而して、かくの如き、固より作家その人の實力に由るといへども、抑もまた時運の進步、作家をしてこゝに至らしめしによらずんばあらず。思ふに、今後の文壇は少壯の文壇にしてまた昔日大家の文壇にあらず。これら新進の作家に加ふるに從來の所謂靑年文士風葉、鏡花、天外、秋聲の一派を以てし、兩者おの〳〵錐花を戰はしめ詞苑の春をかざりなすもの、これやがで、來るべき文壇の現象ならんか、この時にあたり、大家先生、奮ひ起つていかに技を振ふといふとも、文壇をして紅露全盛の舊夢を繰り返さしめんこと甚だ難く、却つて少壯者に壓せられて終に見ぐるしき最期を遂ぐるに至らん。柳浪氏の如き、今に於てすでに輿衆の同情を失ひたるもの、ただ書いて倦まざるの精力、舊時の盛名に伴ふの惰力、幸ひにして若干の讀者を有すといへども、要するに前期文壇の遺物その濫作の如きは却つて致命の期を速からしむるに過ぎず。その他二流三流以下瑣々者流に至りてはその前途、言を須たずしてすでに明なる所、學の深きにあらず識の高きにあらず、ただ文壇の幼稚なる

に乘じて僅に名をなし得たるもの、文壇の進歩に伴うて衰颯に就くは、おのづからなる必然の結果也。かの三宅某が言を大にして自作の顯揚に力むるが如き、要するに引かれもの丶小諸たるを免れざる也。

▲小家の權勢爭奪　たゞそれ、少壯者の文壇也。所謂大家先生屛息して少壯者のなすがまゝに任かするの時也。こゝに於て、弊もまた隨うて數多起れり、文壇盟主を缺いて輿論の統一を失ひ、思想の紛雜亂調を極めて權勢相奪ふが如き、これ弊の最も大なるものにして、その他、功名心の挑發の如き、嘲罵評の流行の如き、大言壯語して虛威を張るが如き、他の私行を發いて正義を衒ふが如き、西儒を擔いで名をなさんとするが如き、若くは惡時代精神の鼓吹の如き、少壯文壇によりて起るの弊甚だ少なしとせず。蓋し斯の如きもの各自向上の野心を充たさんとするより來る、文壇の上層に空位を望んでこれに向はんとし、しかも、自家識力の及はざるを覺るや、實力以外の勢力を以てこれに達せんとし、而して、遂にこの弊を釀すに至れる也。吾人は、これを評して、小家の權勢爭奪といふ、小家たがひに非望を抱いて功名におせるの狀、さながら餓狗の餌を爭ふに似たれば也。しかれども、斯くの如き弊風は、決して久しく持續するものにあらず。文壇の秩序、日を逐うて定まり、大家小家の分、明なるに至らば、おのづからにして廢絶すべきもの、たゞ、今年にありて、これありしは甚だ憾むべしといへども、過渡時代の餘弊、またまことに已むを得ざらんか。

槪してこれをいへば、三十四年の文壇は甚だ清新にして氣運更に新たなるものといふべく、而して、形の上よりすれば韻語盛にして創作評論これに如かざりしといへども、尙ほ多數の新進作家を出して大家先生の緘默に代ふるを得たり。この趨勢にして進歩せば、文壇の前途は甚だ多望にして平安元祿の盛觀、必すしも再現し難しとなさざるに似たり。三十四年の文壇、幕は既に閉ぢぬ。吾人は筆を新たにして、徐に來るべき一ヶ月後の文壇を待たんかな。

教科大學若くは教學科を新設すべし（其二）

文學博士　片山國嘉

教學科とか教科大學とか書いたのは、これは日本の宗

教、佛教儒教神道基督教、總て宗教に屬する學科を總括して名稱を附した積りであります、宗教といふ字の弊を避けて教學と申して於いたのであります、けれども宗教と申しても無論差支ない、只神道も或は儒道も含んだ意味の言葉で、斯う御了解下さらば私の考は達するのであります、それから又序に御斷り致して置きまするが、其教を司る人は佛教で言へば僧侶と言つて宜いのであります、神道で謂へば神官とか何とか銘々にそういふ名稱を使はなければならぬ、之も共通の言葉で言ひ顯はすには何と言つたら適當の言葉であるか存じませぬから、假りに教を司どる此司教者といふてそんな言葉で總括した意味で趣旨を言顯はそうと思つて居ります、

それで此神道なり或は佛道なり、教への立て方は無論違いまするけれども、宗教家の目的といふものは同じに相違ない、詰り人間の行くべき道、履むべき道を教へて誠の道を教へるといふのも、迷ひを破つて悟りの道を授けるといふのも、又無益に社會で苦しんで居るものに此安心の道を與へるといふ如きも、言葉は違いまするけれども、宗教家の目的といふものは同じと思ひます、さういふ工合で目的は先づ同じでありまするから教學と一に引き括めて申して差支なからうと思ひます、吾々の祖先より今日傳來したる所の宗教、國民多數の奉ずる宗教、其教の精神を聽けば皆決して惡いことをしてはならぬ、皆人の履んで行くべき誠の道を教へるといふことでありますから、教には惡い氣遣はないのである、教には惡い氣遣はなくして社會に顯るゝ所も其通りに善いことが顯はれて、惡いことを顯はすことのないといふのが實際になければならぬ譯である、所が社會に顯はれて居る所の點を見ますれば決して善いことと許り顯れて居らぬ、詰まり其弊害、宗弊とか迷信とか、世の中の害となる現象が非常に多い、世の中に益を與へずして寧ろ害を爲して居りまして其迷信といふやうなものは、社會に非常なる勢力を有つて吾々一個で以て目撃する許りでも中々著しいものである、日本は段々に開けて參りまするから非常に進歩をして隨分普通教育の上では、或は種々の科學、法律の上では歐羅巴にも餘り讓らぬ位に進歩して居るから、日本は文明國といふて國自慢したいやうであります、所が宗教の點に至ては國自慢は致したいは致したいけれども、現に眼の前に種々の宗弊や迷信的の行爲の顯はれて居るから、虚言に自慢を言ひました所が言ふ側から

彼れは自慢といふことが解る、我慢にも此自慢は宗教のとに就ては國自慢といふとは如何にしても出來ぬといふことは實際でありまず、實に此迷信の甚しい點を見ますといふと日本は他の文明は進んで居るけれども、宗教の點はチョン髷時代の有樣である、

宗教はマダちょん髷時代

であるといつても宜からうと思ふ、それが他のものに遲れて居るといふ丈に止まれば宜いのでありまするけれども、それ丈でなくして隨分頑固な時勢に逆らつた言論をしたり、時勢に遲れたことをいつてちよん髷流の考を言つて却つて文明を妨げる、此點から世界の學者には神道とか佛教とか日本の教學といふものは、もう幾分か學問の有る人間は關係すべきものでない、宗教のことに耳を傾け杯する人は棺桶に片足這入つて居る人間であることでなければ、餘程の愚物であるといふやうに世間の學者は見做して居ります、兎に角日本の宗教界の實際といふものは非常に他の進歩に遲れて居る、啻に遲れて居るといふ許りでなく病躰である、非常の大病に罹つて居ると私は思ひます、

其病氣の例を一々擧ぐれば今日一日述べても恐らくは述べ盡すことは出來ぬと思ひます、寧ろ其弊害といふものは、どんな弊害であるかといふと、斯ういふことは私が申さずとも諸君は既に御承知であらうと思ひまするから例を擧げることは避けまする、兎に角非常に迷信が盛んであつて、弊害が多くて識者の目から見ては取るべき點が極めて少い現象である、もう非常の大病で、到底とりや、治することが出來ぬ病氣であると人からは見限られて居る位であります、併し、果して之は治することは出來ぬ宗教的の大疾患であるが、どうが致しますれば私はまだそれ程に見離されたものでないと考へる、多くの學者は、近頃の學問をした人は、大抵どうしても此病氣は治らないと斯う申しまするけれども、私はそれ程に見離しはしない治療宜しきを得たならば、回復の見込はあるだらうと思ひます、さう失望するには及ぶまいと思ひます、併し其病氣は却々に重病である、危篤である、今日早く氣が着いて、病の重いといふことに氣が着て、適當の治療法を施さなかつたならば、意外の結果を來たすであらうといふことを私は考へます、

此病氣の起つて來たのは、決して一朝一夕の病氣ではございませぬ、殆んど祖先傳來の遺傳病である、急に今起つたものでなく、遠い原因が既にあります、遠因

があります、是が病氣の原因の重なる部分を占めて居ります、又近因は他の學問が明治以來種々政府に於ても改良進步に力を盡しまして、即ち今日に至りましたけれども、宗敎のことに就て、即ち數學の敎育のことに就て全く頓着しなかつたのである、どう改良したらば宜いか、どういふ方針を執らなければならぬかといふことに少しも國家が注意致しませぬ、改良進步の針路を示して國家が宗敎的敎育に力を盡さぬ、又其道に在る所の僧侶神官等の如きも儒敎者も舊來の敎育法にのみ依りまして、今日の如き敎育法を採用しない、平氣で居るから國家も惡るければ其道に從事して居る所の司敎者其人も惡い、兎に角明治以來今日に至る迄、此數學敎育に注意をせずして今日迄來たのは之が近因をなして居る、此の遠因と近因があり、さうして今日の宗敎的大患を社會に來たすやうになつたのであります、決して一朝一夕の病でない、一朝一夕の病でありませぬから容易く之を治すといふことは如何に名醫と雖も六ヶ敷ことであります、併し原因が略々解つた以上は其原因を除くことに力を盡さなければならぬと思ふ、原因を除くは即ち此病を治す第一の治療法であります、之れを細かに申せば、種々の近因、遠因が中にあるに相違ないが、兎に角、重なるものは敎育を怠つたといふことが最大原因であるから、之を除くのが最も大切なことであります、それを除くにはどうすれば除けるかといへば、唯原因を除くと一つに言へば造作もないやうだけれども、却々さう無造作には行かぬ、どうすれば宜いかといふと、其手段と方法に至ては種々ありますけれども、先づ數學の敎育といふことが一番必要であります、其敎育はどんな工合にしたら宜いかといふと、先づ今日の司敎者に普通學の知識を與へ、少くとも此國民敎育に屬する小學は勿論、尋常中學以上の普通學の知識有る一般の人と同じやうにしなければならぬ、之は知れきつたことを申ずやうでありますけれども、一の條件として入用である、第二の要件は其資格を備へて居る人の即ち尋中以上の智識を備へて居る人に、尙ほ數學の專門的高等敎育を與へるといふことである、即ち

國家が數學科を大學に新設し

其の高尙なる數學上の敎育を與へて、此二のものは相伴つて行かなければならぬ、普通の素養もなくして專門に從事するといふことを致しまするといふと今日の現在或は既往の數學者の如きものが多く出來る、今日

一般の宗教界、其學者の多くは一宗一派に就ての學者で、全躰の學に渉つて學者普通の知識に富んで居る學者といふものは極めて少いやうに見受けます、僧侶丈てはない、神官の中には尚更、少いかと思はれます、故に何教正とか、或は何々宮司とかいつても、又佛教の社會の中でも即ち或は和上とか、上人とか禪師とかいふやうな社會でも、種々の尊稱を受けて居る人々のいふ所を聞きまするといふと、社會の普通の眼を有つて見、普通の耳を以て聞くといふと得々として說き出す所のことが如何にも其時勢に遲れて、世の中に餘り利益のないことをいふ、特に佛教に就て云へば、唯々學問上佛學といへば高大であることを誇る爲めに六ケ敷ことを述べて、解るやうにするのでないと思ふやうなものが多い、却々斯ういふことは凡人の容易に解る所のことでない、(喝采)解らぬものであるといふことを申譯に話して居る(笑聲起る)質問するものがあれば、却々佛のことは佛でなければ解らぬ、(笑聲起る)と云ふ、御本人果して佛樣と話が出來るかどうか怪ひものである、兎に角さういふやうなことを云ふて逃げる、(笑聲起る)つまり世の中に餘り利益になら無いやうなことをいつて唯高大なることを誇るのが重てあるやうである、

宗教界有名の人の演說を閑があれば聞ても見ますが、どうも其徹頭徹尾感服するやうな演說が少い、それで立派のことをいふかと聞いて居れば、直ぐ打ち壞わしをやつて居る、(笑聲起る)それはどういふ點から打壞すかといふと、普通學といふものゝ知識がないから、もう中學にても行つて居るものならば誰れも知つて居る解りきつて居ることを、自分の解釋で妙な說を附けて、其說を打ち壞はす、科學者は斯ういふことをいふ、例へば自然陶汰といふことがあるとすれば、猿といふものが人間になつたとか云ふが、誰れが其しつ尾の落ちたのを見たものがあるかと、さういふやうなことを得々として說いて居る、(笑聲起る)科學者はそんな馬鹿のことを謂はない、(笑聲起る)さういふやうな調子で、試に聽いて却て愛想をつかすことがある、

吾々祖先傳來の教てありますから、口ては何と僧侶を惡口して居ても、今日の學者は佛教は中々高尙なところがあるてあらう、又それに相違ない、同時に隨氣に信じて居る人も有るのでありまするが、さういふ樣な人は決して此の禪師や上人やの御說明を聽いてはならぬ、なぜなれば折角の御說教を聽いた爲め、隨氣にで

もあつた信念までも其處でぶつつりと切れて仕舞ふ、(笑聲起る)吾々の友人間にも、近頃禪學を行つて見たい、どうも僕は種々のことが氣になつて宜けない神經質で困まる、それ故に禪學を行つて見たいとて、此夏或る禪師の所に坐禪に行つた、禪學も行り肉類も食はず、僧侶の行つた通りにやつた、寺に這入つて數週間やつた、さうして歸つて來た、それで利益を得たかといふたら、どうも君、御悟り所でないあきれかへる、あんな坊主にはあきれかへると云ふ樣な次第で、禪學に依て心を錬らうと思つて夏の休暇を一二週間潰したものも、失望に歸して仕舞つた、之も世間の學問を其禪師の知らないからであります、態々便つて知者を尋ねて、此樣の結果になる、之が即ち佛教界で云へば上流の人か、之其宗派内に於ては非常に勢力を有つて立派な人であります、それでは迚ても人を教へ導くことは出來ぬ、

宗教界に於ける第一流の名望知識あると思はるゝ人は此の樣で、其次は可もなし不可もなし、毒にも藥にもならぬ階級で、隨分これは多からうと思ひます、こりや害がないから宜いとしまして、もう一つ下つて其知識も學問もない無智無學で、さうして極頑固で、一種の迷信で、其迷信を人に勸めて之を實行さする上に於ては中々務める、此部類の人の社會に害毒を流すといふことは非常のものである、普通教育を受けたといふ人間は、素人であつても大抵もうこんな人のいふことは看破して少しでも信じませぬけれども、未だ普通教育の程度では少し込み入つた理屈は言はれませぬから、稍々哲理に關したやうなことを謂はるゝと、其正しいか間違つて居るか看破することがまだ尋中以下であつては智識がありませぬから、巧みに迷信を吹き込ませる、折角迷信も釋け掛つた信者もこれが爲に又迷信者になつて仕舞ふ、即ち此下層の無智無學の頑固な迷信的僧侶神官といふものが、折角開明に進み掛つた人間を迷信の方に引込んで仕舞ふ、遂に眞の迷信にして仕舞ふ、

人間は誠に判斷力に乏しいものでありますれば到底普通教育丈では此迷信を破る判斷は出來ませぬ、利益の行きますこととなれば直ぐに其氣になります、錢も要らぬで長命する、金も儲かることを說かるれば直ぐその氣になる、今日天理教、蓮門教とか、阿呍婆羅婆とか何とかの中には普通教育は先づ一通は受けて、それでそれに大分傾いて居るものがある、こりや判斷力の鈍

いのである、併し此普通敎育の間にも、能く注意して折りに觸れ機に乘して迷信の近因になるやうなことを能く說いて聽かすれば、此時餘程の迷信は打破ることが出來るであります、例へば理學的化學的現象で理化學を知らぬものには說明は附かぬから不思議であると思ふが、所が理學化學を知つて居ると、理學にして當然に顯はる、化學にして當然顯はるゝのである、といふことを知る、決して怪しくないといふことを看破する又稍進んで心理的に顯はれ、或は精神病上に顯はるといふことも懇切に說明すれば略々迷信は打破ることは出來る、けれども宗敎者が巧みに迷信の方に引張り込む勢力は大したものである、

それに反して敎科を置いて即ち迷信でない正しい信念で、而かも弊害なくしてそれを信すれば利益になるといふ宜い信念を鼓吹すれば、迷信者でなく宜い信者を作ることが出來る、又中學位の時は精神が幼稚で、潔白で、誠に悪に浸みない精神でありまするから、どつちでも色の着き易いものである、宜い方にも悪い方にも容易く這入ることが出來ます、況して敎育の無い人間なればその方に引張り込むことは造作ない話であるから、中學に於て臺を作つて置いて、其上に司敎者になる人は自らが是迄迷信の原因となつたものは皆打ち破りて本當の敎學の精髓といふ所を學んで司敎者となれば世の中の人を宜い方に導き、迷信のない妨害の無い方に進步することが出來る、さうなれば即ち宗敎的大病を治すことが出來る、

茲に於て私は大學の敎育は即ち疵のない公平にして一方に偏よらぬ一番善きところと思ふ、則ち此敎學も亦大學にするのが適當である、

其方法として

即ち大學に敎學科として今の文科大學の中に此學科を入れるやうにするとも、今日の文科といふやうなものを別に敎學科として設け相對して置いて一ッの敎文科大學といふやうなものを置くか、又は獨立に敎科大學といふものを置くか、それはいづれでも宜しい、其方法は孰づれに依るにしても兎に角敎學の大學的敎育といふことが此日本の社會に於ける宗敎的大患を治する最上の方法である、而も其治療を行ふ根本の場所は大學が一番適當の所であると思ひます、それ故に私は文科大學に或は文學科敎學科一緒にしてなり、特別なり、兎に角大學の中に敎學科に關した學科を置くのが至當であると考へる、是迄さういふことは問題になつて居

らなかつた、之を問題にしないで拋げやりにして置つたことは間違であつて、當然國家のすべきことであります、

此大學に數學科を置くといふことに就ては私は今申しました三通りの申し方をして居る、何れでも私は宜い、特別に數科大學を置くそれも贊成、數文科を置くこと之れにも贊成、今の文科大學の中に數學科といふ一つを加へる之にも贊成、此三の中の何れでも宜い、兎に角以上の趣意の數學科を置く必要がある、所が此私の主張に就て種々の說をなす人があります、

種々の反對說

があります、それも私が此三案を出して居る、然るに人が數科大學を置くことは反對であると云ふ、私はソンナラ數科を文科の中に置くことはどーかと云へば、そりや宜しいと云ふ、さういふ反對は私に反對でない、私の三說を擧げたうちで丙を取つたので甲と乙を取らなかつたのである、則ち同意である、かういふ反對が段々耳に這入る、贊否を表するなら宜く其原案を見て贊否を表して貰いたい、三の中何れにでも御同意であれば、私は同意者と看做すのである、

それから次は、一躰片山の數學科を大學に置くといふことは數學の研究の目的であるか、人物養成の目的であるか、人物養成の目的であれば、不贊成である、研究を目的とするなれば贊成であると、斯ういふ說を爲す人がある、是は私には一寸了解に行き兼る、今日大學の教育法といふものは、大學許りでない一躰の教育法が此注入的の教育法である、小學でも幼稚園に於ても誘導的開發的教育法を主として用ゐて居る、何でも人間に注込む許りでなく其者の知識を發達させる爲めに導くといふさういふ方針を執つて教導的に開發的教育する方法が普通の教育法である、即ち研究するには自ら研究する自ら悟つて行く方法が普通教育の方法である、殊に大學の教育なるものは最早や學生が普通の人としては高等の普通教育を受けて一人前に獨立して居る所の人間であるから、一層此誘導開發の教育法に能く注意して行くので注入的教育といふことは今日の大學教育には先づ無い筈である、どこかあるかも知らぬが、吾々の從事して居る醫學の中にはない、さうでなければ其教育法が間違つて居る、大學教育か研究を離れて教育の仕方はありませぬ、即ち研究の道を教へるのであります、研究の道を教へて出來た人間はどんな人間であるか、其科學に適した所の人物

が出來るのである、即ち一方から言へば人物養成である、教學の研究である、言葉を並べては一寸違ふやうに聞えますけれども、其實に於ては研究を離れて、人物養成といふものはない、又人物養成でないものは大學教育にはありませぬ、同一にして二であるまでゞある、然るに人物養成なれば不賛成、教學研究の目的を達するなれば賛成、こりや私に誠に解らぬ譯である、こんな論は私は無用と思ます、教學の研究即ち人物の養成、人物の養成即ち教學の研究である、私は二ともどちらも目的を達するやうに希望して居ります、

こう云ふ様に大學の教育を司教者に與へ、即ち此教育法に依て養成せられた所の人物といふものは司教者になつて、宗教界の重要なる位置に立たしめ、社會の宗教的大患を段々矯正して行て、其原因を除き、弊を矯め行けば、必ず此今日の病氣は治するやうになつて來る、それを治する手段として此大學に教學科を置いて教えるといふことを最良の方法と私は信じます、又それに就てそれては大學で皆んな僧侶を養成して大學を坊主の學校にするのか(笑聲起る)といふ人もある、是れも無論私の考でない、僧侶の中にも學者も入用である、種々の人が入用であるけれども、其中で只儀式法事を營む丈の極まりきつた御經を讀んだり或は葬式のことを主としてするやうなもの迄も大學で養成しやうといふことでは無論ない(笑聲起る)、唯樞要の位置に立つ人物を養成して、即ち文學士或は教科大學といへば教學士と謂ふでもありませう、さういふ學士を作つてそれに樞要の位置を與へたならば、今日の宗教的大病を治することも出來る、味噌摺り坊主迄も大學で養成(笑聲起る)せよといふのでない是を能く區別して欲しい、

それから次に宗教嫌ひの人は全然宗教が解らないで蔑視し度外視して居るやうである、それはもう始めから反對にして教科抔といふことは要らぬ、大學はそんなものを措く所でない、斯う言つて仕舞ふ、それなればなぜ今日の宗教は嫌いかといふと、始めから斯ういふ弊害のあるものは非常に社會を害する、そんなことを大學で教へることは以ての外である、それならばどうしてなくするのかといへば、打捨てゝ置けば宜い(笑聲起る)極淡泊の考である、さうすると兎に角大學で教えるといふことでなく抛つて置けば潰れるといふ考であるが、中々さう易く潰れるものでない、成程宗教の弊は私も嫌いてある、大嫌いてある、嫌ではあるが

私は其弊害が有るからどうか其弊害を少くしたい、これのみならず弊害無き有効のものにしたい、即ち宗教的の社會の病氣を治すやうにしたい、それを治すにはその學問を能く研究をして、宜ろしくないことは乾度捨て、善い所は養成して世に伴はせ宗教の學問、教學科といふものを發達進歩させれば自ら其弊害はなくなるであらう、其弊が忌やなら根本的に療治して源を清めなければならぬ、嫌ひならば其弊を除かなければならぬ、嫌ならば治さなければならぬ、善くしなければならぬ、かくいへばそう云へばさうだと大抵の人は訓ひます(笑聲起る)こりや決して私が反對者を言ひ込めるのでも何でもない、理論でなく實際の論であります、此罪人を減すのには其惡少年を減すといふことであります、それにはどうしたらば宜いかといふと惡少年は抛つて置いて宜いか教育するのが宜いか、そんな惡徒を教育するのは面倒であるキライであるといへば極簡單である、けれども能く々々考へて見るといふと、惡少年を惡事をさせぬやうにするには教育の力に依らなければならぬ、迷信を無くするにも矢張それと同じに迷信といふものは黴の生えた結果であるから、其宗教を極く奇麗に垢を去つて黴を除いて健全のものにすれば自ら其弊害といふものは除くことが出來る、惡少年を能くしやうとするには教育が入用である、吾々が教育するのは惡少年を減す手段である、宗教嫌いの人が宗教の弊害を去らうとするには矢張教育を能く出來るやうに世話をしてやるのがそれが一番目的を達する次第であつて、抛つて置けば益々忌やの奴が多くなる、惡少年を構はず置けば泥棒する奴も出來れば、掏摸をする奴も種々澤山の惡いことをするものが殖えて來る、お互に惡少年が集つて惡い方に誘導して來るから、どうしても抛つて置くことは出來ぬ、宗教もその通り、抛つて置けば迷信を多くすることになる、迷信を撲滅するには教學を盛にすれば宜いのである、斯ういふことを私がいふと、そうかも知れぬといつて話は終りまするけれども、宗教の嫌の側からはどうしても其宗教的の弊害を殖えないやうにしたいとの希望を有つならば教學を盛にするといふことがそれが正當の手段である、その方の側から言つても教學を能く盛にして發達させなければならぬ、

宗教を善くしやうといふには、宗教的から考へても又宗教嫌のものから考へても、何れから見ても眞面目に宗教を研究することは一番宜い、此外に良い方法とい

ふものはないと思ふ、そこでどうあつても、敎學といふものは成るべく宜い方法を以て研究するやうにしたい、此事は何の側から見ても、好きな人から見ても、嫌いな人の側から見ても、必要である、宜しく國家は之に對して幾分か費用を出して、大學に敎科を置かするといふことにしなければならぬ、國家が置くやうにしなければならぬ、政府がしなければならぬ、人民が其希望を述べてもさうしなければならぬのである、さうなつて來れば自ら弊害は除かれてさうして利益の方が見えて來る、今日輕蔑されて居り度外視されて居る宗敎社會も必要なものと見らるゝやうになる、今日見離なされて居る所の學者にも宗敎は必要である、此社會の一の道具にして無ければならぬといふやうになると思ひます、

今日の如く醜穢なる下等の宗敎杯の續々發して社會の弊害を爲すことが益す多いから、希くは各宗敎共眞面目の働を顯はして、社會の利益を爲すやうに致したいそして健康なる宗敎を作り、健康なる社會を作り、健康なる人民を作りたいのが、私の敎文科大學新設の主意であります、(滿場拍手大喝采)

衒學の徒を排せよ

白頭翁

(一)

文士の修養！是れ我が批評家が萬口一齊、以て我が文士の修養なきを罵りし語にあらずや。まことに科學的智識の缺乏と歷史的智識との缺乏は我が思想界殊に文士に於ける通弊なりき。而も偶ま此等の學を修めしものと雖も、自己中心の根據なく、唯漫然として讀み、漫然として學ぶのみ。學說の受賣りをなすものは之れ有り、博學を衒ふものは之れ有り。未だ曾て自家獨創の見地の上に、一代の新機運を喚起すべき學者あらざる也。

世を擧げて滔々衒學の風に染み、學問の爲めに學問(science for science)するもの殆んど之れなく、唯だ利己の爲め、黃金の爲め、名の爲め、孜々として日も亦た足らざるものゝ如し。斯の如くにして學問は遂に手段となりぬ。爲我的思想は遂に時代精神となりぬ。

(二)

何れの世、何れの時代を問はず、一國文明の程度を知らんと欲せば、先づ其の國の文學を窺ふべし。而して

國民思想の影を茲に尋ねよ。徒らに日本文學の幼稚を罵るものよ、汝等はまづ外を責むる前に汝の内を省みよ。淵に臨んで魚を羨まぬ前に、退いて先づ汝の網を結べよ。而して後國民思潮の高上を圖れ！吾人は今日續出する斷片的小冊子を見る毎に、我國民が讀書力の程度の卑近なることを嘆ぜずんばあらず。否、同時に其の國民思想の斷片的なるを慨せずんばあらず。

單に作家の根氣なきを咎むる勿れ。作家の根氣なきよりも先づ讀者の根氣なきとを責めよ。斷簡零墨の出づる、是れ讀者の罪也。

（三）

一代の風潮斯の如し、學者自重の態度なく、學生篤學の氣風なし。一派の批評家は之れを以て煩鎖學術の餘弊といへど、吾人は之れを泰西の學術に比して、尙ほ單純なりといはんとす。科學的知識と歷史的知識と、唯だ漸く其の堂に入れるにあらずや。奥に入るの日前途尙ほ遠し。

我が國、學界の現狀斯の如し。此の時に當り、科學の煩鎖を說き、智識の厭むべからざるを說き、さなきだに混沌たる我學界に危險なる風潮を輸入せんとする街學の徒の跋扈せんとするあり。而も我學界は一人の起ッて其の空論を打破するものなきにあらずや。其の無能、無見識推して知るべし。

（四）

ニイッチエの學說の如きは、吾人は之れを敎育學上より見て、全然排斥すべきものなりと信ず。彼れが文明論の如き、歷史論の如き、はた道德論の如き、皆な是れ一種の理想なり。否言ふべくして行ふべからざる空想也。彼れは理想と現實とを混同するもの也。即ちこれ一種のインプレッショニズムスとし見るべきもの。かゝる見地の上に起ッて而してニイッチエを紹介するは可なり、然るに彼の街學の輩は之れを一般敎育上に應用すべき合理的敎育（フンユナルエチユケエシヨン）として論ずるにあらずや。如此は天才敎育と普通敎育との別をだに混同せんとする四疊半の空論、――口未だ學窓の乳臭を脫せざる書生論也。

聞くならく、彼の徒の或者は、曩きに帝國敎育會上、多くの青年の前に、大言壯語、宜しくニイッチエを讀むべきことを慫慂せしとか。而して今日の我敎育界は、かゝる危險なる學說――人の子を賊ふが如き毒論に向ッて、何等の駁擊を試みんともせざる也。

（五）

登張信一郎氏渠れ何者ぞ、彼れは帝國の一敎育家にあらずや。堂々たる帝國高等師範の一敎師にあらずや。而して彼れは最もニイッチエを崇拜するものなりと自稱す。ニイッチエを崇拜する可なり、而も斯くの如き毒論を帝國の青年に强ひんとするに至ッては、吾人は言の以て出づる所を知らざる也。嗚呼此の極端なる個人主義の鼓吹者の頭上に戴ける高等師範の學生は禍なる哉。

(六)

嗚呼敎育家眠れる乎、敎育雜誌何をかなせる。

今日の時世は彼れ等の鼓吹を待たずして既に個人的なり、利己的なり。彼等の世に歡迎せらるゝは、其の學說の高遠深邃なるにあらず、其の所論の人を動かすの力あるにもあらず、唯だ時代精神の嗜好に投したるが爲めのみ。爲我的思潮の流れに乘じて、其の弱性に媚びたるが爲めのみ。

『隣人を愛するは自らを愛せざるもの也』とは彼等の絶叫する所にあらずや。故に自らを愛するものは隣人を顧みずして可なりと絶叫するにあらずや、彼等は斯の如くにして一切の善を排し、慈善を排し、博愛を斥けんとするにあらずや。

又曰く、歷史と科學とは天才を壓迫す。一切の事業は凡て過去を忘却し、若しくは過去の知識なくして大なることを得べし。唯だ歷史は天才に向ッて初めて用ありと。

何等の毒說、何等の空論ぞ。而して彼の登張一派の徒は敢て公衆に向ッてこの毒說を强ひ、この空論を勸め以て自ら快なりとなす。

嗚呼敎育家眠れる乎、帝國の敎育雜誌何をかなせる。

(七)

ニイッチエを崇拜するの徒は辯護していふ、彼れの說く所は時勢に激したる反語なりと。何等の囈語ぞ、吾人を以て之れを見る、彼れは時勢に阿諛したる薄志弱行の徒のみ。彼れの言ふ所は人間の弱性に媚びたる婦女子の泣き事のみ。偶々時勢の之れを歡迎したるは、自己の弱性を掩ふ同情者を得たるが爲めのみ。之れを以て十九世紀末葉に於ける反動の聲となすは、偶ま〱以て、自己か歷史を達觀し、學說を咀嚼するの能力なきを自白するもの也。吾人はかゝる無見識、無能力、無道理なる衒學の徒を我が學界より排斥せんとを今の敎育家に向ッて切に希望する者也。

(八)

高山林二郎氏は堂々たる帝國大學に教鞭を執るの人なり。同時に今日の我が文壇に於て、最も卓出せる批評家の一人として自ら信ぜるの人也。彼れの美的生活論の一節にいふ、

哲學の一巻を讀破して未了の知識に逢着する時、快は則ち快ならむも、終日勞し來りて新浴方に了り、徐ろに一盞の美酒を捧げて清風江月に對する時と孰れぞ。

貧を卹み、孤を助くる時快は則ち快ならむも、佳人と携へて芝蘭の室に憑り、陶然として名手の樂に聽く時と孰れぞ。

嗚呼時勢に激するもの丶語は果して此の如くならざるべからざる乎。其の清盛論に曰ふ、

詮ずる所、彼れは(清盛)當代の倫理を超絶したる一怪物なりき。廿世紀の言葉を以てすれば、彼れは極端なる個人主義、唯我主義の人なりき。即ち今日の倫理學者の口吻に從へば、彼れは不道德の人にあらずして無道德の人なりき。若し其の心事を以てすれば、善人にあらず、惡人にあらず、唯一個の巨人、一個の快男兒なりき。

嗚呼時勢に反動するもの丶語は斯くの如くならざるべからざる乎。

（九）

之れを要するに、彼の徒の説く所は極端なる個人主義の空論のみ。而も此の如き空論に耳を傾けざるべからざる我文壇に於ける青年と帝國大學の學生とは誠に不幸なる哉。嗚呼我文壇は何が故にか丶る空論を珍重するぞ。彼の徒のいふ所は、皆な是れ自己の見識にあらずして、學説の受け賣り也。美的生活論の如き、清盛論の如きは、其受賣りの學説を燒き直したる一時の壯語のみ。

彼れの説の世に悦ばる丶は、彼れの獨創の識見にあらず、即ち彼れが時代精神に媚びたるが故なり。青年の弱性に媚びたるが爲也。

彼れが文壇に問題を提出するに妙を得たるは此處也。其の喧傳せらる丶は問題の新しきが爲めにあらずして反對せらるべき、喧傳せらるべき極端なる問題を提出するの妙を得たるが爲め也。これ學問の爲めの學問にあらずして、名の爲めの學問也、畢竟彼れは虚名の驕兒のみ。彼れが曾て九皐生の匿名を以て林二郎を紹介せんとしたる如き、偶ま以て彼の本性を暴露したるもの、か丶る虚名の徒、衒學の輩の跋扈棟梁に任せ、猖

子をして名をなさしめたる我が文壇の恐や及ぶへからず。

（十）

虚僞、排擠、利己、僞善、僞學、あらゆる爲我的惡徒の中心たらんとする我か國は、彼れ衒學の徒によりて愈々益々其危險なる思想を注入せられんとす。而も一人の起ッて此の惡時代精神の大潮流に向ッて反抗を試みんとするものなきにあらずや。此の時に當り「馬骨人言」の出てたるはこれ空谷一跫音ならずとせんや。所説諄々愕々、百方ニイッチエを掀翻し、擒縦自由、殆んど餘蘊なし。近來の快文字、之れを俗語に碎き、以て俚耳に入らしめんとしたるの用意到れり。吾人は我が教育界尚ほ一道の生氣あるを思うて大に人意を强うしたることを悦ぶもの也。

言文一致に關する鄙見　下

足立栗園

（五）　我が國言文の經過

こゝで一寸言文一致の可否を斷する前、少しく我か國從來の言文の經過を尋ねなければならぬ。我が國の上代に、文字文章が有つたか無かつたかの篇は、學者研究の大問題故に暫く措き、兎に角我か國は一朝支那文明の化を受けて漢字を迎へ入れたものである。然るに其の文字を解するすら困難であれば其漢文を採用して遂に一般に行ふといふことは、到底不可能の事であつた、それで止むなく我が當時の言語を表出する爲の記號として、漢字を採用し、其音を便りて一種の文章を作成したらしい、此作者は聖徳太子といふ事である、其後年を經て漢文稍々中流以上に解せられ漢字の素養が漸く出來たけれども、下層一般は其域に達せぬ、そこで種々の新字は作爲せられたが、到底實用に適さなかつた所より終に悉曇の法則により五十音圖やイロハ四十八字は大成せられた、（此文字の創作並に此歌の意味、五十音圖の事などに就いては異論多き故に略す）これより我が國には始めて言語を文字上に上す簡便法が發明せられ社會は大に便益を蒙つた、されど漢文盛んに行はれた頃故女流文字などとして假字は一時賤められたが、世人の需要其大勢の向ふ所如何ともすることの出來ない爲めに終に假名交り文、即ち和漢混合文を

世に珍重なるものとして生せしめ、それより國文をして發達せしむるに至つた、其際中流以上は尙ほ假名文字を賤んで、漢字のみを綴つて一種奇異の文章を作成した、それが今日存する鎌倉以降の古文章で、其文躰が我か國上中流に久しく用ひられた丈けに、頗る勢力を有して、終に江戸時代の手紙文即ち今の候文の基礎を固め成すに至らしめたものである。かゝる狀勢であつたから一時中流以下多く下層社會に珍重せられた假名交り文も、南北朝分立時代より室町應仁以降の戰亂に際して、殆んど一敗地に塗るゝ姿となり、江戸時代の初め、釋契沖國文の復興を圖つたまでは我が國語の法則は實に亂脈無作法の中に成長したものであつた。所が泰平の世の有難さは契冲によりて文學漸く復古の兆を得て續いて北村季吟、荷田春滿を出し、加茂眞淵より本居宣長等の國學大家を生してそれより我が言語文章の法則は整正され一定せられ、終に古語研究の上に成つた假名遣なども公示せられ國語を綴り成す文法も指示せらるゝに至つて我か國文國語は稍々組織立つたものとなつたのである。然し此際にも儒者か世に重用せられただけ、漢文の方か久しく勢力かあつて、世人は多く此學の修得に携はり武士の如きは只管漢文を修め傍ら國文を修めても、其の法則を顧みず、特に一般普通の農工商人の如きは、其日常の所用を辨するために、假名文字を唯一の利器とするも尙ほ毫も國語國文の法則を學ぶことをせず、爲めに假名遣をも間違へれば、其日用文も實に其の躰を成さぬものゝみであつた、これといふも國文が漢文に壓せられた結果であるが、茲に最も注目せねばならぬ其一原因は、契冲以下すべての國學者が、一意國語の本源を明かにすることゝのみに心を用ゐ、敢へて社會の實用といふ點に心を勞することが少なかつた一事である、思ふに我か江戸時代の國學者は、比較的、社會に勢力が少かつた故か、社會人衆を思ふて其學を活用するといふ點に着眼する者少く、たゞ其學の基礎を確めるために古語の研究さへ勉めて復古の趣意に適へばよいとする傾かあつた、それ故に、學問上に寄與した點は多かつたが、實際社會の實用に資するといふことは甚た少く、爲に國文國語をして、社會人衆より離れて孤立單行せしめ、所謂一種のペダントたらしめた傾かある、要するに今日の國語國文か其よく法則を立つるに拘はらす世人をして毫も其實用上に資せしむる者なき遠因に相違ない、一躰我が中古以後の國學者は、兎角其の着眼點か低くし

て、よく國家社會を補益すといふ大精神に乏しかつた故か、常に漢學者に壓倒せられ又方外の徒たる僧侶の國語研究にすら及ばなかつた、之か中古にあつては國語國文をして悉曇韻鏡の兼修科の如く認めしめ、近世になつても、契沖、文雄、義門等の古語研究によつて其大部分を受け持たるゝ如き結果を來したのである、かの中古定家の假名遣を難じた明魏の精神や、契沖の和學正濫抄の向ふを張つた橘成員の意見の如きは、其學の造詣は兎に角に、常に社會多數を相手として、國文國語を社會の實用に供せんとした存意が看取せられ、大に偉とすべき點かあるに係はらず、國學者か一意學問の研究にのみ熱心にして、常に社會の實際を忘れた如き仙人的行動のあつたのは、要するに國文國語の勢力をして社會に薄弱ならしめた大原因に相違なくこれは一大恨事といはねばならぬ、詮する所、從來の國學者勉めざるにあらず、たゞ之か實際的活用の方途に出でざりし爲めて、之を思へば、國文國語の法則は在來のまゝでは之れを社會の實際に活用するに不充分て、從來の國學者すらよく其資格を備へしめることと困難てあつたことが分る、即ち在來我か社會に國文國語の法則か定まつてあつても、之を守り行ふ者か少かつた理由も、其理由の反證として、在來の國文國語の法則では、社會實際に活用するだけの準備かないことか分る。これは實に今後の國學者か、沈思して其宜しきを盡すべき所て、文部省の新定字音假名遣か出たとて今更の如く狼狽する愚を學はす、早く其國語國文の法則をしてよく俚耳に入つて實用に供せしめねばならぬのである、要するに變通の改良、臨機の組織は我か國學界に大必要なる要素であるのである、

（六）　舊幕時代の言文一致

我か國言文の經過か、實に前述の如くであつたから、社會實際の敎化には、和文漢文の外に、一種の說話文躰か用ひられてあつた、眞宗の和讃や御文などは唱歌風のもので、これは實際言文をして成るべく接近して、其趣意を世上の多數に了解せしめ樣と企てたものであらう、禪宗の假名法語に至ると、これは說敎其儘を筆記したり、或はそれに擬して記述したものであつて、全く言文一致の先驅と見て差支ないものである、近世に及んで諸宗の高僧碩德か其說法を筆記して、梓に上されたものも亦全く言文一致の標本である、それのみならず近世中葉以後、心學者の說敎も亦言文一致の標本て、中には全く言文一致躰の著述を以て、世道人心を

禆補せんと企てた者すらある位である、又これはかりでない、中古の謠曲の候文より轉化して、よく世俗を感化せんために創作せられたかの近松竹田等の戯曲は其性質全く言文一致の趣意に出てたものといつてよいのである、かく觀來る時には、我か在來の社會といへども、多數人か日常の所用を辨じ又諸種の知識を修得した實質は、全く言文一致文ともいふべきである、即ち社會實際に適合した簡便法であつたからであらう、かく漢學者か字句に拘泥し、國學者か文法にのみ走つて居つた時分に、既に言文一致文か社會の實際を思ふこと厚き人士によつて、暗裡に使用されて居り、ために人文進歩の上にも世敎道德の上にも貢献寄與する所の偉大なるものがあつたといふのは殆んと學者想像の外にあるといつてもよい事であらう、されは言文一致の所論は輓近の識者によつて唱道せられたものであれども、其實質は既に在來の我か社會に施されて大なる感化影響を及ぼして居るものである。それを今更の如く、候文に代ふるに言文一致の手紙文を以てするは如何なとと恐れるのは實に我か社會の實情に暗いものといはねばならぬ。

（七）　言文一致論者の注意

これまて叙述した所て、今の時刻下の急需として、言文一致の文躰を用ひて、せめて我か國文上の欠典を補ふことは、抑々學者の責任であり、又實に社會實際の狀勢に添ふものであることが、分明になつたらうと思はれる。予輩も此點に於て、實に言文一致論者であるのである、（近日少年諸君の爲めに言文一致日用文の拙著を公にします）然しなから、こゝに言文一致論者に向つて少しく警告せねばならぬことは、たゝ時勢の要求であり、簡便法であるからとて、猥りに此文躰を實施せんとあせつてはならぬ一事である、言ふまでもなく、事物の進歩には順序段楷かあるものであれは、決して輕卒に之を唱道して、世人の好奇心を挑發する如きは反て弊害を生する根本であることを知了せねはならぬ、又既に國文漢文に熟達し、或は候文に慣るゝ者をして、強ゐて言文一致躰に賴らしめんとするのも、言ふへくして行はるべからざる事て、反て事理を解せぬ者をして冷笑せしめ、反對派に氣焰を添ふる結果を來して折角の氣運を阻害するものなることを知了せねばならぬ、或は多少の弊害は數の免れざる所、反對派の起ること固より覺悟の前とアキラメる向もあらうがかくて輕卒に出てゝは一個人の利害は暫く措くも、抑

々社會の實際を思ふて其事に出てた精神に悖り、且つは我か學界をして徒らに擾亂紛糾せしむる基を釀成するに相違ない、遺憾の極といはねばならぬ、要するに言文一致の文脉を實施するにしても、成るべく將來の國民を指導するを以て其主眼と爲し、又徐ろに其實施を期する所かなくてはならぬのである、

（八）　言文一致論者の責任

以上は、言文一致を主張する者の、將來に向ての注意を擧けたに過きないが、此論者には尙ほ一の大なる責任があることを知らねばならぬ、何であるか、言ふまでもなく、旣に此文脉の必要を唱へ、之か實施を世人に迫つた以上は、其文脉をして、何處々々までも完全無欠のものたらしめねばならぬ一事である、又即ち言文一致といへども固より一種の文脉であつて、其所謂言と文とを圓滿に一致せしむる必要かあるのであるから、其言なる我か國語は今如何の有樣にあるか、之か過去の經過は如何、將來如何に之を發達せしむべきかといふことを究め、又其文なる國文も、仝樣過現未を考慮して徐かに其宜しきを盡せねばならぬとて、これは實に言文一致論者の正に盡すべき大責任である、思ふに、此企圖の完成ほど實に困難のものはなからうが、これを大成するのが經世濟民の本領であると信じて事にこゝに從はねばならぬのである、一例を擧くれば(一)言文を連綴せしむるに先ち、其言即ち國語を如何に一定すべきか、其文即ち在來の文章を如何に制限すべきか(二)國語に古語あり漢語あり、外國語の轉化せるあり、如何に之を一定すべきか、又方言俗語の取捨訂正如何、(三)進んで言文一致脉としての文章構成法、即ち名詞、副詞以下の使用法如何、(四)字音假名遣は如何、送り假名法は如何、(五)漢字節減の標準を那邊に定むべき　其良法名策はなきか、(六)合字法の必要なきか、略字を制定する必要なきか、前は悉曇の點法に則るべく、後は從來のそれと共に尙ほ一層其範圍を定むべきか如何、(七)符號即ち圈點、括弧、等の必要なきか、如何に之を用ふべきか、など實に際限なきほど諸問題が湧出し來るのであらう、然し之を一定するのは、實に言文一致文を完全にする所以なることを思ひ、充分沈思熟慮して此事に從はねばならぬのである。即ち此必要あるかために、たゞ自家の理想にのみ托せず進んで古人の研究調査をも尋ねて東洋言文の起源、經過を明らめ、之を斯文の上に應用して畫策す所かなければならず、尙ほ進んで廣く歐米言語文章の

本源を明かにし其發達進歩の蹟を鑑みて、よく斯文に寄與する所がなければならぬ、而も亦我か現勢を察し將來を慮つて國家百年の大計として徐かに其改頁を企つる所かなくてはならぬのである、短言するとよく過去を顧み現在に鑑み又將來を思ふて、古今内外の事情實跡を綜合羅列し、之を取捨採擇して其善良なるものを集め打して圓滿無缺なる一丸を成すことを勉めねばならぬのである、予輩も及ふ限り其力を致さんとの考である、(十月十日稿)



海外新潮

海外大勢

土耳格の蠢動と分割の聲

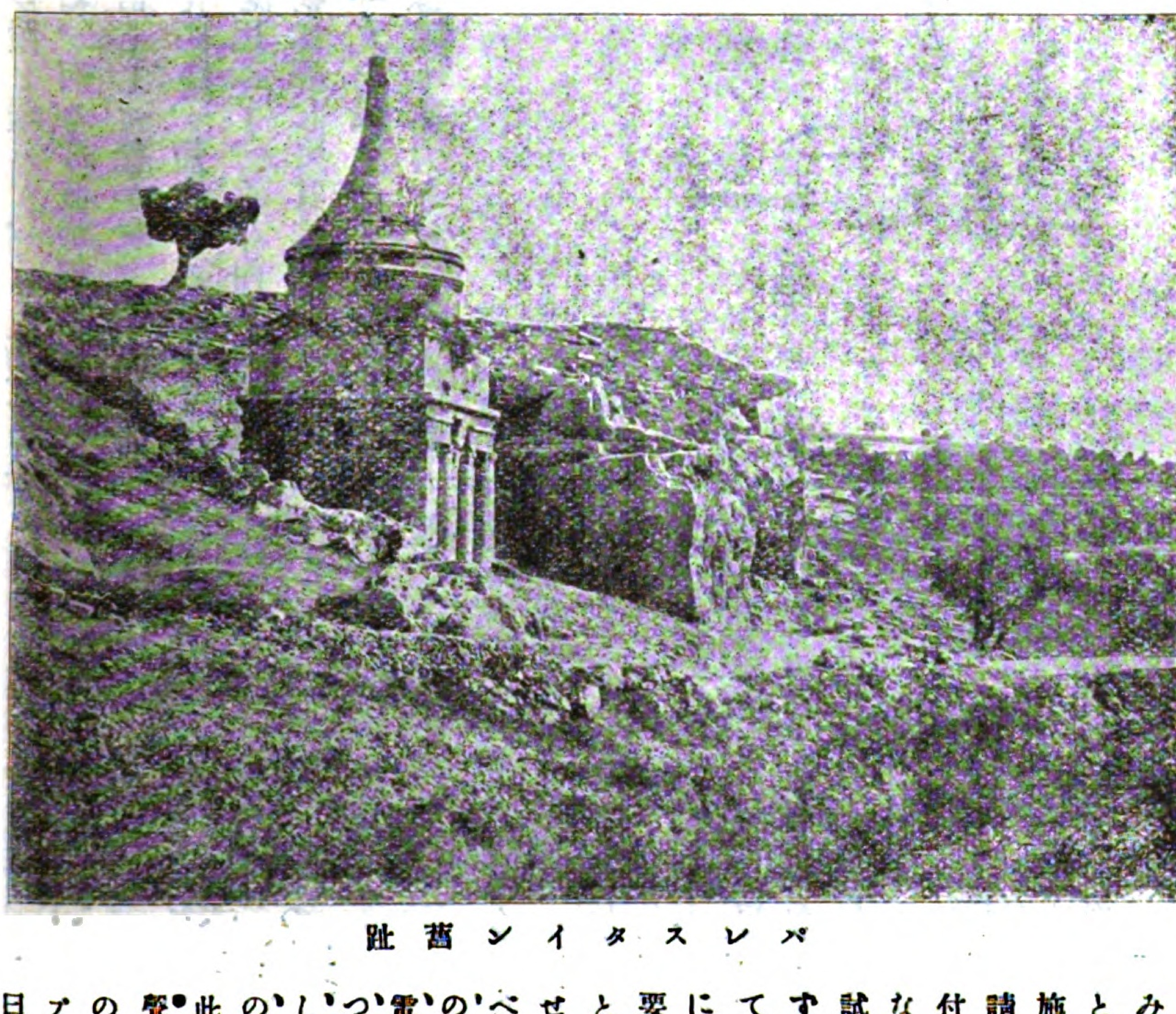
土耳格現在のサルタン(王)をアブダル、ハミッドと云ふ、性頗る堅忍、登位の初め、一定の方針を定め、爾來万難を排して之れが遂行を期し、聊か惓怠の色なし、若夫其方針にして過つことなからしめんか、必ずや治績の大ひに見る可きものありしや疑を容れず、然るに惜むべし、彼や不幸にしてマキヤヴエリーを迷信し、朕は即ち國家なり綸言は即ち法律なりてふ絕對無限の專制を以て治國の秘訣となし、官制の上に於てこそ尙依然として内閣あり國務大臣ありと云へとも、之れ只土偶のみ、彼は万機獨裁專行敢て左右の助言容喙を許さず、若し稍や奇骨の士にして自己の專制に便ならざるものある、則ち之れを付して避遠障蠻の地に放ち、更に探偵頗る嚴密大小百官の一擧一動未だ嘗てスルタンの聰聽に達せざるなし、彼は此の如くにして能く王權万能の理想を現實にしたりと云へとも而も亦斯の如くにして有爲の人材を一蕩し了れり。

外交の方面に於ては從來歐洲列强の勢力平衡を奇貨とし、甲を誘ふて乙に當り、乙に依つて甲を制し、巧みに列國を操縱し來りしと云へとも今や列國は漸く對土耳格の問題に依て彼等相互の利害は相衝突する點よ

りも寧ろ相合致する點の却て多大なるを認め、從來の態度は遂に一變せんとするに至れり、之れオットマン帝國の當に大に警戒を要するの秋なるべし。

然るにスルタンの無謀なる、近者波斯灣に軍隊を送り、コウェートに於て大に野心を逞うせんとするものゝ如し、コウヱートの地たる之れアラビヤ西海岸の一地にして古は土耳古の所領たりしと云へともオットマン政權の衰退と共に自立して今は獨立せる酋長の統治する所たり、而して所謂勢力範圍なるものゝ上より之れを見れば恐くばアデンに於ける英國の勢力に風靡するものと云ふべし、故に若しスルタンにして强て我意を張らんとせば勢ひ英國との衝突を免れざるべし、知らず一たび英艦のために上陸に妨げられたる土耳古兵は果して再擧の勇ありや否や。

尙一の問題は佛國との紛爭なり、事の起りは佛國の一會社土耳格政府の許可を得てコンスタンチノプルに一大波止場を築きたるに土國政府は前



パレスタイン舊趾

言を食みて豫約の特權を與へざるのみか、全然該會社の存在を否認せんとしたり、此に於てか會社は一切の施設を土國に交付し、之れが賠償を請求したり、然るに土國政府は其交[illegible]付を受けながら、敢て之れが賠償をなさず、依て佛國大使は屢〻談判を試みたりと云へとも、更に要領を得ず、遂に本國の命により外交を絕ち[illegible]て土京を去り、同時に駐佛土國大使に向つて引揚を請求したり、佛國の要求は元より正當なるが如しと云へとも土國の人情も亦憐むべからずとせず、蓋し土國は事實に於て支拂ふべき資力を有せざるなり、爾來佛[illegible]の間今にも開戰すべきやのロイテル電報頻りに至れりと云へとも今に至つて尙降らず照らず、知らず天候果[illegible]して如何に定まるべきか、誠に厄介の國と云ふべし。

此に於てか近來に至り土耳格分割の聲漸く盛ならんとする徵あり、今其の中に就きセント、ルイスのグローブ、ジャーナルの所論を摘譯せんに曰く、

今や土耳格は年々歳々加重し來る負債の重荷に呻吟しつゝあり、若しスルタンにして果して償却の意思ありとするも力遂に及ばざるべし、アルメニヤ其他の地方より頻數的に報道し來る虐殺は尚依然として繼續せられん、列國は漸く相互の嫉妬軋轢を止めて何ぞ速に土耳古問題の解決を斷行せざるや、思ふに之が根本的解決は只土耳格を全然歐洲大陸より放逐して之れを亞細亞に殘むるの一策あるのみ、蓋し土國の民政は宛も占領地に於ける戰時行政の如く、文明諸國の間に介在して敢て蠻行を逞くし、其一擧一動苟くも禍を隣邦に及さゞるなし、去れば各隣邦も互に相協力して其禍根を刈除すべきにあらずや……

其他ミネヤポリス、ジヤーナル、及アトランター、コンスチチューシヨン等の所論皆之れと大同小異なり。

英國の商敵としての獨逸

「獨乙品」と題せる刊行物の著者として有名なる英國のアーチスト、ウイリヤム氏は最近のナショナル、レビユー紙上に於て、彼が五年以前に警告し置たることの不幸にして將來續々事實として表現せらるゝを慨し曰く、

我英國の石炭及び生鐵生産上に於ける地位は最近五年の間に於て大に其重きを失し、只さへ不利の地位にありし鋼鐵の生産は益々衰微し、一般輸出國民としての地位大に下れり、而して兎に角尚世界に主位を占むるものは只織物業と造船業なり、而も之さへ今は迫害頗る急にして現在衰微せる工業の當初打撃を蒙りし時と同じ運命にあり、假りに工業を離れて單に商業の上より之れを見るもハンブルグ其他大陸諸港の最近の全盛は之れ即ち英國の衰勢を證明するものにして最早や世界の銀行たる資格なし、見よ金を借らんとする國は先づ我國に求めずして却て合衆國に至るにあらずや、些々たる支那戰時公債の如きも之れを英獨に分ち而も其大部は却て獨乙に於て引受けられたるにあらずや、加之自國の南亞戰爭費すら之れを米國に求めしにあらずや、今より十年以前卽ち千八百九十年度に於ける輸出總額を國民の人別割にすれば一人に付き七磅七片強なりしもの昨年度に至つては減じて六磅五志十片弱となれり、(兩年度共に造船業を含まず)、由此觀之我商業衰退は只他國に比較してのみならず絕對的にも亦た然るを見ん。

氏は結論に當り更に米國の競爭の英獨商業の上に及すべき關係に就きて曰く。

最近五年間に於ける北米合衆國の商工業の發達は實に驚嘆の外なく、英國の如きは其最も盛なりし時代と雖ども之れに比しては恰も疾走と匍匐の比なるべし、又獨乙の進歩は英國よりは頗る急速なりしと云へども之れを米國に比してはトテモ同日の論にあらず、然りと云へども米國と云ふ勁敵現はれたるの故を以て、直ちに獨乙の商工業は自今衰微すべしと速斷すべからず、何となれば一たび米國の鋭鋒によりて窮迫せられたる獨乙は倍加の猛勢を振ふて英國の勢力範圍に侵入し來るべければなり。

ハーグ仲裁々判所とトランスヴァール

本問題に關しキール大學のニーマイエル教授は獨乙法律新聞紙上に於て最も詳細なる議論をなせり、其要旨は一昨年七月二十九日調印の議定書

によれば或一定の場合に際し、仲裁々判所を組織し、及び召集するの權能を有する三個の設備ありと云へども、仲裁々判所其のものに至つては決して常設のものにあらず、さて三個の設備とは即ちビユーロー、アンテルナショナール、ド、ラ、ペー、及コンセイル、アドミニストラチーフ、並にクール、ペルマナント、ダルビトラージ、の三者にして、第一は一の行政的設備にして文書、記錄を司り、第二は調印列國を代表する外交官を以て之れを組織の白耳義外務大臣を長とし、前者を組織し並に指揮監督するの外更に列國との連絡を司り、而して第三の設備に至つては之れ只仲裁々判開廷の場合に際し之れが判士たるべく各國によりて指名せられたるものゝ名簿のみ、以上の三者は之れ議定に所謂トリビユナル、アルビトラルにして、或格段なる場合に臨時開かるべき仲裁々判所の豫備的設備に過ぎず、而して此の等の設備は皆仲裁々判所の設備に對して一も發案の權限を有せず、蓋し此の發案權は調印列國に專屬し殊に關係國相方の同意に出でざるべからず、然るに今プール人の爲す所を見るに少しも裁判の性質を具へざる政治上並に外交上の問題を携へ來つて、權能なきコンセイル、アドミニストラチーフに向ひ之れが發案を囑願するとは不條理も亦甚だしと云ふべしと論じ結論して曰く。

プール人はハーグに於ける平和設備の秩序と成功に向ひ最大危害を加へんとする者なり、何となれば彼等は同設備の性質を誤じて之れを外交紛爭の裁判所たらしめんと欲するものなればなり、元來ハーグ設備は斯る紛爭の判決に適せず、設立の意思も亦茲にあらず。云々

北米大統領死後の政變

北米合衆國大統領ウイリヤム、マツキンレーは去る九月六日バフアローの汎米博覽會々場に於て無政府黨員の狙撃する所となり、同十四日の午後に至り『諸君さらばよ、余は今より神の道に向はん』とて遂に不歸の旅程に上り、副統領セロドル、ルーズベルトは乃ち憲法規定に從ひ直ちに憲法に誓ひて就職を宣したり。

爾來米國の新聞雜誌が或は新者大統領の評論に或は無政府の非難に殆ど其全面を埋むるは元より其所なり、而も就中吾人の最も知らんと欲する所は此不幸なる出來事が同國の政治上に如何なる影響を及ぼすべきかの問題なり。

サテ此問題を解くべき恰當の鍵は新大統領其人の副統領論に若くものなけん、氏は前々回の大統領撰擧に際し、副統領の人撰に就き從來の慣例即ち一の慰藉として落撰の競爭者（大統領候補）を以て之に當つるの弊を痛駁し、副統領の候補者の亦大統領候補と同黨同主義の者を擧げざるべからざるを切論したり其一節に曰く。

副統領も亦大統領當撰の基礎たる主義と見解を持し、黨の要路に立ち領袖連の信用を保ち大統領一たび欠ぐるあらば直ちに代つて圓滑に國政を主宰し敢て政治の變動を來さゞる底のものならざるべからず、云々。

氏が年來の副統領觀已に此の如し、今回の承繼が米國の政治上に格別の變動を與ふることなきは之に依りても畧推測するに難かちず、今更に之れを就職の誓言に徵せんか、

余は今茲に誓言せん、余はこの懿愛なる邦家の平和と繁榮と及び名譽のために故大統領マツキンレーの政策を絕對的不變に繼續せんことを期す、(下畧)

此の如くにして氏は内閣の一員たりとも敢て之れを更迭せざりき。

ルーズベルトはハバード法科大學の出身にして三度撰ばれてニューヨー

ク州の立法府に入り、二十五歳の時已に同州共和黨總代として同黨の合衆大會に臨み、頗る多端の公生活をなし、寸暇あらば即ち讀書に耽り、歴史、政治並に文學等の名著少なからず、又或は紐育に保安委員となり或は海軍次官となり、米西戰爭に際しては進んで義勇兵となりて殊功あり、後紐育州に知事として治績大に見るべきものあり、職に在ること二年遂に撰ばれて副統領となり、今回マッキンレーの逝去と共に當然大統領の職に就けり。

氏は本年僅に四十三歳にして斯る年少者が大統領の重職に就きしは同國建國以來未だ嘗て其例を見ざる所なり、即ち氏の先任者二十五名中五十歳未滿にして就職したるものは僅にグラントの四十七歳、クリーヴランドの四十八歳及びピーアスの四十九歳の三名あるのみ、此に一の注目すべき點は彼の身邊何等の情實なきこと之れなり、彼は先きに固く候補を辭したるに拘らず遂に撰出せられたるものなれば何人と云へとも彼が當撰を助けたるの故を以て或は倚子を求め或は行動の自由を妨ぐる權利を有せず、彼が内閣の一員をだも動かすことなき現狀を持續し得るは全く之れが爲めにして我國に於けるが如く他の勢力の之れを牽制するものあるにあらざるなり。（評論の評論摘譯）

海外雜纂

露國の教育と古語

昨年以來の學生騷動にて頑迷無類のサスガの露國も多少覺る所ありしものと見へ、皇帝は文部大臣ヴアンノヴスキーに令して騷動の禍源を根治するの策を施すべきを命じたり。大學の改革に至りては今尚調査中にありと云へとも中學の分に意外に其歩を進め、文部大臣によりて指令せられたる特別委員會は已に其調査を了りて之れを報告し、自由論者は彼等の久しく渴望したる改革の今や實行せられんとするを見て大に之れを歡迎しつゝあり。蓋し改革の目的は近世の理想を採用し以て當今の必要に應ずるにあり、而して改革の要點は中學に於ける古語の教授を廢止したることなり、即ち中學に於ても從來希臘語並に羅典語の如きもの必修科目にして殊に主要の地位を占め此等の古語に通ぜざるものは斷然大學に進入するを許さず、爲めに現時活用の語學並に科學は捨て之れを顧ざりき、然るに右改革案によれは希臘語は全然之れを廢止し、羅典語は隨意科として之れを教授することゝなれり。已に採納せられたる此改革案は明後年度より愈々實行せらるべく、而して當局は直ちに之れが準備に從ふ可し、今露都新聞のヴォスチーの評論を摘記せんに。

古語を隨意科とするは恰も之れを全廢すると異ならず何となれは露國に於ては大學生と云へとも必修の義務なきものは決して之れを學ばざればなり、去れば三十年の間露國教育組織の主要素たりしものに向て今此に別を告げんとするものなり。

思ふに西歐諸國に於ても亦等しく早晩古語に告別するの時あらん、而も我が告別は聊か彼と趣を異にす、彼にありては多年薰陶を受けたる良師に袂別するの情あるべしと云へとも我に於ては即ち然らず、蓋し古語の我露西亞に於ける嘗て何等の貢獻する所なく却て國民の思想の發達を抑壓しつゝありしなり。

讀者果して讀むか

之れ彼の所謂高等灰殼の輩が第一耳を掩ふて逃走すべき問題なり、蓋し彼輩は書籍を目して一種の室内裝飾と心得へ、自己の身邊に嚴しく展列したる金文字の書籍も表題と挿畫の外は嘗て目を通したることなきなり、併し此弊習は各國共に通有なるが如し左に掲くる統計は紐育公開圖書館のオーサ氏が同館の借覽者に就て作製したる處にして近着のリテラリー、ダヒゼストがクリチツク紙上より轉載せるものなり、之れに由りて見れば讀者の多數は只一片の好奇心より種々の書物を借出して之れを玩弄するに過ぎさること第二卷は第一卷より、第三卷は第二卷より號を逐ふて次第に借覽者の減少するによりて明なり。

種類	卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八
歷史	一〇、一	六、九	四、九	四、四	四、六	四、三	二、五	二、八
傳記	七、二	三、一	三、〇	二、三	一、六	一、〇	一、六	一、二
旅行記	九、二	七、九						
文學	七、三	五、九	三、五	三、八	五、三	六、六	一九、〇	一五、〇
美術	四、七	三、七	三、〇					
科學	五、二	二、七	一、五					
小說	三、〇	一八、九	一五、八	一六、〇	二六、〇		一六、〇	

羅馬法王と暗殺者

無政府黨員ナタール、グラヴイノヴイツなるもの羅馬法王を暗殺せんとして果さず、十月九日遂に羅馬警察の爲めに捕縛せられたり、彼兇漢生地ダルマシヤを去るに臨み、同類者に向て、羅馬府に入り法王ラムホラを暗殺せんと欲する旨を語りたるより端なくも事漏れて彼が海路伊太利に向へるとの飛電伊太利警察に達したり、然るに警官の無能なる彼が上陸地アンコナに於て之を捕縛することを得ざりしを以て兇漢は悠々羅馬府に至り、一度ならず二度までもバチカンの宮殿に潜入し、ラフアエル、ロツヂ宮まで奥深く進むことを得たり、然るに彼は旅費缺乏のため彼方此方の旅宿を彷へるより遂に警官の注視する所となり、ピヤナコロンナ橋上に於て天網にかゝれり。(パブリツク、オピニオン)



雜録

老子思說

長井金風

老子の哲學は、印度に關係ある、老子の哲學は、印度より若しくは中央亞細亞の地方を經て、間接に印度の思想を承けたものであらう、これは何人も浮ぶ想像である。元來老子は、歷史上曖昧なる人物であるが、其の實、三人を一人と誤傳したので、それで司馬遷なども、迷ふたのである。

　老彭――老聃――李耳

と、から三人あるので、老彭は、即ち論語に、孔子の述而不作、信而好古、竊比吾老彭と言つた人で、孔子より先輩で、此の人は殷に生れ、周の守藏室の吏となつたのである。守藏室は、三皇五帝の書を司るとありて、三皇五帝の書とはバビ、ロン、アッシリヤの古文書のことで、支那人はカルディアから移住して來たので、洪水以前のバビロン古史を傳へて、これを支那の上古史と思つて居る位で、元は楔形文書（即ち科斗文書）が澤山保存せられて居たもので、是等の文書を藏する周の帝室圖書寮の書記官で、それを當時の篆文に書改めた人で、即ち飜譯業に大功あつた人であるから、孔子は、之れを稱したのである。孔子は元よりバビロン古書に通せざりしに、何故老彭に比すと放言したるやと言ふに、孔子は五帝紀などを信ぜざりし人にて、『尙書』を刪修するについても、當時迄、尙々半鬼神的なりし堯舜を凡俗化して、聖人といへる、唯の人間に引下けたりしかば、抹殺博士の惡評を受けて、世評擾々たりしを以て、自ら辨疏して、述而不作、信而好古、竊比吾老彭と言立てたるにて、自意を以て堯舜古傳を刪りたるに非らず、忠實に古史を祖述し、信じて、古を好み、決して之れを抹殺し、破壞したるに非らざるを辨じたる也、然れども孔子は堯舜以前は、支那に於ける史蹟に非らずと疑ひ、黃帝紀まても、丸で信ぜざりし樣子は、『大戴禮』の記する所なと、能く其の事情を彷彿し得たりと思はる。

扨此の老彭の後に、老聃有り、これは孔子同時の人にして、孔子の禮を問ひたる人なり、莊子に記する此人の言行を、彼れも寓言、此れも寓言と、總べて架空の搆造談に押片付くる人あれとも、我輩は若く斷すること

と能はず、哲學を組織したるは、此人なるべしと思はる、然れとも此の哲學は、老聃自身の發明に非らすして、印度傳來のものなることは、周穆王の時、印度より幻人の來りたることあるなど、既に業に彼我の交通開け居たるのみならず、域外の言語文字には、家學の素養ある老聃の、早くも彼れを觸接するに至れるは、事情有り得べき所なり。李耳は戰國の人にして、今の『老子』の書は、或は此人の手に整治せられたるに非らずやと思はるゝ節無きに非らず。然れとも、其の書の根本は、夙に存在したるものにして、莊子に有焱氏の頌として引き、列子に黃帝書として引用せられたり、此の有焱といひ、黃帝と云ひたるは、支那當時の言語文字と異りたる原書ありて、其の文字言語の異りたるものは、總べて之れを黃帝のものと信じたるより生じたる誤傳なるべし。元來黃帝は有熊黃帝にして、有熊は黃帝の都する所と韻會に見ゆれとも、熊は乃來切にして、音ナイなるを以て熊黃帝(ナイクンテイ)は、即ち Nakhunte にして、シスアナ王の稱號なれば、轉じて彼等種族酋長の稱呼に用ゐたりしなるべく、誰と定まりたる人あるに非らざるなり。

老子の書は、古來注疏紛然たり。歷代の藝文志に其の目を存して、其の書の早く亡佚せるもの極めて多かるべきも、明の焦竑か『老子翼』を作る、引く所尚八十四家有り。河上公本は僞書なるを以て、最も古きは王弼注なり、弼は周易、及び此書を注し、此書に於て、殊に其の長する所を用ゐると稱せらる。蓋し漢魏の世は、支那にて思想最枯竭の時にして、中に王弼の如きは、稍珍異とすべき點無きに非らず、其の易を注して象數を黜け、義理を言へる如き、一見識を出して、讖緯の失を糾したり、然れとも、要するに時勢未た熟せすして、纔に陳吳の功ありといふのみ、老子注の如き亦然り、之れを以て金科玉條と爲すが如きは、愚の太甚しきなり。

從來注疏の誤りは、王弼之れが俑を作ると雖も、又精しく老子の書を讀まざるに坐す。老子の宗旨は道(タオ)の一語に在り、老子の道は、印度哲學の梵(ブラマ)に酷似す。少しく耽讀すれば、彼此の契鎖を發見する難きに非らざるなり。然るに王注に遮られて、後の讀者をして、此に進む能はざらしむ。殊に明、清諸家の小巧、或は中庸に附會し、或はナマヂイ佛敎にコヂツけんとするなど、益々老子の本旨と遠からしめたり。

王注第一の誤謬は、第一章、河上公の所謂體道章に所

謂無名、有名を注して、凡有皆始於無。故未形無名之時。則爲萬物之始。及其形有名之時。則長之育之。亭之毒之。爲其母也。言道以無形無名。始成萬物。以始以成。而不知其所以。元之又元也。と言ひたるに在り。後來注家遂に此の範圍を脱すること能はず、凡有皆始於無と謂ふなり、無名——有名、即ち無名より有名と、直系的に進歩發展するものと做せり。吾人今老子を細讀するに、決して無名之時、有名之時と謂ふが如き意味に非らずして、（無名有名）と同時兩存するの意明かに見ゆるを知るべし。故に老子の哲學は

道 ＜ 無名
　　 有名

と立てたるものにして、道は即ち梵に當該するものなるを以て、無名、有名といひ、常無欲、常有欲といへる二特徴Lingaを同時兩存するものとなしたるなど、老子哲學の胚胎する所を求むるに、太だ揣摩し難きに非らず。『莊子』に老子之道。建之以常無有。主之以太一の語有り。即ち常無、常有の二法門を立て、之れを主とするに太一を以てするに在りの謂にして、是亦後の注家が太一——常無有となすが如き、本來の意義には非らざりしなり。第六章、谷神不死の章に於ても吾人は、

谷神 ＜ 元
　　 牝

と見んと欲す。元牝を一語と見る説多くして、道教徒（タオイスト）の養生説を爲すものは、却つて元と牝とを離して見るのみ、レッグ氏の英譯にも、此章の細注有り。吾人は此に於ても、矢張、元と牝との二門として見んと欲するを以て、元は事相を離れたる唯一實在を指し、牝は差別相に依りて見るべき道の形を指したるものと做さんと欲するなり。蓋し此くして讀み將て行けば、老子を解するに於て、刄を迎ふるの快ありて、從來注家の不透明を救ふに足ること少からざればなり。

老子哲學は尙羯羅Çankaraの移入なりとは言はじ、韋陀の東漸なることは、爭ふべからず。而して老子を解するは、宜しく彼に由るの捷徑にして、羯磨の如き沈一貫の如き、林希逸の如き一體の枝葉を認めて、根幹と做し、到底家數の小を免れざるものゝ與かる所に非ざるなり。道德經中の特殊語については、吾人別に『老雅』の稿有り。

天才の戀

青柳有美

〔第四段　多情〕

世に有りふれたる騎手は、一人者にして漸く僅に一頭の馬を御するに足るのみなれども、野戰砲兵は、一人者にして、同時に能く兩三頭の馬を駕御す。もし夫れ曲馬師に至りては、十數頭の馬匹をして、悉く一令一鞭のもとに動きて、整然毫も亂れしめず。凡才は尋常の馬乘りなり。一人一時にして、たゞ一人の女のみを戀するを得べし。天才は曲馬師なり。能く同時に數人の女を戀し、綽々なほ餘裕あるを得む。是に於てか、古へより問ふものあり曰く『男子、同時にして果して能く二人の女を戀するを得べき乎』と。基督未だ地に降らざりし羅馬の世、グレチヌスなるものあり、早く既に之れに答えて、その仲々に行はれ難きことなるべきをいへり。然りと雖ども、其友にして名高き詩人なるオーヴヰッドは、此ることとの決して難からざるものなるを說き、之を反駁する己が閱歷を以てせり。然り、一人の男子にして同時に二人の女に戀すること、必ずしも不可能事に非ず。されど、これ難事なり。之を能くするもの、それ唯非凡の天才にある、故に以爲らく、天才は曲馬師の如しと。尋常の凡才は、其技量甚だ拙劣にして、到底一人者を越えて戀すること能はず。その情愛のいたらざるものある、即ちこれに盡く。然りと雖ども、天才は既にもいへる如く、智能の發達、萬人を凌いで顯著なるものあると共に、其感情の發達又著しきものなれば、凡才の一人者に注いで以て盡くるところのもの、これを二人に注ぎ數人に注ぐも、なほ盡くることなく、しかも其間自ら綽々たるを得るなり。譬へば、無能の拙劣なる人は、その頭腦誠に單調にして、たゞ僅に之を一事に働かしむるに止まれども、勝れたる才能ある人士は、腦中それ〳〵の分業ありて、一人者ながらも、能く萬事に行き渡り、或は政に預りて治國平天下の計を案し、或は美術哲學文學を味ひ、或は田圃に入りて農事を樂み、而して矛盾の些か此間に在る無きが如し。されば、智能に於ける天才の多能は則ち感情に於ては一轉して多情となる、「多能」ひとり登揚せらるべくして、「多情」豈にひとり唾きせらるべきの理あらんや。「多能」ひとり天才の榮にして、「多情」ひとり天才の咀たるべけんや。同時にして二人以上

の女に戀するを得べき技量なる「多情」はこれ寧ろ天才天賦の特質として之を崇め敬はざるべからず。凡才の漸く一人者を戀して以て足れりとなす如き、如何ぞ之をのみ美德といふを得んや。寧ろ憐むべきことなり。是に至りて思へば、多情にして能く數人の女に戀するを得るは、是れ天才に伴ふ自然にして、決して責むべきものに非るなり。

又戀に於ける多情は、譬へば重音々樂を聽くが如し。曾て「それがし」なる田舍出の代議士あり、一日東京音樂學校の奏樂堂に四重音唱歌を聽き、歸りて人に告げて曰く、小學の兒童も猶ほよく之れに勝りて巧に歌ふを得べし、何んぞその亂雜喧噪なるやと。此くの如くにして、單音の唱歌に悅び重音に苦痛を感ずるは、是れ未だ聽覺の發達鋭敏ならず、全く樂耳を欠くものゝことのみ。されど聽覺の微妙なる發達を遂げし人士に至りては、單音唱歌の如き、到底聽くに堪えざる所なり。而して天才の感情の發達せるは恰も鋭敏微妙なる樂耳ある人に似たり。單一の女に戀することの如き、實に單調極りなくして、到底この間に快味を發見する能はず。猶ほかの樂耳ある人が、複雜なる種々の樂音の一時に我が聽感を刺戟せるうちに、自らなる調和を發見し、以て限なき樂みに驅らるゝ如く、一時に多くの女を戀して、その複雜なる感情發作のうちに、始めていひ難きの快味を發見し、以て悅ぶなり、たゞ一人の女をのみ戀して、これをのみ無上の快樂無上の美德と心得居る者の如きは、かの田舍出の代議士先生の共に音樂を談るに足らざる如く、共に戀を談ずるに足らぬものなり。多情のうち、豈に矛盾あらんや。されど、重音々樂のうち、又メロデヰーなるものありて、旋音を組成する樞軸音となる如く、天才が多くの女を戀するに當りても、また特殊の情感の、特に一人の女人に注がるゝもの、素よりこれなくんばあるべからず。ゲーテは能く巧に此の邊の消息を漏らし、自ら古き戀人シャールロッテに告げて『御身に對する我戀こそ、他のくさ〴〵なる細かき仇心の、よりて以てつなが[illegible]かゝる糸に似たれ』といへり。此くの如くにして、ゲーテの多情は、遍く世に知らるゝところにして、事珍らしといふまでもなけれど、樂人シュウマンも、世に珍らしき多情漢なりけり。シュウマンの最も熱せしは、ナンニーと稱ぶ乙女にして、この娘子の前には聖なるマドンナに歸命頂禮するが如く拜し跪くを辭せずとまで宣揚せしが、又これと共

にリデ井ーなる一女子にも懸想し居りしもの丶如く、その遺せる日記類などに徴して之を考ふるに、日夜これ等の兩女子に對し、等分に想を運ばせしもの丶如し、又クララヴ井ーク女史と契縁の約をなせし後にも、自ら其女子に告げて『余は常に佳人を視る毎に、之を賞讃するの惡習慣ありて、快味の誠に制え難きものあり。されど、時に及んで乞ふ幸に怒るを止めよ』と云へることもありしと。ハイチの從妹アマリーに戀して殆んど狂するが如くなりしは、素より覆ふべからざる事實なり。然りと雖ども、そのハムブルヒに行きボンに行きベルリンに行きハノヴァルに行くや、必ず至るところに艷聞を傳えて毫も辭せざりし如き、又面白からずや。これも亦同じく獨逸の詩人なるヴ井ーランドは、多くの失戀を重ねて後、遂にヂユリア、ボンドリーなるルーソー門下の一女生に戀せしが、その女仲々のしたゝかものにて容易にヴ井ーランドが熱情を信せず、一日皮肉の問を以て責めて曰く『卿は決して余以外の女を觀てしかも之れに戀せざるを得る乎』と、ヴ井ーランドは稍々其答に窮せしもの丶如くなりしが『此くの如きはこれ確言すべき限に非ず。世にもし卿に勝りて美はしく、しかも卿の如く淑德圓滿にして又憐むべき事情にある女あらば、或は之れに戀することとなしといふべからず』と斷定せしかば、事又遂に破れたりしと。以て天才の士の、如何に多情なるかを知るべし。もし夫れ以太利の詩人アルフ井エリに至りては、一院の比丘の舉げて教室に會するを觀、悉く之を戀せりといふ。言稍々過ぎたるに似たれど、必ずしも不稽のものに非るべし。知らずや、天才の戀は、固定して拘泥する如きところあるなく、その何れより來り何れに行くを知らざる風の如く、變幻容易く捕ふべからざるものなるを。

〔第五段　華美〕

物質を熱することと激甚なれば、必ずや光を發して燦然人の目を射るに至る。是れ物理の定法なり。此くの如くにして、狂熱炎々燃ゆるが如き天才の戀は、又自らにして光を發し、華美眩然人目を驚かすものあるを常とす。知らずや、細小なる白金線を取りて、これに高度の電氣を送れば、忽ちにして能く發光し、所謂電氣燈をなすに至ることを。天才の心は假令へば細小なる白金線の如し。これを充實するに戀愛の非凡なる溫度を以てす、光なからんとするも豈に得んや。世に天才なるもの丶戀を觀るに、多くは華やかにして、華美の

象あり。かの能辯者と雄辯家とが、その聲音語調の抑揚頓挫によりて、己が所說の瑕瑾を飾り、これをして頗る華やかに又華美なるものたらしむるが如く、左程までならざる我が戀を、事々しく騷ぎたて書きたてゝ、これに實質以上の花を添え、觀るものをして其の華美甚しきもののあるに驚かしむること、これ天才の戀の一特徵なり。かの詩人の詩と歌とは、是れ白熱電燈とも見るべきものならずや。されど天才の戀が往々にして世間の非難と道德屋の譏とを受るは、素より其多情にして移氣あるなどにもよれど、一には又此くの如くはなやかにして華美なるもののあるにあり。

己が戀に力めて花を咲かせ、あること無きことと並べたつるもの、天才の間に比々相接すと雖ども、その最も甚しかりしを、伊太利の詩人ペトラークとす。この人や千三百二十七年以降廿一ヶ年の間、ユーゴー、ド、サド夫人なる人妻を戀ひし、常にこれを我が詩作のうちに歌ひて、終始情熱の炎々たる如きもののあるを示せしと雖ども、ペトラークが果してこのサド夫人を心より戀ひし居りしや否やは、誠に疑はしきもののあるほどなり、かのダンテの如きは、天才中の最も沈着なるものにして、決して輕躁浮薄の傾なく、又その戀愛の如き、天才の戀に通有なる多情移氣等の性を帶ぶることなかりしが、そのビヤトリチェに對する戀をして、また盛に華やかに華美なるものたらしめざるを得ざりしなり。ダンテの戀如何にプレトーの向上主義戀愛たりしとはいへ、かの『聖劇』に現れたる如く、しかく美はしく華やかなるものならんや。

されど、其戀を大袈裟に飾りたつるの故に、乞ふ天才を責むるをやめよ。知らずや、天才とは素と是れ天地間の撿微鏡にして、凡才が觀て以て小事となすことも之を一大事なりとして、自ら感じ、又しかく世間に宣べ擴むるの天職あるものたるを。然らば天才の己が戀を觀ること重く、これを華やかに吹聽するといふも、別に他意ありて然るに非ず、たゞ天才の天職と天賦の性質上、また止むなく其處に至れるなり。しかも、多くの文學と藝術とは、天才の戀にこの特徵あるの賜ものにして、實に其光輝を發揚する所因なり。

〔結〕

世には愚者多し。此種の徒、天才の戀の甚だ危險の分子多きを觀て、その世間を誤まること甚しかるべきを恐れ、これを罵らざるべからず、又責めざるべからず、となさん。されど、此くの如きは杞憂のみ。凡才は如

何に悶くも遂に凡才なり。到底天才の戀を學んで而して早熱し熱狂し移氣あり多情たり又華やかならしむるを得るものに非ず。何ぞ爲めに煩らふを要せんや。凡才の如き如何にするも天才の戀に臻り難きものなるを。しかも、天才の世に出るや甚だ稀なり。されば、天才の戀に是等の特徴あるの故に、殊更ら現今の所謂社會道德なるものを亂るが如きこともなかるべし。憂世家幸に憤ふるを止めよ。死ぬるものは死ぬるものに葬らしめ、天才のことは凡て之を天才に委すべし。何ぞこれを責め叉罵るの要ありといはんや。（了）

秋の山里

堀内新泉

我が尋常三年生の時で、年はたしか八ッであつたが、母が故郷の片山里で、實に愉快な秋の一ト日をおくつたのを、爾來二十年も過去つた今日でも、猶わが心にありありと覺えて居る。こゝでも彼處でも算盤の音パチパチと忙はしく、誰も彼も血眼に成つて、厘毛を爭ひ合ふ都そだちの我が目には、稚な心にも何と無く懷手のしたくなる程世離した片山里の迫らぬ景色が、太く愉快に見えたものだと思はれる。

＊　＊　＊　＊　＊

天のいかにも美しく晴れた、九月中旬の土曜日であつたが、私は學校から下つて來て、御父さん只今、御母さん只今を云ひも終らず樂しき家族の群に入り、御晝の御飯を皆と一緒においしく食べて仕舞た所に、圖らずも裏口から、御免なさい、御異狀も無いかト頰被を取りながら、朸に藁苞と紺の手織木綿の風呂敷包とを擔つて入つて來られたのは、近頃久しく見えなんだ在所の伯父さんで、何時見ても私は虛言は吐きませんト云ふやうな顏付をして居られる。

誰よりも眞先に、この伯父さんの顏を見た私は、直に思ひ出したことがあつたので、それを聞かうとする間も無く、オヽまあこれは御稀しい、つい御不沙汰を仕ましたが、在所は何方も御異狀無いか、さあ先ア何うか御草鞋をト客を待遇す兩親に私は話の機は取られて仕舞つたが、伯父さんの身には誰よりも私が側に近寄つて居た。

四十餘の脊の低い、色の黑い、目のくりくりとした、よく肥つて居る伯父さんは、まだ御腰もかけられず、秋の日向の暖かな御椽先に風呂敷包を據げながら、こ

の頃の在所は秋の收穫が忙しうて、頓と京にも出て來られず、つい不沙汰を仕ましたが、それは先ァ此方にも御異状無うて何より頂上、ハヽ泥臭い在所の土産は何時も〳〵こなん物、御珍しくもあるまいが、芋に自然生ソレ栗に柿、些とばかり持つて來ました。イヤ最も關つて下さるな、今日は草鞋も脫つては居られぬ、またその中にゆッくりと泊りがけに參じませう。イヤ最う御話は濟みました、今日は同道衆があつたので、三條あたりであッさりと一緒に今こそ食ッたところ。はい〳〵米は取れました、土用の照込にも中分無く、潤ひも亦おもひ通りに行き、暴風も幸い無かつたので、今年はザッと二割の增作、先ァ〳〵これで百性も助かりますト云ひ〳〵早くも伯父さんは、風呂敷を小さく疊んで懷中に入れられる。

先ァ一寸でも御懸けなない、御茶なと一ッ吞つて御出てト茶盆片手に御母さんは伯父の前に御出でなさる。勸めても今日は座には上らぬと見られたものやら御父さんも、火鉢と倶に伯父さんの前にズッと御進み成される。

それぢや先ァ御茶一ッ呼れて行かうかト伯父さんは始めて御腰を懸けなされた。また大人同士の御話が始まつてはト氣が揉めるので、伯父さんト呼びながら私は脊後からその岩のやうな肩に手をかけて、姉さんは何故一緒には來ないのト云ひ〳〵黑い顏を覗き込んだ。

折あしく茶碗を取つて、腰をかゞめ、今一口がぶりとやらうと仕て居られた伯父さんは、不意に私の身體の重みを受けて手元が狂ひ、ゆらりと溢れた御茶は褐黃の股引の股の所を圓く濡らした。

アレまあ孝ちやんト消魂しく御母さんは御叱り成された。御父さんも倶にヂッと御睨み成さつたのに、獨り伯父さんは莞爾成さつて、オヽ坊ト魂消たやうに圓い眼を見張り、些と見なんだ間に、ま、勝う大きう成つたな、今學校から御歸りかト板のやうな手に頭を撫でて下さつた。私はこの時不平らしく頭を振らずには居られなんだ。最う先刻からこの戶袋の蔭に居て、伯父さんばかりを見て居つたト怨むやうに私は云つた。あ、左樣か、伯父さんは又少しも知らなんだ。坊は學校にあがつてから、一度も在所にやつて來ぬな。何うぢや、今日はこれから伯父さんと一緒に在所に行かうぢや無いか。イヤ最う姉さんは勝う御前を焦れて居て、孝ちやんは嘸大きう成つたであろ、一度彼の兒の顏が

見たい、都合が宜かつたならば、切て一夜宿にても何うか伴れて來て貰ひたいト云ふことであつた。それからこの栗と柿とは彼から御前にやつてくれいト云ふことであつた。

私が先刻から早く聞きたいト思つて居たのは、何を隱さうその人の消息であつたのだ。それで無くても戀しいのに、今また斯う云ふ可懷しい便を聞いては、消炭の燃え立つやうに私は在所の姉さまの顏が見たい。イヤ最う私が目にはその美しい顏が見えて來て、孝ちやん、孝ちやんト呼ぶ優しい聲が、何うやら耳に聞えるやうである。

伯父さん行かうよ、これから一緒にト私はぴよこぴよこ飛上り〳〵伯父さんの肩を搖りながら兩親の顏を見れば、何方も笑つては居られるが、別段私の思立をば拒みさうな色などは少しも見えぬ。

さあ、それぢや行かうト伯父さんは煙草入を腰に挿しつゝ御立ち成された。孝ちやん行くの、眞個にト御母さんは莞爾笑つて私と伯父さんとの顏を見比べながら次第に依つてはと云ふさまで、はや立つばかりに手を突いて居らッしやる。私は點頭いた。伯父さんは最う伴れて行くものとして、それぢや二三日借りて行きまする。若し私が送つて來られぬやうならば、その時は又誰か確乎した者に送らせますから心配成さるな、さ、坊やボツ〳〵行かうト云ふことに成つた。

最う占めたものだと心窃に喜んで、私は其邊を飛び廻らずには居られなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

九月十三日の日の暮であつた。炭竈の烟淋しき八瀨の里をも何時しか過ぎて、はや夕霧のうつすりと立渡つて居る小野の里曲に一人の賤の男が歸つて來た。その幅廣き脊中には、新しい海軍帽を被り、荒い縦縞の黄八丈の筒袖に、これも同じく筒袖の眞岡の三紋付の羽織を着、佛蘭西革の新しい編上の靴を穿いた可愛らしい少年が、ふらり〳〵と眠つて居るのを物珍しげに近寄つて、里人の少くも四五人位は、必ず首を傾けて見たてあらうが、それは即ち伯父さんと私とであつた。

この日私は伯父さんに伴れられて、籠の鳥の戶を開けられた思ひを爲しつゝ、油の小路の家を出た後の暫時は實に非常な元氣であつた。三條通を眞直に市中を離れる頃までは實に伯父さんを追越したが、次第〳〵に道の險しくなるにつれて、足も元氣も雪の消えるがやうに盡き、果は幾度も立止つて、秋の水に臨む蛙の

やうに、首をかたげて思案に暮れることもあつた。
伯父さんは同道の里人に荷物を頼んで、何うか關はず先に歸つて下さいト云ひ、私の前に幅の廣い背中を出して、坊や、さア來い。まだ年弱の八ツだもの、無理は無いのト笑つて云つた。

他人ならば、いくら見棄てても、斯う氣安くは飛びつかれなんだであらうが、これを遁しと待兼ねて、針の磁石に吸はるゝやうに、私は伯父さんの脊中にぴッたりと負さつた。併し赤ン坊とは違つて、何處までも負さつて行く譯には行かぬ。私も伯父さんの脊に飽き、伯父さんも亦草臥れる。其處は二人の話合て、互ひに融通を利し合つて、道の宜い所は歩き、また險しい處は負さつて、終に小野の里には近付いたが、最うこの時は足が悉皆疲れて仕舞つて、私は伯父さんの脊にふらり〳〵と居眠りし、おい坊や、最う直だから目を開いて居るのだぞと注意せられる毎に澁い目を開くには開いたが、この時ばかりは最う鹽に揉まれた菜の葉のやうに成つて、道すがら樂しんで來た戀しい〳〵姉さまのことも私は心に忘れて居た。

オヽ孝ちやん來たねト忽地呼れて、私は電氣をかけられた人形などのやうにがッくりと顔をあぐれば、十三夜の月は穩かな海のやうな天に光も清くかゝつて居るが、それにも勝つて美しい今年十六のお里といふ我が戀しい姉さまは、早くもその撫肩の脊をば私の方に差向けつゝ、明かな月の光に眩しいほど色の白い顔、氷に洗つた玉のやうな涼しい目を一年振で私に見せながら、さあ姉さんに入らッしやいなト月に調ぶる琴の音のやうな優しい聲で促した。

おや吾儕は一足先に歸るから、坊は好きな姉さんに負さつて來いト云つて、伯父さんは私を脊なから脊へと姉さまに渡し、アヽ最う中々重いわト云ひ〳〵例の廣い脊を伸し、二歩三歩先に行つたが、やがて振返つて、里や買物は最う先に着いたらうなト問ふた。はいト姉さまは返事短く伯父さんを遣り過して、孝ちやん久しく會はなんだねト云ふを始に、色々なことを聞く。

板のやうな伯父さんの脊よりも、姉さまのは幅が狹うて、ふわ〳〵と和かで、太く負され心地が好い。アヽ私は生涯姉さまの、この和かい暖かい脊で、斯うして暮したいなト思つた。また左樣することが出來やかうかト私は尋ねて見たかつた。

霧に咽んで瀨の音亂るゝ山川の緣をポッ〳〵行きな

がら、孝ちやん在所は淋しいでせうが、でも又歸るのト姉さまは問ふた。姉さん何う仕やうト私は最う久振で會つた初めの流石に少しは極りの惡かつた瀬は過ぎ去つて馴々しく問ふた。ホヽ、孝ちやんの飽まるまで今度は何うか居て下さいなト云ひ終つて姉さまは私を重げに揺りあげた。あ、左様せうト思はず私が力んだ時には、向ふの山で鹿が鳴いて、姉さまは下には水のチヤラ〳〵と流れる細谷川の獨木橋に、いとしや藁の草履を寒げに穿いた雪のやうな片足を今蹈みかけたところであつた。私は姉さまの肩にチッと攫みついた。姉さまは直ぐ私の心を悟つたと見えて、ホヽ、孝ちやん怖いのト問ふた。怖かァ無いやト云つたは虚言で、私の兩手は姉さまの肩を切りに締めるのであつた。

兎に角私は姉さまの脊に移ッてからは、清水で顔を洗つたやうに目がはッきりとして、少しも眠く無いやうに成つた。何んと無く私は嬉しいわト姉さまは橋を渡りつゝ獨言のやうに云つた。

橋を渡つて、一ッの急な坂を上ると、煤けた障子に何れは榾火の赤く映ッて居る賤ヶ伏屋は、私の御母さんの生れた家で、またこの優しい姉さまの家だなト思へば、私は少しも早く彼の圍爐裏の側に行きたいなト思つた。

御母さん、ソレ小い御客さまト云ひ〳〵姉さまは上框に私を下した。何うだ、隨分重いだらうト伯父さんは暖かさうな爐邊から例の黒い顔を表の方に向けて笑つた。おゝ〳〵孝ちやん、これは〳〵ト伯母さんは私を爐邊に誘うて、今夜は後の御月見の、山家は山家らしい御馳走を私の前に色々列べて、さあ〳〵トすゝめて下さる。これは何、これは何ト私は一々物珍しく姉さまに挾んで見せて聞きながらどッさり食べた。

御飯を食べて、私は爐の火に暖まつて居る中に、またふら〳〵と眠氣が差して、流石戀しい姉さまの聲にも、私は最う御返辭が出來なく成つた。小供と云ふは罪の無いものだなト伯父さん夫婦の云ふ聲が、私はこの時百里も先の方に聞えた。それと倶に私はぐらりと顚れるやうに眠り轉けたが、その後のことは何んにも知らなんだ。

枕に近く妻戀する鹿の聲に、不圖私は夜中に目が覺めた。物靜かに片山里の秋の長夜を照す燈火の光に見れば、私は戀しい姉さまの、善く肥つた和かい雪のやうな手を枕にして、肌暖かう寐ね居つた。

姉さまはト見れば靜に目を閉ぢて、色白き顔を夜半

の燈火に照させながら、左も心地快げにスヤ〳〵と浮世を他所に眠て居つた。裏の谷川の音はチヤラ〳〵と耳に響いて、軒端に迫る前の山では、時々鹿が鳴いて居る。

四邊森々として、私は如何にも眠つかれないので、姉さん〳〵ト一二度呼んで、白い胸を押しては見たが返辭が無いので、私は又元のやうにその胸に額を着けて、眠入つた眞似を仕て居る中に、何時かまた心持よく眠入て仕舞つた。

その翌朝のことであつたが、何んだか急に肌寒く成つたので、不圖目を開けて見ると姉さまは早床を離れて、私の枕元で紅い帶を締めて居た。姉さん最う起きるのト頭をあげて私が問ふたら、姉さまは帶を太鼓に結びながら嫣然して、私は最う起きますが、孝ちやんは先アゆッくりと御寐つておいで、昨日は嘸草臥れたでせうねト云つた。ちやア僕も起きやうト暖かい床を離るれば、姉さまは直ぐ着物を着せて、淺黄縮緬の帶まで締めて下さつた。

姉さん御顏は裏の川で洗うのねト云へば、ホヽ善く覺えて居らッしやるのねト云ひ〳〵姉さまは寐床を上げて、さ、それぢや御一緒に行きませうねト二人一緒に奥から出れば、孝ちやん御早う、ま、最少し姉さんと寐て居なされば宜かつたのにト伯母さんは笑顏美しく仰有つた。

さあ孝ちやん、御顏を洗つて來ませうと姉さまに促されて、裏の谷川に下りて見れば、ポッポと烟を立てながら和かさうな綺麗な水が潺湲と流れて居た。我は此處で姉さまと一緒に口を嗽ぎ顏を洗つた。孝ちやん獨で拭けますかいと姉さまは手拭の新しいのを私に渡しながらまた莞爾して、まあ孝ちやんの善く肥つて、御色の白いことト云つた。私もこの時姉さまの顏を以て、小兒心にも美しいなト思つた。

秋の朝の天は一面に藍色爲して、華やかな旭の光がチラ〳〵と枯木の露に光つて居た。姉さまは平い石の上にしやがんで、顏を流に寫しながら、櫛を一寸水に浸けては、器用に髮を搔いて居た。いかにして今日の一日を二人樂しく遊ばんかト語りながら歸つて見れば、伯父さんは最う一仕事やつて來て、草鞋穿いた儘爐邊にあがり、左もおいしさうに黒い御飯を食つて居たが、坊や何うした、在所は何んにも面白いことが無いなト仰有つた、さ、孝ちやんや御飯を御食りな、里や御前も一緒に御食べ、そうして今日は栗や柿でも一

緒に取つて、この兒を遊ばして御遣りなさいなト云ひ〳〵伯母さんは御膳を出して下さつた。里も今日はゆツくり休め、兼て御前が待兼ねて居た御客さまが見えたからト云ひつゝ伯父さんは御笑ひ成さつた。姉さまは一人娘で、伯父さんにも伯母さんにも、この上無く可愛がられて居るのである。

二人が御飯を食べて、御辨當を持つて、各自に鎌と籠とを持つて家を出たのは、最早彼此十時頃でもあつたらう。今から思ふと色々な無邪氣な話を續けながら手を取合つて、前の山に上つて見れば、其處には栗が口を開いて居る。彼處には柿が最う花のやうに熟れて居る。朱實がある、胡頽子がある、菌もあれば、山葡萄もある。紅葉は今が眞盛で、中に銀杏葉の黄色なのも美しく、春の山は色々な花で五色に彩られるが、秋の山は又色々な木の葉で五色に彩られて居る。ア、綺麗だ、こんな處に居れば氣が伸々とするやうだ。ア、私は一生こんな山里で暮したいものだなト思つた。

彼處此方と落葉を踏んで場所を轉じ、栗を拾つたり、柿を取つたり、我を忘れて仕て居る中は、日は最う正午過に成つた。木株に腰かけて御辨當を食べたが、實に身に着くやうにおいしかつた。午後も亦山を彼此廻る中に、二人の籠には、最う栗も菌も入り切らぬやうに成つた。

さあ、最う孝ちやんや歸りませうねト姉さまの云つた時には、最早日沒に間も無かつたが、私は未だこの樂しい秋の山をば、この儘去るのは惜いものだなト心から思つた。

姉さん今日は面白かつたね、僕はこんな面白いことは今日が始めだつたト山を下りつゝ姉さまの袖に縋つて私が云つたら、それは宜かつたのね、ぢやア明日は又孝ちやんと彼の向ふの御山に行きませうねト姉さまは紅葉燃え立つ向ふの山を指差して云つた。

誰とか語る谷川の聲を次第に近く聞きつゝ落葉深き細途を二人仲よく話し〳〵麓に下りついた時には、烏の聲も鎮つて、明日は雨やら一路の生暖い風がそより〳〵と姉さまの髮のおくれ毛を靡かせて、靜な秋の山里は、はや蒼然たる暮色に包まれ、入相の鐘の音ゴーン〳〵と遙に西の方に聞えて居た。

今夜も亦圍爐裏で栗を燒きながら、姉さまと私は色々な話を仕て、鹿の聲を聞くとも無しに聞いて居つたが、やがて一緒に寢床に入つて、實に心持よく眠に就いた。

（終）

詞藻

漢詩

代々木口號　　中島無外 鈍胤

卜居西廓外。不受俗塵侵。雞犬四隣遠。松篁三逕深。
餘齡只閑適。逸興或幽尋。親舊多離索。與誰談素襟。
老來疎懶甚。辭客掩柴扃。暮靄林横白。秋晴山送青。
愁邊詩易就。病後酒仍停。世上紛々事。莫教吾耳聽。

取語甚直、計思匪深、忽逢幽人、如見道心、司空表圖所謂實境者便是、

次韻、　　谷如意鐵臣

門巷絶塵迹。任他苔蘚侵。心閑無事累。境靜似山深。
挂壁琴三尺。蔭檐松百尋。此中幽趣足。明月照虚襟。
優恩賜閑暇。養病臥林扃。秋入鬢髯白。山迎雙眼青。
開籠放鷴去。分榻引雲停。蕭寂夜窓下。松風供靜聽。

不欲英雄欺人、不肯傚孟摸古、從心所欲、而不踰矩、渾化自然、情景兼具、眞是藝苑耆宿、感佩不止、

讀白河樂翁花月草紙　　鈴木訥堂

有女登厠時　猫兒必追侍。咆哮如於莵。眈々裂目眥。
朝暮常如斯。人以爲怪異。女父携寶刀。寒光駭鬼魅。
一揮斷猫頭。頭顱飛入厠。厠中有巨蛇。和頭血並墜。
流血紅淋漓。餘腥撲口鼻。始知赴主難。聞之皆墮涙。
報恩不遂質。殺身以濟義。

結末十字、人之所難、而一小畜能爲之、可謂奇事、宜哉、樂翁取爲訓誨之義、

山下有茅屋。綏々狐來窺。主人退不去　餕餘以食之
日々狎如狗。守門不暫離。一日有慶事。主人新娶兒。
娶家太忙劇。不顧狐之飢。狐怨噛兒頸。入山不復歸。

近之則狎、遠之則怨、滔々天下、皆是狐耳、

猛鷲行　　箕作一溪

陸奥國舊南部領某村、有鷲、攫九歳兒、一搏盤空、偶漁民相聚、視之大鼓噪、鷲驚而棄兒、不知所往、兒墜地氣息奄々、百方治療、纔得不死、土人云、國中雖多高山峻嶺、未見如此猛鷲所栖、蓋來自鄂羅者乎、因作猛鷲行、

天空海闊何澄清。狂飈颯起穹蒼鳴。忽見猛鷲飛掠地。
萬木震盪群鳥驚。翼如車輪眼如電。鐵爪鋭利經百鍊。
一搏攫兒盤九天。六翮生風疾於箭。爺孃望之殆欲狂。
驚魂動魄斷寸腸。手無弓矢身無翼。泣號呼兒仰彼蒼。

漁民鼓噪勢相助。聲如霹靂鷲亦懼。兒脫群手墜於天。海山茫々不知處。回首鄂羅隔蒼洋。積水淼々邊雲黄。嗚呼碧眼朱髯猛似鷲。五大洲中恣翺翔。

鄂羅之鷲、鷙悍好鬪、貪婪不知饜、燕山雞林、屢見風毛羽血之慘、豈唯一兒之危害乎、

淺草公園謁瓜生岩子像

瓜生氏。賢而慈。開庠序。育孤兒。百姓亂離後。賑濟主博愛。孤獨賴其惠。不翅免凍餒。爲母又爲師。辛勤三十載。芳名達天聰。藍綬旌其功。嗚呼廟堂百有司。不及東奥一老嫗。絲竹聾其耳。不聞怨聲滿田圃。錦繡眩其目。不見餓莩載道路。

詩人設題、如此則裨補名敎、豈其尠少乎、雖雲刻露、徒糜楮墨者、可以愧死也、

過東臺有感　　加藤江村

眼如嶽下電。身似澗底松。一代功名盡。儼乎仰威容。丹心憂社稷。勤王第一功。廟議多枝梧。顚連猶憂忡。決然脫簪組。尊鱸逐秋風。柴門竹屋下。獨有黃犬從。一夜風雷動。叱咤驅羆熊。埋骨故山土。極目陣雲濃。煽亂非其志。誰復知英雄。漫以淮陰比。寃恨應無窮。遺像默不語。雨淋苔蘚封。老杉與古檜。翠色何葱龍。日暮林鴉散。湖畔夕陽舂。樓臺半臨水。隔岸聞歌鐘。

誰家貴公子。門繫五花驄。太平三十歲。四海醻酣中。安得九泉下。風雲起蟄龍。

起手突兀、巨刄倚天、英雄面目、躍如紙上、中幅次序整齊、一結無限感慨、可歌可哭、煽亂四句、議論公平、足以使南洲翁瞑目於地下、

暮秋到函山瀛車中作　　藏野黄雨

奔車破曉逐霜晴。山驛水村秋氣清。不管滿城風雨近。黃花時節上行程。

自滿城風雨近重陽句脫化、用意縝密、

過湯本村雨至

車窓風景足怡顏。坐過溪村竹樹間。頗似泰西新畫本。雲烟一憕雨中山。

憕字妙不可言、

答人　　新居湘香

自是乾坤容腐儒。一竿風月老江湖。紛々世事慵傾耳。笑指群盲評古圖。

作者臨池研精、縑素堆案、暇則賦詩、善諧解頤、池上本門寺作云、行香誰是得倔々、打皷鼕々不暫停、大悟開基七百歲、南無妙法蓮華經、余一讀噴飯、

嘲鼠　　村松朴齋

蕭然環堵中。何物響簌々。先從廚下來。暗中時瑟縮。

枕上窃相窺。膏竭無燈燭。
跳梁不畏人。公然登几蓐。
主人嗜文章。撑腸三萬軸。
歲豐猶泣飢。妻兒有菜色。
汝嚙盡殘書。安得充口腹。
不如辭我家。去食大倉粟。
紅腐如邱阜。貪饞其所欲。
汝族多栖此。便々肥於犢。

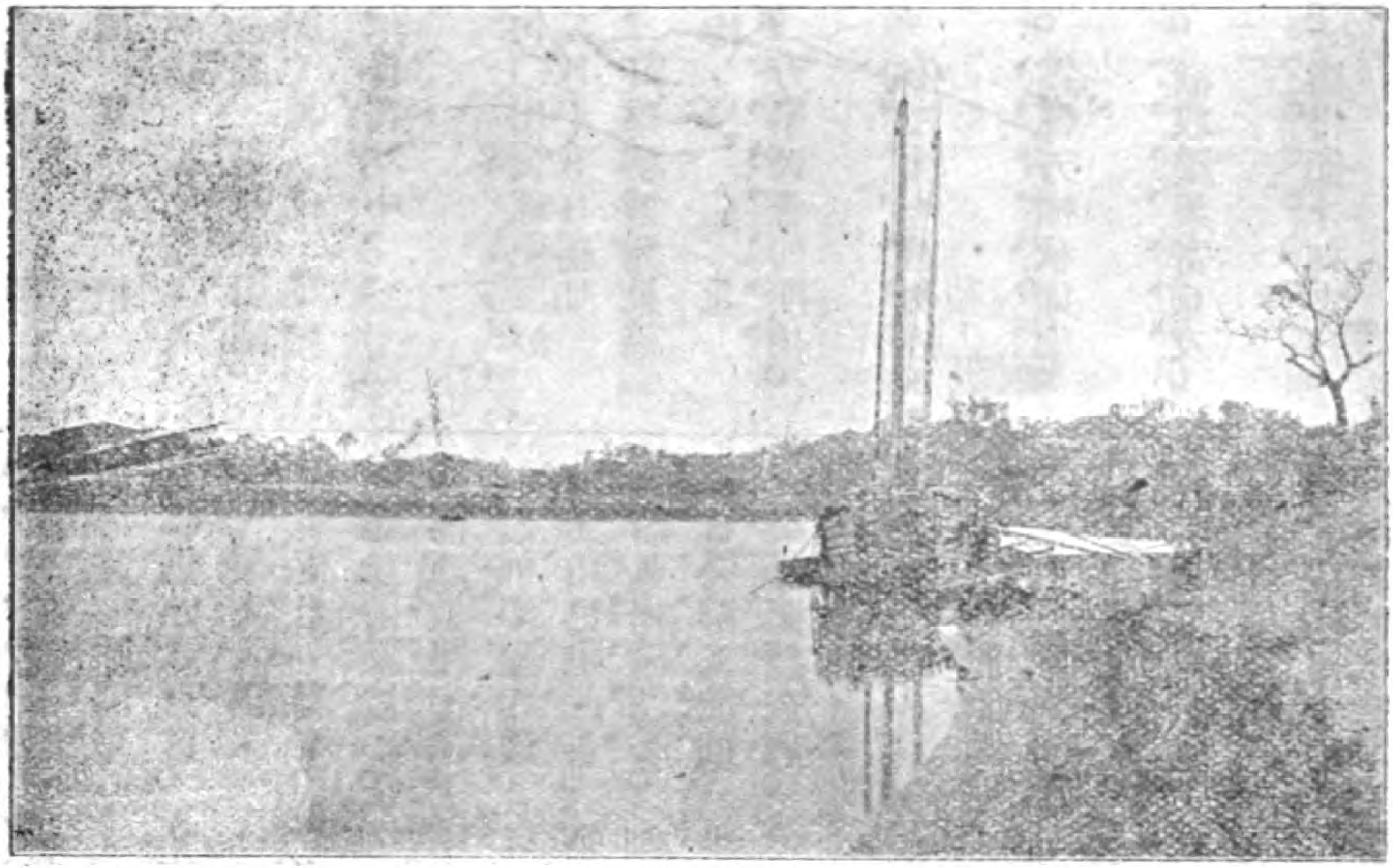
嘲鼠所以自嘲、自嘲反自誇也、文人狡獪技倆、往々如此、

田園雜詠

課題應募五十四首
選錄四首

（天）　秋山皓庵

南畝理荒穢。種秫待秋收。
幸無風雨患。辛苦有所酬。
釀酒招親戚。團欒暫歇留。
古琴彈一曲。松籟響屋頭。
移步東籬下。菊花香欲流。



掃苔踞石上。客去柴門幽。
人生貴行樂。齷齪何所求。
四野暝烟合。歸禽向林投。

沖淡之趣、眞個柴桑遺音、

（地）　新井敬義

地僻無賓客。白日掩柴荊。
樽中酒正熟。獨酌聊慰情。
桑柘烟曖々。雞犬夢不驚。
田園有餘樂。何必慕虛榮。
唯聽繅車響。不知絲竹聲。

收束用力、覺有幾分英氣、

（玄）　增田晃陽

何處寄此生。桑麻百畝宅。
稼穡不知艱。終生與俗隔。
門前長青苔。絕無輪蹄迹。
脩竹間草花。點綴補牆隙。
飯後讀陶詩。幽味堪尋繹。
倦即訪隣翁。出門林月白。

人生貴適意、何必願富榮、

儀秦之徒、不値一笑、

（黄）

酒井忍軒

五月分早秧。濛々雨如烟。十月收晩稻、蕭々霜滿天。
清晨戴星出。薄暮帯月還。富貴非吾願。百歳老田園。
稼穡有餘暇。讀書課兒孫。

稼穡之暇、申以孝悌、天下至樂、自在其中、

課題

讀李鴻章傳

七言絶句〇川箋郵便はがき〇十二月十五日締切

右は本郷區根津須賀町十、町田柳塘宛投稿

游晃雜詩

梅原龍北

松杉寂々水潺々。絶代英雄去不還。万斛民膏何所用。朱樓金閣映秋山。

茅鞋一路水潺湲。路出秋林万壑間。停杖沈吟君勿怪。可無名句答名山。

巖骨峻嶒瓓似刪。幾條飛瀑挂雲間。霜楓万樹秋如染。十里吳綾蜀錦山。

滿目林楓紅欲流。短蓑衝雨過溪頭。欲收墜葉寄京友。自是晃山一片秋。

銀河直瀉五千仭。奇勝無人不仰瞻。願得仙才如李白。淋漓醉墨賦華嚴。

霧鎖深溪曉未開。瀑聲轟豁勢如擂。媧皇未補碧天破。万仭銀河傾瀉來。

烏鵲橋頭轟百雷。立筇誰不叫雄哉。白雲碏礴凝爲水。流作層々大瀑來。

湖樓夜老一燈深。身宿晃山第幾岑。覺破十年煩惱夢。閑聽秋雨灑波心。

隣樓洒散罷笙歌。微雨蕭々夜半過。知是湖東人未睡。一燈如夢隔煙波。

波光山色曉沈々。宿霧纔消天尙陰。應有詩人供詩料。自搖孤棹向湖心。

兩日優游人欲仙。如何我未脫塵緣。歸裝伴得山中物。一朶丹楓懸在肩。

久不接温顔、思慕甚切、偶誦玉什、塵腸一滌、頓覺兩腋生風、感謝感謝

柳塘源妄批

龍北詞兄、見似游晃雜詩、余亦曾遊其境、吟賞低徊、頗爲得意、而今墜塵壒、次韻以遣懷、

白雲深處水潺々、一路羊腸往又還、嗤我塵寰淹滯久、夢魂依舊繞名山、
清溪一道碧潺湲、十里松蘿隔世間、歸隱何時求勝地、風流飽學白香山、
舊題詩句幾回刪、覊思浮嵐積翠間、健筆驚君能縮地、

向吾表堵疊靈山、

嶽色湖光翠欲流、紅楓黃錯白雲頭、欲知造化丹青妙、須賞中禪寺畔秋、

千秋覇業推東照、海內蒼生所具瞻、今日九泉枯骨冷、映林金碧尙莊嚴、

鴻濛當日五丁開、巨刄相磨萬嶽摧、餘勢劈天猶未止、銀河直作瀑泉來、

隔雲山上殷殷雷、絕壁停筇喚快哉、瀑勢生風霜葉散、驟然紅雨撲顏來、

由來法海不知深、豈問須彌第一岑、半夜湖樓風浪靜、鏡中明月證禪心、

有客湖樓對酒歌、綺霞林末夕陽過、孱顏也學美人態、淡抹臙脂蘸碧波、

鬟髮山頭落日沈、濛々水氣半峰陰、天寒使知秋來早、雁字成行映鏡心、

羨爾風流逐謫仙、休言我未脫塵緣、歸來夜々名山夢、定有天妃笑拍肩、

柳塘源 率作

時雨

紅綠 選

堀川をしくれて通る猿廻し　梧葉

山寺は狸の宿もしくれけん　梧葉

網を曳く熊野の浦の時雨哉・　鬼水

道樂の坊主頭にしくるゝよ　豔叫子

山茶花にしくるゝ窓の机かな　美淸

刈り殘す稻に門田の時雨かな　紫川

古頭巾途上時雨に逢へりけり　虛游

枯蓮の鴨の集まる時雨かな　芋村

時雨るゝや北野の家の神送り　同

はらくと柿の落葉に時雨けり　北舳

時雨るゝや囁やく樣の烏二羽　同

しくるゝや鷄頭枯れて背戶の畑　同

爐開せんそゝろ心や夕時雨　同

しくるゝや湖を隔てゝ五重塔　輪月

大根を洗ふ小川や村時雨　啞平

町端の旅籠に泊り夕時雨　吐雲

鯱鉾に夕日の城の時雨かな　素水

蕪村忌や時雨れて集ふ根岸庵　皎雪

しくれつゝ三日月洩るや岡の杉　同

供人は馬に後れて時雨かな　削玉

自炊して葱買に行く時雨かな　稻青

湖の声聞に舟や夕時雨　平蟹

宗匠のしぐれ顔なる頭巾かな　仲堂
種下す表の畠をしぐれけり　活黨
山里や時雨來る夜の菜雑炊　同
大根にしぐれ蕪にしぐれけり　天風
しぐるゝや日の筋薄き雲の様　同
傘さしてお染久松しぐれけり　生巢
取入るゝ時雨の布子濕れにけり　同
いさかひの人ちり／＼にしぐれけり　同

人

借り臼の幾日を庭に時雨哉　活堂

地

御天氣のとんび時雨の鴉かな　天風

天

時雨るゝや京の使の赤合羽　生巢

選者吟

しぐれして銀杏の落葉静かなり
しぐるゝや鷗とびかふ磯の松

傘さして小唄に山谷しぐれかな
しぐれきや頻りにくらむ沖の方
戀中は時雨に傘を借りしより

鷹　十二月十五日まで
水仙　一月十五日まで
毎號三才當撰者に雜誌一冊づつ贈呈



もゝはがき　（風韻社詠草）

○　佐藤大蛾

鷄頭や桔梗や庭の照りつよく秋の九十度きみ病みましぬ。

野川登る舟のともしは草に入りて月なき夜のうつら悲しき。

くま笹に露見る朝をやまかはの秋の水しむ虫齒のいたみ。

裏川の芙蓉の花に消えかゝる星のうらみを淋しとおもひぬ。

○　原柳涯

からす瓜赤きまがきに秋たけて照らす夕日のさて力なき。

ちぎれ〳〵雲とぶゆふべ雨そゝぐ芭蕉のやれ葉秋暮れんとす。

しかはあれどとても冷えたるこの世なり歌反古燒きて細筆折らん。

○　小池武俊

はかな事おもひつゞけてたゞ獨月に泣く夜を霜さえわたる。

母はあらず父はいまさず門に立ちて秋の夕べを獨し泣くも。



そよ〳〵とたそがれ時を風吹きて枯野はる〳〵馬子急ぐ見ゆ。

○　臼井學耕

ちどり鳴く松の濱みち風ながく高汐よせて月のほりたり。

木犀のかをる茶室に雨きゝて草紙よみながら知らす眠りき。

夕づゝに悲秋の歌をずしよせて遊子湖畔に世をばはかなむ。

○　門野三果

南へとさして鳴き行く初かりのつばさもたわに秋風ぞ吹く。

我妹子と共に植ゑたる糸萩の花のさかりを見らく樂しも。

吹き倒す起すたふるゝ案山子かな野分はげしき小山田

の内。

○　森　爵堂

秋の夜をわたに契りし君まちて洋燈の笠に繪をかきつくす。

松ばやし露ちり飛んで茸かをり霧立つあした只もずのこゑ。

拭ふべき手巾は高くかざゝれて涙は襟をつたふにまかす。(波止場に友を送りて)

○　都河不老

たゝかはん惡魔の群はおほくとも三尺ながし我が帶ぶる劍。

ふる鄉を戀ふる思ひのしきりなり三とせ旅居の雨の夕ぐれ。

見るを得ば三十五丈すごからん霧にとゞろく華嚴の瀧の。

○　古川堯居

習志野の十里のしもに月おちてあさがたさむき進軍喇叭。

庭かげの霜よりいでゝ風に立つ木賊ひとかぶ氣品は高き。

ふりしきる雪のたふげのくだりみち一箇分隊背嚢しろき。

○　百武泰彦

村はづれ酒屋かねたる豆腐屋にあめの霽れ待つ遊獵の人。

水かめの清水のこほり嚙む稚子に冬を知らせぬ母のふところ。

○　白柳秀湖

岡つゞき田つゞき榛の森つゞき殘月さむしむさし野の秋。

蘆三里、棚なし小舟漕ぎ入れて梁山泊をわれおもふかな。

○　高橋翠柳

雨はれて甲板(デッキ)の上に虹を見ぬ小とり飛び行く錫蘭のしま。

秋かぜのそゞろ身にしむ夕ぐれを鳥翔り行く北嵯峨の山。

○　菊池曉汀

夜をふかみ隣りの琴の音はやみて雨ふりそゝぐ庭の芭蕉葉。

○　鹽田香園

山すその秋の野守が引くひたに小鳥むれたつ夕ぎりの

そら。

くれなゐに照る日田のもをいろどりて畦ゆく牛の影長く行く。

○　渡邊光風

百舌の小、からすの大を罵つて雀のむれに迫らんけしき。

狂ほしくのゝしる百舌の百ごゑにすゞめ群れ立つ榛の木つゞき。

友の來のおそきをうらむ月今宵萩の袖がき露ひやゝかに。

二葉三葉もみぢ葉しづむいさら井の水底透きて小石貝白き。

解霜の小まどしたゝる朝晴を寒紅のばすいもか手すさび。

山のさび下木の老すぎ朽鳥居丹塗のほこらたふときろかも。

かね鳴らすゆふべやまでら門時雨咲きてなかばの山茶花もろき。

思潮

日本人種の混化を勸む

「日本人」　三宅雄二郎氏

我が日本人は種々の種族より成り、蝦夷人あり、阿爾泰人あり、馬來人あり、而して異種族の善く混化せるが故に、朝鮮人よりも優り、又た支那人よりも優りたれど、種族の黨徒猶ほ未だ盛んに行はれず、漸く盛んならんとして偶ゝ封建制度の鼎立せるに會ひ、爾來割據の風を爲すもの七百年、其の間自ら一隅に偏在して互に相ひ往來せざりしに非ず、自ら諸方に移轉して能く混化するは之れ有りしも、固より以て充分といひ難く、爲めに個々の風骨今猶ほ依然として存ずるを見る、往きに是をして一層混化せしめしとする、我が日本人は種族として更に一段の進歩を成しゝや必せり。而して今後に於ける種族混化の方としては成るべく國中離隔せる處の者をして結婚せしむるを可とす、即ち東方の者をして西方の者と婚し、南方の者をして北方の者と婚せしむべし、爾かせば翅に血族結婚の弊を免かるゝのみにあらず。固より混化の効は一代二代に見るべからざるも、國家の事は現在に限るべきに非ず、又た遠く將來を慮りて計を建てざるべからず、結果の遲に見るべからざる事に對し漸々歩を進むるは抑ゝ又た文明人の事ならずや。若し我が日本人を以て白人と比して劣るありとする、須らく先づ現在に於て大に奮勵すべし、以て能く彼れに及ぶことを得ん、而して更に一方に於て種族の混化を勸むべし、是れ以て能く遠きを致すを得ん。

宗教改良法五個條

「讀賣」　井上圓了氏

政府のなすべき改良方法は左の五個條に歸すとして詳論せり

第一は一寺の住職となり一教會の教師となりて人民の教導を任するものは、必ず文部省所定の中學卒業以上の者なるべき事、

第二は帝國大學中に教科大學の一部を置く事、

第三は宗教事務を文部省にて取扱ふ事、

第四は各寺院各教會は每週一回必ず教會を開きて教導の實を擧げしむる事、

第五は改宗轉派をして自由ならしむる道を開く事、

此五條に歸すべし、其他は皆之に附隨せるものに過ぎず、故に政府が宗教を改良する方法は、唯此五條を規定するのみなれば、何等の苦心も困難もなかるべし、若し之を他の改良に比すれば、意外に平易にして、而も其効績を擧ぐること速かなるは余が固く信ずる所なり、

我邦學生の實力

「警世」　松村介石氏

大學を卒業するも、其の專攻科の外は、殆んど他學に智識を有せず、通辯は出來ず、難書は解せず、漸く日々の筆記を暗誦して以て、落第の運命を免るゝもの多しと、之れ何が故に然るか、教師の不親切にもあらず、學生の不勉强にもあらず、唯だ夫れ中學校より高等學校より大學に來る迄、徒らに雜多煩瑣の學科を注入し、吾人が所謂『鼠嚙り學問』を授くるが故に、其詰らぬ事を覺ゆと同時に、學ぶを深からず、思想を錬るを極めて淺く、遂に獨學獨修の見識を得るに至らずして已むもの多ければなり。大學にしてすら斯くの如し、其の他の諸學校や知るべきのみ、其の中學校を卒業するも、其の高等學校を卒業するも、其の官立學校を卒業するも、其の學問にて獨步し得るもの極めて少なく、二三年を經過せば殆んど其の學びしものを忘失し去る者比々然り。

基督教各派通有の弊事

「六合雜誌」　川田繁太郎氏

（一）彼等は先づ世を以て惡の支配する所となし神を離れたる者となすが故に、神と親むに從ふて世に遠かるは是れ自然の勢にして、俗事を厭忌し事業を輕視するの氣風は多少彼等の免れざる所なり。且又彼等は神の特寵を有する者若くは神の撰民てう觀念の下に自から別世界を造りて他を睥睨し、教會に出入する者は其實際の如何を問はず救はるべき者として之を親むと雖、非信徒に對しては神の罪人てう觀念を連想して實際は如何に善き人と雖之を忌むの傾あり。斯くて道德上頗る倨傲にして且つ偏頗なり。（非世間的）。（二）次に又彼等が倫理上の着眼點餘りに主觀的個人的に偏し社會的ならず。從つて區々たる小惡に餘り拘泥して大善を忘れ易き傾あり。彼等の信仰ある者は常に顏色憔悴して自已の不信を嘆し若くは內を顧みて罪を悲むに心力の大部分を費し。且つ事を見るに只だ個人の罪てう點よりして世俗等の點よりせざるが故に。世の所謂細事に過當の道德的價値を置き、人を責め又自己を責むる只だ細事に於て頗る峻酷なり。從つて其鎖細を愼むと潔僻者の不淨に對する如く。遂に何事をも爲し得ずして無爲不活潑に了る者多し（非社會的倫理）。（三）又た或者はキリストを信ずる者は神の特別なる恩寵を有するが故に少々惡をな

すも悔改だにせば救はるゝが故に世の惡をなす者と同一にあらずとなし、以て不義を行ふて世より排斥せらるゝも尚自から恥ぢざる者あり(非倫理的)。(四)或は又た常に神と交ると稱して徒らに祈禱若くは冥想に耽り、超絶的思念に偏して世に遠かるを以て高尚なりとし、次第に世事に疎く甚しきは殆ど世事に無頓着にして世の禮儀交際を顧みず、果ては世の道德をも顧みず不義不德を行ふて而して內に自ら咎むる處なし。曰く「宗教は道德を超越す」と又曰く「宗教は道德の根本を修むるが故に宗教の奥義に達すれば瑣細なる道德は問ふを要せず」と(非世間的並に非倫理的)。以上は極端の例を云へる者も是れ有と雖、而かも是眞にキリスト教を信ずる者に於て大概は多少認めらるゝ事實なり。其他、人は神に事ふべき者にて、而して神に事ふるとは常に祈りて神に交ると會堂に出席すると傳道に從事し若くは教會の爲めに盡力するとにある者となし、力を政治經濟等の俗事に致して社會の進歩に貢献するが如きは宗教上餘り價値なき所業の如く感ずるは是れ殆んど信徒一般の感想と認めて可なり。とにかく今の基督教が幾分か非社會的にして且つ十分の倫理的効力を有せず、其實際の道德亦た世に卓越せる者ならざるは明なる事實なり。而して佛教加特力教等に至つては其非社會的非倫理的弊事更に甚しき者あり。

戰爭は二人以上にて爲し能はず。

「太陽」　佐々友房氏



佛國有名の大佐ストッフール氏と佐々氏の對談中の一節に

大佐曰く凡そ戰爭は一人にて爲すものにて、決して二人以上にて之を爲す能はざるものなり。彼の第一世那破翁が全歐を蹂躙し、世界を震動したる動作に對しては、世界の人皆佛國兵の强勇なるを嘆稱す。然れども事實は全く之に反し、佛國兵は敢て强勇なるにあらずして、尋常普通の兵士たるに過ぎざりき。然るに斯かる大活劇を演出したるは、皆是れ那破翁の方寸より迸出したる經營畫策の結果に外ならず。又彼の七十年役に於て、我が佛國が獨逸より散々に破られたるは、强ち獨逸兵の勇武なるにあらずして、全くモルトケ將軍一人の頭腦より割り出たる軍畧の結果のみ、故に戰爭は決して二人以上にて爲されざる、而かも一人專決のものなりと云はざるべからずと。

予曰く、大佐の卓說は余の如き素人と雖も、一々感服するの外なし。乍然モルトケは最早死したるにあらずや。而して貴國は二十年來非常の軍備擴張を斷行し、今や十分其整頓を告げたるなるべし。敢て予の大佐の高說を拜承したきは、現時に於ける獨佛軍事上の比較にあり。予は貴國の必ず最早獨逸に優り居らるゝならむを信ずと。

大佐は斯の時少しく色を變じ、ノー〳〵と連呼し、指頭を以て、卓を打つと三四、曰く、貴下は佛國〳〵と稱贊さるゝも何の據る所ありて言はるゝや。佛國の將校中、果して如何なる人物あるや。ゼネラル、ソーシエー一人は立派の名將なり、之を除くの外、佛國の將校中殆んど秀拔の技倆を具ふるもの一人もあらざるなり。其のソーシエーすら、殘念ながら、來年は佛國の軍事規則によりて、退職せざるべからざるなり。(佛國

の軍事規則によれば年齢七十歳より軍職を退かざるべからず）然るに之に反して、彼の獨逸を見よ、ワルデルゼー元帥以下、年齢五十歳以上の將校にして、親しく故モルトケ將軍の教育を受け、其力量智識の點に於て、相讓らざるもの既に五六名あり。故にモルトケ死すと雖も、尚生けるが如きものなり。是、我が佛國の容易に獨逸に企及する能はざる所以なり。

個人の自由と我國の僧侶

「慶應義塾學報」　加藤高明氏

英國人は個人と個人の間の自由と云ふことが、著しく發達して居る現象は、彼等は他人の説が縦令自分の意見と異なつて居つても、許して之を聽く、尊敬して之を聽くと云ふ、此風が最も盛んであります、日本人にはどうもまだ其處の所が十分發達して居らぬかと思ふ、自分の説が誠に宜いとは誰も信じて居りますが、自分の觀る所と異つた他人の説は容易に許さない、自分の考と違ふことを言ふと、其者は馬鹿である、氣違ひである或は邪道であると云ふ風が尚は盛んである、甚しきに至つては政治上のことに就て意見を異にして、人のする所が自分の氣に入らぬければ、或種類の人物等は直きに支那の秦檜とか云ふ例を出持して、國賊呼はりをすることがいまだ絶えない、大分近年になつて改良はして來たやうでありますが、尚ほ未だ絶えたとは言はれないと思ふ、其他宗教のことに就ても、道德の議論に就ても、自分の説と違ふ者はひどく惡く言ふ、殊に日本の坊さんなどは甚しいのであります、私は隨分名高い坊主に懇意なのがありますが其坊主の言ふ所を聞きますと、人の惡る口を言ふことは極く惡いと教えて居ります、傍らから耶蘇教を非常に惡く言ふ、耶蘇教は邪道である、異端であると云ふ、日本の坊主に聞いて御覽なさい、誰でもさう云ひます、自分の信ずる所と異なれば忽ちそれは異端である、邪道であると云ふ、實に執着の甚しいものである、併ながら日本の坊主には耶蘇教を惡く云つても宜いと云ふ取除けがあると見えます、（英國の文明と題せる演説中の一節）



犬殺しと兒童教育

「兒童硏究」　前田三遊氏

◎夏の或朝の事であつた。自分の宅の表を、多勢の人がドヤ〳〵と通るから、何かと思つて出て見ると、犬殺しが、下にシヤツこそ着て居れ、片肌ぬぎて、血の附いた太い棍棒を肩にして、衞兵の樣に列んで行くのであつて、その後から莚の掛けてある車を、曳いて行く者があつた。それは犬の死骸が積んであるので、見るからに不快に勝へなかつた。

◎時は既に午前七時で、人は皆起きて居る、兒童も皆起きて居る。其眼前を行く犬殺は、人、特に兒童に對して、どんな感覺を與へたであらうか、自分が之に付て感じたのは、（一）犬殺しの蠻風夷俗が、此都會の品

位を隘すもの少からぬこと、(二)犬を殺した血の、地上につき又は棍棒について居るのが、蝿其他の黴菌の媒介によつて、衛生上に危険を及ぼすこと、今一つは(三)兒童をして、殘忍殺伐な事を習はせることであつた。

◉動物に對する虐待は、やがて人に對する虐待となるのであるから、特に犬などを愛する、兒童の愛憐心は、之を養ふ方に導かねばならぬに、今目前、之を打殺す所を見せては、決して爲にはならぬのである。何でも人の眞似をする兒童は、やがて其眞似を爲るであらう。そこで犬殺しなどは、夜中又は未明に來るか、望むらくは、殺す可き野犬を一定の場所に牽き去つて、之を殺すことにして欲しいのである。

女子改良服の弊害

「教育時論」記者

一種の女子改良服、一たび工夫せられてより、漸次各地方女學校生徒間に用ひらるゝに至りしは、吾等の喜んで措かざるところ、たとへ、其製法体裁の、未だ十分完備せざる所あるにもせよ、とにかく女服改良上の第一着歩として、該種の衣服のなるべく廣く用ゐらるゝに至らんこと、吾等の希望して已まざる所なり。然るに吾等が近時當局者より聞くところによれば、今や改良服中、漸く外部の装飾を重んじ來り、嘗に其服地の華美高尚なるものを用ふるのみならず、其製法の如き、亦最初の考案と異なり、衛生上、便利上よりも、寧ろ一種の体裁を重んじて、之を裁縫するの傾向を生ずるに至れりと、實に遺憾不都合の事と謂ふべし。苟も眞に女服の改良を欲せば、最初の考案を基礎とし、更に思慮を加へて、改良を施こし、漸次完全の方へ近かしめざるべからざること、當然なるに、毫も改良に向はざるのみか、忽ち既に其弊を生じ、改良の精神を沒却せんとするに至りては、實に閑捨つべからざる怪事と云ふべし。此の如きは、學校長及校員の、十分注意して監督せざるべからざる所、其服地の如き、なるべく質素堅牢なるものを用ひしめ、其製法体裁の如き、衛生上便利上を主とし、徒ら優美の姿態を失はざらんことを謀らざるべからず、倘し徒に家庭生徒の爲すところに任し、毫も監督矯正するところなくんば、其結果たる、種々の弊害を生じ、遂に折角發達しかゝりたる女服改良上の進歩をして、中途に斷絶し、或は却て舊時の衣服を便利視するに至るやも知るべからず、當事者の責任も、亦大ならずや、吾等は改良服の漸次各地方に廣まりつゝあるを喜ぶと共に、種々の弊害の漸く發生し來らんとするを憂へ、此際當事者の十分注意して、弊害を撲滅するに勉めんことを、切望して已まざるなり。



評論

教育時論

他人の氏名の稱呼

警醒子

風俗改良會が決定した改良事項の中に「文章演説は勿論、對話の上に於て、人の氏名を呼捨にせざるを要とす」といふことがある。

人の服裝が、その動作や性質に及ぼす影響の大きいことは、誰でも經驗することとて、日本の女子の柔弱となつたのも、服裝がその起居動作の自由を拘制したからだといふので、何でも衣服を改良して、日本女子の動作を敏活に、日本女子の精神を活潑にしなければならぬと力んで、改良服の考案に腦漿を絞つて居るものが少くない。吾等も曾て本誌の上で、今の學生の服裝が甚だ亂雜になつて、各學校所定の制服を纒つて居るものが、漸く少なくなりかゝつたのを憤慨し、その彼等の精神に與ふる影響は、不規律放縦といふやうな惡弊であるからといふので、各學校の管理者に、制服の勵行を警告したことがあつた位である。

それと同じやうに、イヤ寧ろそれよりも強く且つ大きく、人の動作や性質に影響を及ぼすものは言語であらう。早い話が、衣肝に至り袖腕に至る的の衣服を着れば、ツイ緒太の薩摩下駄でもゴロつかせ、長大なるステッキでも振り廻はして、大聲で詩でも吟ぜずむば則ち犬でもケシかけたくなるものである「何をグズ〱して居やがるンだ、モットサッ〱と歩まンか」と怒鳴れば、その序にコッーンと一ッ拳固がお見舞ひ申したくもなる。優しい言語に伴ふ動作は優しく、ゾンザイな言語に伴ふ動作はゾンザイである。

そこで、今の一般世人に勿論だが、殊に學生の狀態を見るに、その服裝の不規律不シダラは言ふまでもなく、その言語のゾンザイなことに至つては、實に言語道斷なものである。「オイ田村ッ、貴樣昨日何處へ行ッた。」「オレか、松野のとこへ行ッたのさ、その留守へ貴樣はオレのとこへやッて來たッてナア。」「松野ッて誰だ。」「今度來た新米の英語教師しさ、あいつ會話は一寸甘いが、シミタレて居やがるには驚くよ、昨日も番茶一杯に金米糖十ばかりさ。」教場では鬼も角も「先生」と呼び、多少の敬語も使ふが、陰へ廻はれば忽ちこの

通りである。アヽ、自己の恩師に對してさへこの通りである、その他は推して知るべきではないか。

學生風紀の頽敗は事實である、そして言語が人の動作性質に影響することが著しいものであるとすれば、今日の學生のゾンザイな言語を用ゐるといふことが、その風紀頽敗の一原因であるとも言へやう。今日の學生をして、その言語を正しくさせたなら、少くともこの頽敗せる風紀の一部分丈は救はれるに相違ない。既にその言語が正しくなれば、その動作だけが依然としてゾンザイであることは六ケしいから。

然らばどうして今の學生の言語を正しくさせるかといふに、まづその第一歩として、第三人稱には、必ず、君とか樣とか氏とかいふやうな、普通に用ゐられて居る敬語を用ゐるといふやうにさせるのである。「何々君が」と切り出せば「あいつ」とも言へないし、「どうしやがッた」とも續けられない。

一躰面と向ッて遊ばし奉りながら、陰へ廻ッてとかうしやがるのは、巡査の居ないところで立小便するのと同樣で、不德の甚しいものである。向ッては縱令どうしやがッても、陰へ廻ッたら、君樣宜しくやッて頂きたい。吾等は、この意を以て、前記風俗改良會の改良事項を賛するのである。

生徒の稱呼

全國各種の學校の教師が、その生徒に對する稱呼法は、果して一定して居るかどうかは知らないが、吾等の見聞したところでは、呼び捨てにするもの、君をつけるもの、さんをつけるものなど、いろ／＼さま／＼あつて、一向きまりがないやうである。

父母はその子を教育すべき義務がある、學校へ入れてその子の教育を教師に託す、教師は即ち父母の代理者である、既に父母の代理者である、師弟の關係は、この點に於て親子の關係と同じことでなければならぬ。而して父母はその子を呼び捨てにするから、教師もまたその子弟を呼び捨てにするのが當然ではなからうか。しかし、親子間の愛情は、もと人性の自然に出づるものであッて、この愛情のために、子の名を呼び捨てにするせぬといふやうなことは、既に問題にならないのである。若し師弟間の愛情が、能くこの域にまで達することが出來たら、その時こそは、呼び捨てにするもよし、せぬもよし、時あッては呼び捨て、時あつては君をつけ、さんをつけるもまた妨げない。イヤ自

然にかういふ風に、呼び捨てにするせぬといふやうなことから超絶してしまふのが當然である。未だこの域に至らないで、呼び捨てにすることによつて、師弟間の愛情を濃かにしやうなどゝいふのは、本末顚倒の甚しいものであるし、又かういふ理窟だからかうだといふやうな、理窟責めで呼び捨てにするなどは、甚だしい心得違である。

苟も教師として生徒教導の任にあたる以上は、それ相應の威信を保たなければならぬ、威信を保つためには、生徒を呼び捨てにするといふことが、缺くべからざる條件であるといふ人もあるが、成程威を以て生徒に臨まなければ、生徒を教導することが出來ないといふやうな教師、換言すれば、能く師たるの徳を有せず、たゞ一日の長を以て纔に知識の切賣りをする外、何の働きもない今の謂はゆる先生方には、生徒を呼び捨てにでもして、辛くも己の威信を保つといふ必要は十分あるだらう、去かしこれは小學から中學位までの間に行はれるが關の山で、それ以上には困難である。

それから、女教師の女生徒に對する稱呼法は、また一個の例外をなし、高等學校以上、各種專門學校などに於ては、生徒の教師を教師と仰くは當然であるが、教師は生徒を友人‥‥學友として待たなければならぬものもあるだらう。要するに、教師の生徒に對する稱呼法は、各教師個人々々の意に任すべきものであつて、一學校、或は同種類の學校、或は各種學校が、通じて一定の稱呼法によるべき性質のものではあるまい、といふのが吾等の考である。

大學卒業生の實力を疑ふ

大學卒業生、即ち謂はゆる何々學士と稱するものゝ實力如何は、吾等の夙に疑惑に堪へなかつたところである。果然、高等文官試驗といふものは、明に大學出身者たる法學士の、實力の乏しさ加減を證據だてた。

今年の高等文官試驗は、論文試驗と迅速作文試驗とを通過した私立學校生徒百〇一と、大學卒業生七十人との競爭であつたが、合格者總數四十二人て、內十七人が大學卒業者て、二十五人が私立學校生徒であつて、遂に私立學校生徒に勝を占められたのである。

由來、高等文官試驗の委員と、大學卒業者とは、多く師弟の關係があつて、學派が疏通し、競爭上幾多の援護を有するばかりてなく、大學卒業者には、論文試驗、迅速作文試驗免除の特典があつて、競爭上非常に優勝

の地位に立つて居るものである。殊に大學卒業者中、成績劣等のものは、初ッからこの高等文官試驗などを受けやうといふ程の勇氣なく、無試驗の特典ある司法官試補や辯護士を出願するのである。大學卒業者中成績優等のものが、競爭上優勝の地位に立ちながら、かやうに見苦しい敗北を取り、我は法學士でございも凄しいてはあるまいか。更に彼等をして、私立學校生徒と共に、論文試驗、迅速作文試驗をも受けしめたなら、一層憫むべき氣の毒な結果を生ずることであらう。而して此くの如く實力乏しき彼等大學卒業者中の成績劣等なるものを、無試驗にて司法官試補や辯護士とするのは、危險の最も甚しいものであつて、且つ私立學校の生徒に對し、甚だ公平を失した處置といはねばならぬ。

世人は未だ肩書尊崇の夢から醒めないやうたが、それは吾等の關するところてはない。たゞ吾等は、實力なき大學卒業者に、諸種の特典を與へて、ます〳〵彼等を小成に安ぜしめ、彼等の依賴心を增長せしめ、彼等を浮華ならしめ、彼等を輕佻ならしむることが、甚しい國家の損失てあるといふことを悲しむものである。冀くば、當局の人、彼等に與へし總べての特典を奪へ、さうして彼等をして、彼等の力ありッたけの事をなさしめよ。是れ實に彼等自身のためでもあるし、又國家のためでもある。

學生の盜心

廿世紀最初の一年の評論の筆を、こんなことで結ばなければならぬといふのは、眞以て遺憾である。

圖書館の書籍を借覽して、書中に挾んである地圖や繪書を盜み取るものゝあるといふことは、吾等のしばしば耳にするところてあつたが、近來は更に一段の進歩(?)をなし、書中自己の必要とする部分を、剪り取るものさへあるといふことである。マア何といふ情ないことだらう。

まだそればかりではない、この頃書店の主人の語るところによると、今の學生は、極めて巧に店頭の書籍雜誌を盜み去るといふことである。彼等は學校よりの歸途、群をなして書店に立寄り、「アレは何程」、「コレはいくら」と、盛に素見しつゝ、自己の携へ來れる風呂敷包を、店頭の書籍雜誌の上に置き、十分店を掻き廻はした後、イザ歸らうといふ時に、その風呂敷包と共に、巧にその下なる書籍雜誌の一部或は數部を小脇に

抱へ込むのであつて、混雜の中、店員のそれに氣のつくことは、滅多にないとの事である。モハヤ墮落腐敗の沙汰ではない、實に彼等學生は國法の罪人である。アヽ、日本今後の社會が、こンな盜人、こンな罪人によッて、組織されるのであるかと思ふと、吾等はもう何ごとをも言ふに忍びない。

●ちりづか

（明治三十四年十月廿五日から十一月廿四日まで）（全）

◎菊地文相　が、兎角專門教育に厚くして、普通教育を疎にするばかりでなく、どうも大學派の勢力を、教育界に扶植しやうといふ傾きがあるといふので、若溪派の教育家連は頻りに不滿を鳴らし、折があッたら排斥の聲を高くして、一泡吹かして吳れやうと力んで居るそうだ、御用心々々々。

◎岩倉公爵　は、年々數千圓を投下て、學生を養ふさうだ。日夜酒色に荒淫して居る華族連中、チト此の岩倉公の美擧にあやかつてはどうだらう。

◎山川總長　先頃東京帝國大學新學生入學式の時、山川總長は、新學生に向つて、この社會の墮落を回復するは、青年諸君の任務であらうといふことを演說したが、その言中、『今や上は公侯より下は庶人に至るまで、奢侈淫靡の風を成せり』といふことがあッたので、文部省は、直に『貴下演說中、「上は公侯より」の一句は、不都合につき取消さるべきものなり』といふ一令を下したさうだ。ところが、山川總長憤然として、『我豈之を取消すの理あらんや、我は一點だも虛僞を傳へたるにあらず、我が言へる所は皆正確の事實なり、若し奢侈淫靡にして、社會の風紀を頹廢する公侯の何人たるを知らむと欲せば、不肖健次郞、敢てその姓名を示さむ、如何にや』と反問されたので、文部省も遂にそのまゝ泣寢入りになつたさうだ。アヽ、痛快この上もない。



◎政友會の教育案　同會の教育部に於て調査中であつた教育案の大要は、高等の學校に於ては、生徒の思想を自由にし、制限干涉を加ふべからず。普通教育は、維新の國是に基き、開進の主義を採るべし。智育の內容を改め、大に工藝的たらしむ。實業教育の普及を圖るべし。學校に於ける生徒の自由を擴張すべし。學校の待遇に公私の區別を立つべからず。等であるさうだ。

◎『教育界』　十一月三日、金港堂から出た。大きいし、それ相應に實もあるし、『教育學術界』と『教育實驗界』とを合併したものゝやうである。

◎『教育學術界』　再び定價を引きあげたが、その割合に善くなッたところは見えない。

◎『續國史大系』　を始めとして、『本居宣長全集』、『日本書紀通釋』、『八代集抄』、『五句索引和歌大觀』といふやうなものゝ豫約募集が、續々として廣告された。悉皆出來あがるまでは、褒められない。

社會評論

改良事項

紅水

風俗改良會は左の二十一項目を調査議決せり

（本項の訪問とあるは普通交際上の訪問なり）

一、訪問は午前九時より十一時午後は二時より四時（日の永き季節は五時）に至る間を通例とす但別に其時刻を約束したる時又は特に面會時刻を定めたる人を訪問する時は此限にあらざる事勿論なり

一、訪問の際に於ける談話は冗長に渉らず其時間は短少なる事を要す

一、訪問する時は名刺を出す可し面會せざる時と雖も之を遺し置く可し

一、訪問者には茶菓を出さゞるを通例とす

一、業務上の訪問は豫め時間を定むる能はざるも單に用務を談ずるの外餘事を語る可からず

一、訪問に用ゆる名刺は白色の紙質を用ひ總て裝置を附す可からず

一、訪問を受けたる時は努めて速かに面會をなし徒に其人を待たしむるとなかる可し

一、人と對話するに野卑の言葉を用ひざる樣注意す可し就中猥褻の事は堅く之を愼む可し

一、文章演説は勿論對話の上に於て人の氏名を呼捨にせざるを良とす

一、社會共存の義に由り他人の妨害をなさゞる事を勗む可し之を例せば

道路通行の際は左側を進行し人道車道の區別ある場所に在ては必ず人道を行く可し

途上に於て車馬又は步行者を追越さんとする時は必ず其右方に出づ可し又後方より呼聲を掛けられ避けんとする時は必ず左方に避く可し

途上に佇立し立談す可からず立談を要する時は偏隅に於てし通行人の妨とならざる樣心掛く可し

途上に出來事あるに際し其場所に群集し通行の妨碍をなさゞるとを心掛く可し

總て人に接し又は戶外に出づる時は見苦き服裝をなさゞる樣注意す可し

途上又は船車中に在りては容姿を端正にす可し船車中にありては無作法なる態度をなし座席を廣く横領し若しくは携帯品を取散らし或は酒宴に似寄りたる事をなし其外總て他人の迷惑を省みず我儘

の行爲ある可からず
渡船場又は停車場にて先を爭ひ混雜せざる樣注意すべし
劇場寄席等に於ては極めて靜肅にすべし多人數集會の席に於て濫りて私語をなし或は新聞雜誌等を音讀し又は濫りに自己の席を離れ或は徒らに出入をなすべからず

一、老幼婦女に對しては可及的力を添へ扶助する事を忘る可からず

一、公衆の眼に觸るゝ場所に設置する時計は努めて其時刻を正確にするを心掛く可し

一、回答を要する文書を接受したる時は努めて速に返信を發送すべし

一、案内狀は可成一週間以前に送るを冝とす

一、酒杯の献酬を廢止すべし

一、饗應の飲食物は其席に於て飲食するものに止め總て客人の持ち還り又は其家に送り届くるものなきを冝とす

一、虛飾無用の物品贈答を廢す可し

一、會葬の際は愼肅なるを要す

一、葬儀の節生造花放鳥等の贈物を爲さゝるを冝とす

一、會葬者に飲食物を差出し又は其馭者馬丁車夫等に飲食物金錢等を交付せざるを冝とす

一、旅店其他の茶代は一切廢止せしむる事を勉む可し

悉くこれ時弊に的中せるもの、中には一二直ちに斷行し能はざる事情のものあるべきも、多くは各人各個の注意に依て實行に難からざるものなり、文明國民、特に都府生活の人民に採つては、これ等の實行は是非一日も早く其新習慣となる樣したきものなり。

兵士の送迎

支那の兵隊の如く、日蓮宗の講中の如く、回向院の相撲場の如く、「祝何々君入營」の文字を書ける旗の、都會は勿論如何なる寒村に到るまでも、其入營時期に至れば到處に飜れるを見る、而して其時期は親類緣者は云ふに及ばず、村内町内を擧げてお祭の如く騷ぎ廻るなり、國家の干城たるべき兵役に就くこととなれば、送迎の熱心なるべきは素より其處なるべきも、現時の如き極端に走りては其弊一にして止まらず、

一、兵士を出せし家は少くとも二百圓を饗宴の振舞

に支出せざるべからず
一、中人以下のものに採ては爲に借金をするもの比々然り關西地方にてこれが爲めに身代限りをなせしもの多し
一、新入の兵士入營後金なければ故参の上等兵や軍曹輩に虐待せらるゝ事實有り茲に於て兵士を出せし父兄は學資を支出すると同じ
一、送迎の盛んなる、其旗數の多きは財産家の子弟程甚し、隨つて一様の義務に服するものに向て其送迎に大なる厚薄を生ず、中には父兄が自分の子弟が入營するに他に劣りては不愍なりとて賴み廻はりて旗數を揃へるもあり、或は之れも叶はぬ貧民の子弟にて、入營の當日、同じ町内の他の壯丁は花々しく送らるゝに自分は一本の旗一人の見送人もなきが耻かしとて、一定の時間に集まらざるものあり

流弊も亦茲に至て極まる、聞けば今回各師團にても此弊を悟りて其筋に交渉するところありしと、かゝる虚飾無用の弊は此際是非共一掃したきものなり

△　△　△

△無智國民跣足國民、我國民多數の風俗は猶支那朝鮮よりも下層にあり

△關西及東北の婦人と便所の關係は、我國醜風俗の第一

△時事新報の徒歩競爭は我國の健脚者が十二時間に七十哩以上歩むことの大難事なるを證據立てたり、九十哩の世界のレコードは到底日本人には破り能はざるか

△これ身體の弱きが爲に非ずして小なるが爲めなり、國民の體格を長大にすることは有ゆる方面より研究せざるべからず

△九州邊には近來中學師範生徒の朝鮮上海等に修學旅行すること流行せんとす最も歡迎すべき事

△岩谷商會二六新報村井商會、三者の關係に就て世間の風說頗々其眞相を知るに苦しむ、

△松平が大風俗壞亂者の一人であることは既に分明白吾人は唯此點に向ての二六の攻擊を快とす、

文藝評論

趣味の低落と女子

春湖

趣味の低落を唱ふるもの、これまで數多ありしといへども、社會はこれに反して、却つて逆さまに低落し行くものゝ如し。單り文學美術のみならず、日常動作の禮法より兒童遊戲の玩具にいたるまで、現今の社會は一として趣味の高雅なるものあらざる也。ことに婦人にいたりて最も然りとなす。このごろ上野公園に開かれたる女子美術協會は中流以上の婦人の作を集めて現

今婦人の平準なる趣味を示したるもの、しかも、その趣味概ね劣等にして見るべきもの一のあることなし。この一事を以てしても現今婦人社會の趣味低落せるを知るに足る。それ婦人は家庭に於ける趣味の本源たるべきもの、しかも、その趣味にして劣等なるにいたりては甚だ憂ふべきにあらずや。詩人文士は勿論、趣味涵養の任にあるもの、現代の趣味がかくの如くなるを思うてこれを發達せしめんと力むべし。

修養の時代

一部の文人が文學の輕んずべからざるを覺りて漸く實力を養はんとし來るは慶ぶべし。淺はかなる想像と僅かの文才とを以て讀書社會の輿望を充たし得たるは舊時のこと也。今にいたりては、もはやかくの如くにして輿衆をごまかし能ふべきにあらず。桂月氏が今年に入りて評者たるの勢望を失ひ、天隨氏の赤門文士評が文章評たるに止りしを嘲られしが如き、そのはじめ實力なきものを擔ぎ上げたる讀書社會の罪にして、二氏はもとより知る所にあらずといへども、しかも、その勢望をつなぎ得ざりしもの、主として學識の乏しきに由らずんばあらず。今後の文壇に立つて成功せんとせば、大に勵み大に學んで實力を養はざれば不可也。新進の文士は勿論、大家を以て自ら居るものといへどもその文學的生命を保たんと欲せば退いて深く修養を加ふべき也。

新聞記者としての水蔭氏

江見水蔭氏。『朝報』の「現今の新聞記者」に於て新聞記者として大に成功すべきものなるをいはる。余は、氏が新聞記者として成功すべきものなるか否かを知らずしかれども、もし『太平洋』を以て新聞紙なりとせば氏は、現在に於て、新聞記者として『朝報』記者の言の如くならざるもの也。何となれば『太平洋』は新聞紙中最も幼稚なるものにして、而して氏は實にその記者たれば也。

新聞記者と文士

余の見る所を以てすれば、今の所謂文學者先生は新聞記者として成功し得るもの、一人もあらざるなり。時代に通せず世相を知らず、學殖淺く、識見乏しく、たゞ文才と經驗とを以て一時の好尚と、現在の人氣とに投ぜんとする者のみ、何んぞ成功し得るの理あらんや。

かの豫め社主を賞揚し、而して入りて主任者たるを得たる某の如き、今、幸にその椅子安しといへども、遂に剝奪の悲運に會はざれば巳まざらん。これを要するに、今の所謂文學者先生は、新聞記者として、一の前科者たる野田正太郎にすら如かざる也。

「ゆく春」を讀む

（泣菫は頓想を重んず）

有美迂生

◎我れ藤村を崇仰し、晩翠を忌み嫌へど、泣菫に至りては、之を尊敬す。泣菫の詩や、實に仰ぐべきものなしと雖ども、敬ふべきものあり。

◎「暮笛集」と「ゆく春」と、その間果して如何の差違懸絕ありやと問はゞ、我れは古き集の甚だ無邪氣にして紅のリボン結べる垂髮の少女に似たるものありしに反し、これは稍々有邪氣にして年若き士官候補生に彷彿たる趣ありと答へんか。

◎泣菫の詩を讀んで、その藤村等と最も多く異るところを見るは、詩材のしばしば意想外なるほとりに狩り集められて、一讀奇抜の觀あることとなり。さればとてその奇抜なると意想外に出づるものあるとは、精細なる思索の結果に非ずして、作者の頓才の其間に發輝せしに因るなり。

◎平たく言へば、泣菫は思ひツキの早き人なるべし。されど、思ひツキの早き人は往々又はや呑み込みの弊に陷ることなしとせず。この弊稍々「ゆく春」のうちに現はれて、淺薄の情緒を吐露するふし又なきふしもあらず。

◎作者特得の八六調の如き、また其頓才の賜物なるべく、いづれの章を誦するも、作者が切りに頓想を重んじて日サキの變りたる詩材に取りつかんとアセれる跡歷然たるに似たり。

◎『天才』とは之を換言すれば、『頓才』のことなり。『發明』のまたの名は、之を稱して『頓智』といふを得べく凡て頓才と頓智とは新天地を開拓する良器具なれば、泣菫たるもの其特徵たる頓才の發輝に力め、頓想を重んずること益々盛んならば、茲に藤村等の及び難き詩の新方面を開くを得て、一種のフッドたるの位に達すを得んか。

◎『ゆく春』も矢張り古き集に於けるが如く語調の舌に乘り難く唱し難きもの少なからず。是れ泣菫が今一段の工夫を要するところなるべく、又この集の其處此處

に宗教思想の影ほの見ゆるは、甚だし床きこゝちしてうれしく、其圓滿なる發達を希望せざるを得ず。
◎挿畫の製版仲々の出來なれど、なほ鮮明を欠く恐れあり。これ又一ト工夫を要す。詩ぶり總て尋常にて賞むべき程のものならねど、『泉』に入れたる分のみ稍々見るに足るべし。（妄批多罪）

文壇すゝはらひ

▲　▲　▲

▲何かといふ中に早や年の暮だ。そこらそんじよのお長屋では、定めて來春の稼ぎに忙しい事であらうか、本石町へ緣のない此方は晦日の鬪も髭枕の高鼾き。ちと早いが煤拂きにても取かゝらうか。芥がかゝつたら御免候へ、こはくは、そつちへ寄り候へ。
▲『朝報』の「現今の新聞記者」、待ち構へさした程にもないまことにつまらぬものだ。ならう事なら、もちつと高く、もちつと深く、所謂記者先生の立脚地に迄も衝き入つて、と思ふが、少數の識者より多數の昧者を相手とする新聞紙としては、この位な處が、適當であらうか。
▲たゞ、その觀察を評すると、記者先生に對する世間の批評を代言したものといふべきだが、中には弱性かばりをつゝいた偏頗な觀察もないではない。こゝらは、どふか、公平にお願ひ申したいて。
▲このごろの『明星』に載つて居る蒲原有明氏の「獨絃哀歌」、評家は餘り注意しないやうだが詩形では確かに時流を拔いて居る。それから、近刊の全誌に出た山崎紫紅といふ人の「非情情」、これは、日蓮袈裟掛けの松を人格化して、その情を歌つたもので、着想が既に一風變つて居る處へ修辭がまた工風を凝らしてある。「導かれんなうれしけれ」、「淺どき執檻」一寸面白いてはないか。
▲『明星』は、流石に國詩の本場だけあつて、紹介する新作家も、外のに比べると、多少勝れて居る。晶子、登美子は別として、白星氏、林外氏などは前途望を囑すべき詩人であらう。
▲白星氏が『文庫』で國民歌謠の必要を唱へて居るが、そのいふことは既に角、「亞細亞」の作風で見ると、氏はこの方面に向つて成功を告げ得るが如くに思はれる。來年の文壇には、是非「亞細亞」以上の國民歌謠を拜見したいものだ。
▲早稻田の代水氏は、このごろ如何したものだ。噂に聞くと、他の仕事が忙しいので、筆を執るの餘裕がないといふ事だが、すこし餘裕をつくつて再び少年の勇を皷してはどふであらふ。健忘性の國民に忘れられる名は厭はぬであらうが、露葉氏の外、足を詩壇に入るゝものゝ出ないのは早稻田のために遺憾ではなからうか。
▲早稻田といへは、全校から出る『早稻田學報』、今月から『早稻田評論』と改題して、創作や韻文を載せるとの噂。『早稻田文學』の再興などと騒ぎ立つる手合もあるが、それは方角違ひの鉄既みだ。
▲近刊の『新小說』に載つた鏡花氏の小說は、一躰何といふ怪奇譚だ。學生とあるので、やつと時代が明治とだけはわかつたが、若旦那が夜半に舟遊びをしたり、活人形の見世物に婆が說明したりするなどは、どふしても五六十年前の草双紙にてもあらうといふ道具立だ。こんなものに目を留めるものがあるか知らぬが、若しあるとすると、それは奧山の犬芝居を見て手をたゝく坊ちやんと同樣、極めて幼なく極めて淺い趣味の看客だといはればならぬ。こんな無意味な、不自然な、ブラツグメントな、

實感をも起しやすい書き方をしなくても、人心の不思議な秘密は、いくらも表現し得る法があると思ふ。たゞし、文章だけは、巧いところがある。

▲鏡花氏の作で、讀み終つて眞に美的快感を起さしめるものがあらうか唯に讀者を誘術(チャーム)する力があるので、讀んで居る間は、兎も角も引きつけられる。結構が怪奇だからばかりでなく、詩美に打たれる所も折々あつて、そのため、一時恍惚たることもあるが、それは折々あるので篇を通してあるのではない。殊に讀み了つた時の心地といつたら、何物かを取り落したやうで、一種の失望を覺ゆると同時に、それ迄引きつけられ來つた反動として、一種の厭氣を感ずる。この點から見ると、氏の作は藝術品として申分がある。氏は何ふいふ用意を以て作に對するか知らぬが、若しこれ迄の作を、小說の正當なる目的を達したものと思ふならそれは、甚しい御心得違ひと申さればならぬ。

▲秋聲氏の『雲の行方』は拾つたら瑾もないではないが、弘い趣味に合はせやうと力めた苦心は認めねばならぬ。春葉氏の『夢の夢』何ものかを捉へやうとした跡は能く見えるが、全體からいふと、どふしても『雲の行方』の弟だ。

▲春雨氏の『無花果』は、大分世評があつたが、庸之助の煩悶をいくやうにも描きかけた所は、誰も賞めたものがない。それから、女囚が法廷で、心機一轉する所は、錐が足らないやうに思ふ。

▲自重といふのか知らぬが、眉山氏の作を出さないのは惜むべしだ。紅葉氏は、姑く已むを得ずとするも、氏は老ひこむには、ちとまだ早くはあるまいか。小說が出來ぬといふなら、文章だけでもお願ひ申したい。『ふところ日記』は十年後の文壇に盛裝して出たではないか。

▲松魚氏を天才と賞めあげた『帝國文學』の當時の記者は、この頃の氏の狀を見て、何と評するであらうか。

▲效能書(ちうのうがき)がげふ／＼しいので、齊軒氏の『寂光院』を讀んで見たが、やはり賣藥は賣藥だけの値打(ねうち)しかない。

▲『活文壇』が廢刊となつた。雜誌發行永續法といふものは「文士座右銘」の中にも書いてなかつたと見える。

▲言文一致に關する議論は、餘程出たが、抱月氏の說を除くの外は殆ど耳を傾けるに足るものはない。堀江氏の「言文一致標準語法私見」は、熱心と眞摯なる研究で、注意すべきものらしく思はれたが、惜むらくは僅に三回で中止、やがて一部の冊子となつて發刊さるゝといふ廣告はあるが……。

▲『文庫』に江東といふ批評家があつて每號詩文に筆を執つて居る。格別立役つた意見もない代りに、また、それほど間違つた所もない。時には新らしい題目を捉へて詩的の筆を振ふこともあるが、文壇は、一向注意を與へぬらしい。しかし、江東氏よ、反響がないからといつて、決して落膽するには及ばぬ。今の文壇で、反應されるのは、矯激な說か、突飛な意見か若くは奇當り、人氣取の議論であつて、公平眞摯な所論は、却つて平凡といふ二字で蔽はれてしまふ。正當な判斷は人が賦試せしむる反應がないのは、反應せしむべき缺陷がないのだ。

▲『新聲』に「社會時言」といふ欄が設けられて、梅溪といふ人が評論を書き『文庫』にまた「雜纂」といふのが置かれて、社會的の記事が載るやうになつた。これが、もし讀者社會の要求に應じて出來たものとすると、今の讀者社會―殊に青年―は、文學から漸く社會の方へ眼を轉じかゝつたのではあるまいか。しかし、これは？だ。

▲青々園氏と霞阿彌氏は、劇評家中の兩大關だ。青々園氏は今の文學に批評的、霞阿彌氏は昔の見切者風、どつちもどつちで、互ひに特長はあ

ろが、兎に角新聞文塲での二彩である。質氏が、今度の歌舞伎座を飜弄する筆致は中々及び易からずだが、青氏が、繪を知つて詩を知らずと圝十郎を罵つたのも痛快だ。

▲『時事』はこの前イプセンの「社會の敵」を載せたが、今度またコナンドイルの「モルモン宗」を掲げて居る。探偵小説か講談でなければいかぬ。と心得て居る今の新聞中て、歐洲の近代小説を紹介するのは、殊勝なことではないか。

世間では、餘り知らぬやうだが、今年死んだ飯島虚心氏は博識な俗學者であつた歌麿の系統論や、園藝の評などは、今の若手の及ばぬ所があつて、も少し生きて居て貰ひたかつたが、洵に惜いことをした。

▲美術界の立物岡倉氏は、いよ〳〵洋行と出掛けて、歸朝は來年の夏か秋かださうな。その時は、また一波起すであらうが、それを當て込んで、何かにありつかうと待ち搆へて居るものがあるとは…あゝ、何と淺ましい美術界ではないか。

▲淺ましいといへば、今度の學校改革に、辭令も貰はず、毎日のこ〳〵と學校へ押しかけて行つた男があるそうだ。押掛け女房とは、どこかの三面でよく見るが、押掛け教授は前代未聞、美術界なればこそ、こんな珍聞もあるのであらう。しかし、この男は、文相からの注意て、校長が叱りつけて追ひ出したさうだ。



▲文士の內幕や、文壇の樂屋をすつぱぬくものはあるが、まだ美術界の內醜を發き出したものはない。文壇はあれでも、まだいくらか制裁があり、殊にその非行も箇人だけに止るが、美術界と來たら、內部でこそ〳〵仕事をやるのだから、てんで鼻もちがならない。少し暴き出したらこの弊が止むかも知れぬと思ふが、照魔鏡とやらを、ちとこちらへ向けては如何だ。若し、それでも止まらぬ時、何のかまふことはない、大に發き出して、明治美術界の醜狀を天下に鳴らすさ。

▲梁川氏の『快樂派倫理』は意見は兎に角、文章に至つては天下有數のものだ。佶倔傲牙か、乾燥無味か、この二つより外に、哲學的意義を傳へる文章がないと思つたものは、この書に對すると、哲學的譯文も、かう、多趣味にかけると驚くに相違ない。

▲『帝國文學』に出る美文の翻譯中で、みをつくし氏のは、さすがにうまいが、他が、これを倣つてかいたのになると、とんと讀む氣がしないみをつくし氏が名あるからといつて、無理に摸倣するにも及ぶまいと思ふが……。

東西本願寺の東京移轉

衆市

本年佛教界の爲め大に喜ふへきの現象は、東西本願寺が漸次勢力を東都に移植し來れると是なり、本願寺派の高輪佛教大學は昨年來京都に於ける佛教大學の一部を移轉して新築工事を起せしか七月上旬その開業式を擧行せり、目下學生部高等中學部中學部を通して三百數十名に過きすと雖、將來大に發達する所あらは優に東都の一角に雄鎭たらん、大谷派の巣鴨大學また昨年來、京都の眞宗大學を移轉し來りて新築工事中なりしが九月に入りて開業式を擧けたりき、同派の中學は谷中に開かれて既に年あり。此の如くして學事の中心を東轉し來りたるは、即ち是れ京都思想より東京思想に轉化せる者、即ち是れ保守主義より進歩主義に推移せし者なり、是れ蓋し沈滯せし機運を展開せる者なり、吾人がこの東轉の策を歡迎するは、よりて以て此間より新生面を開出し來り、行く〳〵世運の變遷に伴ひ進むあるを得んことを思へはなり。桓武の都を山城に奠するや、政治の中心と共に基を定めし傳教の天臺宗は永く京都と共に繁榮したれとも、止まりて南部を守りし法相華嚴の諸宗は漸次衰退して、此に日本佛教の一時期を畫したりき、殷鑑遠からす、目下の京都は延暦の南都にして、延暦の京都は今の東京なり、機運の變化に臨みて着々教線を擴張せんと欲せん者、其東京に根基を要するや無論なり、吾人を以て見る、京都は佛教歷代の聖地なれば、永く聖地として保存すへく、教學の事は之を東京に於て計るを可とす、由來佛教徒の時機に暗りかしは、其罪多く京都中心の一事に在り。今や悟る所やありけん、漸次勢力を東轉し來れり。これ佛教の爲に賀すへしと云ふ所以なり。然れとも兩派の爲めに計るに、是より派內新舊思想の衝突漸く甚しからん、學事の方針に就き、布教の方法に就き、或は教義の見解に於て、または制度の如何に於て必す幾多の異見を生するあるべし、村上博士事件の如きはその一たり、宗派たる者大に注意せさるへからさるなり。

村上専精氏

村上博士の佛教統一論第一編「大綱論」に於ける大乘非佛説、法身理想論が端なくも守舊佛學者間の物議を惹起し、且つはまた常に博士に快からさる一類の排擠者

の此間に議を煽くありて、東亞佛教會は除名の決議をなし、大谷派は新門主を要して諭す所あらしめしかは博士は斷乎僧籍を脱し、一篇の告白書なる者を公表して進退を明にせり、風聲鶴唳、本願寺派の集會などは爲に出版取締法なるものを建議するに至りしと云ふ。大谷派内の私怨を構へ口を藉して博士を排するの譏に至りてはこれ悪むべきの極、曩年卜部觀順氏の變あるやまたその多くは私怨嫉妬の排陷に原因せしと云ひしに非ずや、宗派の内部此に至りては言ふに忍びざるなり而して守舊學者の狼狽に至りては、何ぞ夫れ局量の狹少なるや、言はゞ言へ是も一説彼も一説なり、研究の壇上何の恐るべきかあらん何の悪むへきかあらん、説の短なるを見は堂々論陣を張り研鑽を闘はすに於て、何の可ならさるかあらん、さるを正々の陣を張らす、堂々の戰を挑ます、直ちに以て外道邪見の名の下に貶付し去らんとす、怯か、狂か、斷して學者の態度に非るなり、天下の同情遽かに博士の一身に集注して、恰かも彼れ當時のルーテルたらしめんとするあるもの宜へなる哉、守舊學者の狼狽、得る所何者ぞ、自家爲す無きの眞價を暴露し、却て豎子の名を成せしのみ、博士の言論は以後益自由を得、博士の地位は以後益固確たるを得へきのみ。殊に大谷派たる者、新門主を擁して旨を諭さしめたるに至りては、何等の失態、異義者として門外に推するの必要あらは、一封の命令村上專精の僧籍を奪ふて可なり、博士たる故にしかすへからさるか、宿老なるか故にしかすへからさるか、抑また負債償却の事情によりてしかすへからさるか、教權は神聖なるを要す、門末を見るに博士あらんや宿老あらんや、しかもまた脱籍を命すると脱籍せしむると、或る感情を害するに於て如何の差かある、新門主を擔き出してしかも曖昧の處置たるを発す、かくては鼎の輕重あまりに見へすき過きたり、とまれ、大谷派なる者自から醜を引きて美を博士に推せしに過きす、博士亦幸運見なる哉。

毎月通信　（楓　生）

△本年の毎月通信もこれにてお仕舞ひに候

さても本年の宗教界は中々多事の宗教界にて候ひき、高僧托鉢の滑稽劇より初まりて、村上博士のごた／＼に終るまで、其試みに大事記を一點書き致し候へば

一、東亞佛教會の成立、錦輝館の購入と所謂高僧の托鉢

二、大菩提會の果敢なき末路

三、築地本願寺の新殿堂

四、基督教大學傳道の大躍氣
五、喇嘛西より來りモルモン東より着く、而して本國には阿吽婆羅婆の發生あり
七、東西本願寺の大學東京移轉
八、本派本願寺の慈善財團(五百万圓)創立認可
九、新佛教ユニテリアン會堂を借りて其主張を說く
十、出世間宗教に帶妻の痴論を吐くもの多し
十一、米國に佛教の會堂三個成立す
十二、村上專精氏僧籍返上
十三、大學に宗教學科を入るゝの議喧し

右の外些細の出來事は數限りも無く候、本年は救世軍も穩和しく、佛教界に比して基督教界は一般に問題少き年に御座候、

△島地默雷氏は村上氏僧籍逃脫を聞て左の如き一詩を贈られ候
多年講學發精神。統一論成面目新。大士何要分道俗。還家人是出家人

△前田慧雲氏、雨田上人昏頭の瘤を除かれし時の「十万圓饋悉贅瘤」の一詩(前號本欄所載)に次し、曰く
截斷昏頭肉似邱。見公面目淨如秋。恐他國手刀相及。我亦人間一贅瘤

△米國佛教々會の主任者水月哲英氏は先月歸朝病を東京に養ひ居られ候桑港の佛教々會堂も白人黃人の熱心なる寄附にて五万弗(十万圓)を以て近々新築に着手すべしとの事に候

△前月初め、救世軍は例年の如く「克己週間」を實行致し飮食を節してまで傳道費を集め候、東本願寺の借財の如きも信徒間に此克己週間を行ふ樣にせば忽ち辨償し得らるゝ事と信じ候

△第二回大學傳道も中々盛んに御座候、只第一回に比してはや活氣の殺がれし樣相見え候

△高輪學報前月出刊、前田慧雲氏の大乘佛說論等見るべきもの多々之有候、老川遺稿も前月出版致候

以上

老川遺稿を讀む

梅原龍北

予の老川に於ける人物性情素より相同しからず、然れども友情の濃かなる、十年變らず、兩々知己の感極めて深し。

同志社が德富蘇峰によりて大に天下に知られたるが如く、普通教校及び其の出身者が聊か教界に紹介せられしは實に老川の功與て力ありといふし。蓋し老川は普教校主義を以て教界の腐敗墮落を救はんとなしたりしなり。曰く禁酒進德、曰く世界的活動即ち是れ普通教校の二大主張にして老川が一枝の筆によつて十年教界を警告せし重なる題案なりとす。

而して我黨の士及び本派本願寺の對基督教的態度に於ける率れ寬裕ならんとする自ら是れ老川の首唱の致す處にして我國宗教界に特筆さる可き也。惜哉老川大に發せずして夭す、獨り教界の爲に悲しむべきのみならず、天下の爲に哭せさる能はず、而して老川が嘗て手を戟にして罵しりたりし教界の時事今や增々非ならんとするのみならず、予が文章志氣亦君か期せし所のものに非ず、偶遺稿に對し忸怩するもの之を久ふす、

十四年十一月二十二日、蠣殼町有樂館に於て、

寒窗獨語

雜評

獨言子

◎世の中に何が恐ろしいと云つて、地方の富豪が政黨

熱に感染するくらい恐ろしい事は無い、祖先傳來の財産を棒に振つて、果は路頭に迷ふ始末だ、

◎中には窮策を案じて詐僞を働き、鐵窓の下に呻吟して居るのもある、甲州の加賀美嘉兵衞などが、好いお手本である、

◎尾張に服部擔風といふ詩人があるが、二十萬以上の資産を所有して居るので、政黨などに關係するやうな事があつては心配だと、親戚故舊が寄つてたかつて、詩さへ作つて居れば大丈夫だから、詩を作れ／＼と勸めるさうだ、

◎何でも政黨屋を商賣にするには、無資無産に限る、から馬の荷をかへす事は無いから實に安心だ、もし間違つて相當の官職にでも蟻付けば、此くらいうまい事は無い、

◎田中正造君なども久しい政黨屋で名を擴めたが、相當の資産を滅茶／＼にしたが、贏し得た處は枷鎖の二字だ、

◎併し一片の俠骨を以て侃々諤々、三百議員中での一名物として知られた處はエライ、此名物も何か感ずつて代議士を辭職したといふから、もう二度と見えない惜しいものだ、

◎來年は總選擧で、又も野心ある地方の富豪が、銘々の自惚から、壯士の喰ひ物になるだらうが可愛想な次第である、

◎もうそろ／＼誰をお神輿にしやう、あれは小利口で金を出さないから駄目だ、これなら馬鹿でおだてが利くから頁からうと、考へ込んで居る連中が澤山ある、

◎して見ると撰擧されて代議士になる奴輩は大抵おだての利く馬鹿者で、小利口な人は決して出さない、

◎考へて見ると國會といふものも厄介千萬なしろものだ、おだての利く馬鹿者ばかり、寄つてたかつて、何が出來るものか、

◎尤も從來の政黨屋が采配を取つて馬鹿者を指揮するのだから、これとても今日は債鬼に攻め付られて四苦八苦、妙案の出る氣遣ひ無しサ、犬養でも尾崎でも憐れなざまだ、

◎政友會なども四分五裂、尾崎の院内總理では更に氣遣ひなものだが、今となつてはどうも仕方があるまい伊藤が歸つた處で知れたものサ、

◎政黨が衰微してから、社會問題が勃興して來て、此夏頃は中々大した勢力のやうであつたが、今では餘り面白い形勢でも無いやうだ、

◎勞働者煽動と出かけた處て、まだ我邦の勞働者は、實際彼等の騷ぐほど悲惨の境遇に沈んて居ないから、天下泰平なものだ、

◎生噛みの社會主義を鼓吹して、何か事あれかしと騷ぐ青書生の煽動に乗るほどの馬鹿は、勞働者の中にも少いと見えて、先づ〳〵安心、

新罪言

紫明居士

●漸出秦

燕京天子久蒙塵。萬里回鑾漸出秦。三十六宮猶寂寞。
落花早晩再迎春。

●缺其一

鼎之三足李張劉。戮力支持四百州。覆餗俄閒缺其一。
不知誰復護金甌。

●空仰藥

東洋第一折衝才。飽占功名積貨財。白髮蹉跎空仰藥。
長生多辱亦哀哉。

●搔白頭

驕倨蔑人爲貴族。功名一夢似浮漚。憐君末路作何事。
空滞天涯搔白頭。

●美人憐

寵恩優渥獨專權。當日驕心不畏天。門下諸生離畔去。
相思唯有美人憐。

●强人意

双脚蹉跎白髮年。嘉僚離散似雲烟。唯應一事强人意。
大學基金幾萬圓。

●人間外

施紫紆青入玉堂。誰知糞土滿心腸。黃金罪案人間外。
黠鼠出來在大倉。

●烏合軍

政友紛々徒作群。中原安得捲風雲。絶無節制無規律。
元是雜然烏合軍。

●舊攝家

燕山萬里踏黃沙。意氣堪誇舊攝家。聞說板橋霜白處。
金衣公子訪梅花。

●菅公會

尤物苦人如宿仇。三年謹愼恰幽囚。悄然猶說菅公會。宰府左遷同此愁。

●宗教論

圓了法師宗教論。新聞紙上語喃喃。恰與福翁相匹似。極平凡處是非凡。　拐林

●心乃遷

嶄然頭角憶當年。觀望兩端心乃遷。聞說丈夫期國葬。何妨債鬼滿門前。

●德無隣

口舌文章雖絕倫。自稱君子德無隣。三郎碌々爲何事。本是安公一號人。

●足驚人

理想團成局面新。筆頭生殺足驚人。便知全國新聞社。記者先生頭痛頻。

●赤天狗

意氣揚々冠操觚。何妨語氣類屠沽。勿驚岩谷赤天狗。烟草大王遭筆誅。

讀者の文壇

美術學校のいろ／＼

狹昼子

○騷動に始まり。グズ／＼に終る改革の實には漏れないこの度の美術學校の改革も、どうやら案に違はず茲に終つたらしい。所謂改革もまづ下火なのであらう、さて今度の正木校長さんの伎倆も大抵は相場が極つた。

○校長さんが巴里視察から歸へられて、パリパリの勢で同校に臨まれ、先づ手始といふ見得で、行きなり囑託講師悉く御閑をくれ、續いて日本畫科の助教授助手六名ばかりに免の字を奥れ、進みて教授小杉榲邨氏までをいぢめ出し、全校の職員をして大いに膽玉を冷さしめたまでは中々强かつたが、巴里から中よしの福地復一先生を用ゐやうとして、文部省の大親玉から御目玉を頂戴し、爾來最初の元氣消々沈々、へゝに行つてへゝに行つて、イヤハヤ今日此頃は實に見じめな始末に見受ける。

○へゝの一例を言へば、先づ日本畫科に、從來の川端、山名、荒木三教授の外に、更に下村觀山、寺崎廣業といふものを加へ、まだそれで足らないのか、助教授が一人はいつて、教授が一人はいる手順になつて居るやうだ。僅に八十人か九十人に足らない日本畫科の生徒を養ふのに、六人の教授とはあまりに法外の話ではあるまいか。

○以前岡倉の全盛時代でも、教授は三人、（橋本、川端、巨勢）であつた。それでさへも、橋本氏に實權があつたので、事實の教授は殆と一人、川端、巨勢二氏、いはゞ形式上、かざりの教授であつたやうだ。

○それはその筈だらう、技術の教師は學說とは違い、一人のいふことに就いて學ばれは、甲の教師のいふのと乙のそれのとは必ず異つた所がある、折衷などゝ俗說をいふ勿れ、かういふ僕も實は少々彩飾をひれくる者だが、川端さんに習ふてゐる時には、そのいふ如くにせれば、なまなかあちらで聞き、こちらで聞き等出來るものではない、一派の蘊奥に達せぬうちは、所謂折衷すべき宜い所がさへ解らぬのだから、さう多人數の先生に勝手な熱を手の固まらぬ、そして頭の固まらぬ生徒にふかれては、教授にも何にもなるものではない。生徒の方でも必ずや學び難いに違がいない、現に見る可しさ、同校の學生等に、黑田につく者は全く黑田の批評のみを標準とし、川端につく者は全く川端のみを標準としてゐるではないか。新奇軸を出すのは、自から天縱があるので、習ひ込んだ上ていろ〳〵と變化する位のことは、手近い天明時代の美術界に徵しても解りきつたことだらう。

○たゞ助教授にする筈のを一段あげて教授にしたといふのならば、餘の話ではあるが、輕重を謬り、學校の構成を亂るものではなからうか。生徒の出席缺席のみを調べて帳面につけてゐる丈の教授といふものは、今日々かの何程ゆるんだ官立學校にもあまり例のないことだらう。

○それに、下村觀山、寺崎廣業、この二人は實に不心得千萬なる人て、どんな事情なり、伎倆なり、乃至は校長さんの御氣に召した所があらうとも、決して官立の學校の教授に推選さるべき、節操、識見のない人物であるのだ。何故とならば、さのみ記臆のない人でもまた忘れはされまい、三四年前の美術學校の騷動、岡倉が校長の椅子を保つこと能はないて、ひくことになつた時に、例の文部に對する面あて的の遣り方で教授助教授、西洋畫科を除いた、首目同前譯分らずの全校教員は、悉く岡倉の人形になつて辭表を出した。これ實に無法とも何とも言ひやうのない話であつたが、暫く文部からの御諭で大抵は居ることになつたのだ、これ元より尤も千萬當然のことであつたが、その中にも分らない、橋本をはじめ六七人日本畫の中堅となる可き教師共はとう〳〵出てしまつた。下村觀山、寺崎廣業は實にその一味の人てあつた。これがやがてその惡るい所になる。

○この時の橋本はじめ下村なり寺崎なり六七人の人は、察するに美術教育の爲めに美術學校に出て居るのでなくて、岡倉の爲に美術學校に出て居たものと見える。生徒を養成するの爲めでなくて、岡倉の御賞が拂ひ度くて出て居たものと見える。美術學校の日本畫科はこの識見なき人々がしかも中堅てあつた爲め、その辭任後は當分殆ど暗の姿で、一時は無論教課はやすみ同樣、約二週間位は學校の体面をも失つた。六七人の人等は、これ等の事を豫期して居たのてある、否々この失態を見て快としたのてある、諄言をいふ勿れ、彼等が日本美術院といふものを起てゝ、瑣末のことでも美術學校へあたるやうに、仇するやうにしたのは事實てある。昨日まで怨を結でゐた知己の美術學校に關係したのを聞いて大侮辱を與へたのは彼等てある。

○昨日まで其處の飯を食ひ、その處の子弟を教養し、恩こそあれ少しの怨もなからうに、下らぬ朋黨比周の考へから、直ちにその學校に仇し、その不幸を敢て招かしめやうとした、これ程彼れ等は、危嶮であり、陋劣であり、沒品格であるのだ。

○それとも教育の神聖を汚し、その重任を忽緖に付しても、猶且つ大切な岡倉さんなら、その不遇なる間なぜ何時迄も同じに苦勞を厭れないのか、仇しやうとした學校へ、三年か四年たゝぬに、教授なら出やう、とはどの顏で出られるのか、彼はこれ程無節操てあるのだ。

○以前學校を出たのも、全く一時學校を途方に暮れさする筈のタクミは

今日に至つていよ〳〵明白に知れた。恐しい教育家ではないか、人を教へる資格のあらう人が。

○學校の重みにも拘はる程の小杉榲邨、今泉雄作などゝいふ老先生連を退けて、かゝる小人輩を取りたてゝ、彌が上に教授の數を增加せらるゝ正木校長さんのヘマサ加減には驚かずに居られない哩。

短文

我國の寄席劇場に就て

▲イツか貴社にても御議論ありし、模範寄席を市内恰當の場所に二三ヶ所に作つて見たし、萬事歐風にし中流以上の人士か集まる娯樂場として……(S.H.)

▲若し、僕をして殺人劍否殺人機を持たしめたならば、先づ第一に、伎藝を顧らぬ賣淫女義太夫や、男地獄俳優輩を捕へて、片つぱしから刎ねて見たい、隨分愉快だらうと思ふ、部下數万の書生が蜂の如く怒り立よふが、數万の夫人令孃輩が、ドンナに泣きだそうが、僕は馬の耳に念佛、一向頓着しない、一つやつて見たい(後樂)

▲劇場に於ける團十郎の眼玉。寄席に於ける圓遊の鼻。日本の演劇界は此眼玉と此鼻に依て生命有り、劇場の株主輩、席亭の親方連、須らく新年には目玉と鼻を三寶に供へて拍手打つて三拜すべし(渚華)

▲多くの望み無し、只座せる鼻先きを飛びつ跨けつ出入されるのが僕の一番不快に思ふところである、これさへ改まれば平民的娯樂の倶樂部として、寄席は最も重寶なものと思ふ(ち、か、)

▲又候ふ、例に依て東西演劇寄席の比較をお目にかけん

我國	歐米
○長きは一日十二時間の開場	○長くて一晩三時間にて濟む
○胡座、立膝、正座、人間を壽司の如くつめこむ	○悉く倚子にて毫も混雑の態なし
○音樂は其客なり	○音樂は其主なり
○席料茶代の惡弊あり	○芝居茶屋の必要なし
○河原乞食の末流	○概して政府の特別保護有り
○眞打ちの遊藝人にて一夕十圓を得るは稀れなり	○一回の唱歌二千金を得るもの少しとせず
○便所の臭氣汗の臭氣	○プンと鼻を襲ふもの唯香水の匂あり
○哄笑亂拍、欠伸と痴話無禮講の展覽會	○正座正服、儀容の練習場なり
○乞食小屋の如き寄席	○日本の總理大臣の邸宅より立派なる寄席
○スリの親方の如きものが入口に燦がれる歌舞伎座	○帶劍の兵士入口を護衛せるランチペラ

(芝、白金生)

▲劇場寄席に對する予の希望は、不取敢、棧敷の構造を改めて、腰を懸けらるゝ樣にして貰いたいのである、そうすると、第一衛生に好く、洋服の儘で往かるゝ便利もあり、又た人の容と心とが引締て來るから、下卑なことを觀たり聽たりするのが自ら厭はしくなり、演劇講談も、之れに連れて、漸々上品な方へ向ふべき道理である、現在の如く、觀客聽衆が胡坐をかき、寢轉て居る樣では、幾ら改良、取締を八釜數言つた處が、到底糠に釘であろうと思ふ(節陽)

▲我國の寄席や芝居は何を目的としてなしてなるか少しも分らない、今より二十年程前には、役者や講談師に大教正とか大講義とかの名稱を與

へて教導職とした、併し彼等は國民に何を教導したやら少しも分らぬ、醜猥なる演伎をなして國民の下等なる情を刺戟興奮したゞけは確である、實に我國の寄席や芝居は劣情養成所である、然し之れは其罪役者や講談師にはない、何せなれば高尚優美教訓的の演伎をなすも見物人が却て少ないからである、故に彼等は收入と相談上見物人の意志に投してせねばならぬ、して見ると國民が元來醜猥を好むから悪いのだ、故に寄席や芝居を改良するには先づ第一に見物人の心情を高めねばならぬ

(桃園逸士)

▲其位置だとか構造だとか客と藝人との往復だとか云ふことの取締に就ては自分よりずつと經驗ある御方に御譲り申して、今一寸爰に云つて見たいのは所謂藝人の噺である、浄瑠璃だとか新内だとか云ふものは古人の名作を唯だ音節を附して歌づる計りであるから、其云ふ所に依つて害毒を及ぼすことは割合に少ないか、落語や講談や浪花節などに至つては隨分卑猥なる情事や、强盗放火など云ふ罪悪を寧ろ鼓吹する口吻が大にある、彼等の噺を聞くにその千篇一律的の滑稽と談話とを繰返へして、敢て猥褻を脱し能はざるは彼等の無智と無學とに依るべければ爰に尤めざるべきも、其野卑猥褻なる言語を弄しハイカラ的通人と藝者との對話や、色道の亡者たる自稱粹人と淫賣婦との情交や、或は久松お染的の語事などを得々として身を動かし手を揚げて唯だ面白おかしく話し去り話し來りて、趣味の卑き聽者の心を動かし知らず〳〵青春子弟の情慾を挑發して揚然自得するに至つては、弊害の及ぶ所計るべからざるものである、苟も羞恥の心に富む妙齢の婦人などは座に居堪らなくなり、蓮葉の娘などは此の面白き誘惑に逢ふて恰も天來の福音に接せしが如き感を起して隨喜し渇仰して、終に身を持壊すに至る事は有り勝ちの事である、又講談や浪花節なとは時には思ひ切つて姦通や强姦などの話をして、鄭色卑言の有りつ丈けを竭すことがあるが、噺を假に世話物とすれば此等はどうしても時代物の方に屬する方だから噺に比すれば幾分か男女の淫奔を述べることは少ないが、其代り强盗放火など云ふ罪悪を教ふることは却て多ひ、彼等が述べる題目は鼠小僧にあらざれば石川五右エ門である、其他山賊追剝を片手商賣とする侠客とか云ふ悪漢の話で、大久保彦左エ門だとか一休禪師だとか云ふ面白き讀物を話さぬでもないが、寧ろ稀れである、彼等が滿腔の全情を寄せて賞讃する人々の行は何うかと云ふに、其多くは拉强助弱の美名の下に白晝人の倉庫を破り、金錢を奪ひ賭博に血を流し、泥酒して拳固の雨を降らす破落戸か、左もなくば吏と爭ひ火を放ち、牢を破り獄内に首を晒らすを以て男兒の面目と誤信せる綠林に等しき市井の无頼の徒であるに至つては、吾人は悚然として寒心せざるを得ない、勿論此等を聞くものは中等以上の識者でなく、事理の辨別に昧き車夫や、常識を具へざる下層の勞働者等だから、其害毒も一層恐ろしい、彼等下層の民が殺伐で卷舌を用ゆるを以て、男を磨くと心得、急性猪突前後を顧慮せずして事に當るもの、必ずや寄席の張扇の感化が少しもないとは云はれまい、浪花節の畝りに强盗を働いたとか放火したとか云ふことは昔から能くある話しである、されば當局者たるものは一方に婬奔を教ふる噺と他方に罪悪を奨ふる講談類に對して、嚴重なる取締をなし今後の子弟と下層の民とをして誤らしめざる樣に努めなければならぬ、これも我國人の品格を高める一方法たるを信じ爰に此等の取締を嚴にせんことを望む譯である、(神田隣の舍主人)

▲我國の寄席や劇場は、どうしても風紀紊亂の製造所であるから、此まゝには置けない、早晩改良せねばならぬ、尤も改良といふとは久しく唱へられては居るが、中々實行するとが出來ぬ、民間の有志者がやつて居るのは手ぬるい、警視廳なり、內務省なりで嚴重に取り締り、一時はそ

れか爲めに、寄席劇場が衰へる位いにまでやつつけてしまはねば、改良は出來ぬ、有望なる青年男女の前途を誤り、家庭の和樂を害するやうな、寄席や劇場ならば、僕はソンナものは、我國に於て全廢されても、決して不足に思はない、寧ろそれを望むのである（後樂生）

▲劇場に望む、幕合時間を短縮して幕數を減少すべし、寄席に望む、藝人の數を減じて眞打連六七名までの出演とすべし、義太夫ならば四人までにて澤山なり、構造に就ては倚子を用ひよ、飲食に就ては別に附屬の食堂を設けよ、此の如くして日本の劇場寄席は初めて改善せらるべし（碧山）

▲下足の面倒と混雜を省くは（獨り劇場寄席に止まらず）如何にすればよき哉、廣く世に問ふて研究を仰がんとす、靴と倚子猶日本の今日に行はれがたき事情あり、さりとて土間にして床几に腰かけて見物する譯に行かず、何とかよき工夫はなきや、右短文の趣意に頁く樣なれど心付きしまゝ一寸（無名氏）

▲今日の藝人輩をして悉く中學以上の學力あるものとせよ、これ劇場寄席をして風教を扶けしむる第一要件なり、彼等の人格を高むることは今日風教の改良に意有るものゝ必ず留心すべきことにして、吾人はこれを其筋に訴へて適宜の方令を施行せられんことを希望す（城南生）

▲八月廿五日發ロンドン發信の、川上一座と同行せし新俳優の腕達者藤澤の書信を一見致し候に、彼此摸樣の相違せる中々趣味有之、其中の一節を左に拔書きして貴社短文欄に差上申候



演伎時間は概れ毎日午後八時三十分より十一時迄の二時間半、尤も日曜日は休演、周間に水曜、土曜の兩日は「マチニー」と稱へて晝間興行を爲すことも有るなり觀客は總て男は夜會服、女は半身を顯はしたる例の禮服にて容儀を正して看て居る、併し三階四階の（吾が國の大向ふ、立見の場所）下等客の内には偶ま高聲に話したり、笑ひ興じたりする者の存る時は他の客が一顧して叱すれば忽ち鎭靜する、總べて觀劇中惡評などする者は詩味を解せぬ野蠻人の如く思はれて居る故可笑い事も我慢をして堪へて居る有樣だ（巾畧）予が舞臺に上りし時は如何にすれば彼れ歐洲人の眼に協ふや位は脚本（女裝の將軍）を書く時分より工風をして一番喝采を受けさする了簡であつたが、扨て舞臺に上つて歐羅巴の紳士淑女を前に据へて見ると、科白の少し長時にても渉ると看客のヒソ〳〵私語する聲が聞へて[illegible]ダレ氣味に成りはせぬかと、[illegible]縮めて動作の伎に移るなと、なか〳〵氣が氣でない、愁歎場で頻りに[illegible]思入れをして泣て居ると看客の方でクス〳〵笑ふ聲がする、どうした事かと後に聞くと其泣聲がキヤツト（猫）の樣だ、顏が「モンキー」（猿）に似て居ると云つて笑ふのだそふだ、成程それでは鵺の樣だと氣が[illegible]して何も出來ぬ、立廻の場に俳優は一生懸命曳々聲をかけ合ふて渉り合ふと、日本人は何故、口を利き乍ら又た唾を吐きながら決鬪をするかといふ、万事斯の如しだ、其代りに看客の注意は實に微細く、演伎上の一顰一笑、一擧手一踏足も眼を注いて居る其證據は二度以上見た

客は昨夜は此處で二度頭を振つたが今夜は一度より振らぬが何故だなとの質問が起る、答に苦む場合がある、

此他、日本流の女形老人形が、歐洲の婦人は日本婦人の如くシャナ〳〵と內輪に歩かぬ爲め、又老人が六十に成ても七十に成ても腰の曲らぬ爲め、日本の苦心は全く水泡に歸せしことなど記し居り候（京都綾小路生）

▲僕が我國の寄席や劇場に就いて望む所は、其構造がモット衛生的になり、演藝が成るべく卑猥に流れぬよう、藝人や役者の品格がモット高尚であるやうにしたい、ソウして廉價に手輕く多くの人民が、一様に樂しまるゝやうにしたいのである（後樂）

▲義太夫を聞かざること三日卑吝の志生ず、芝居を觀ざること半月食に味無し、寄席と劇場は吾生命なり（背山生）

我國の宴會に就て　一月十五日まで

我國の遊戲に就て　二月十五日まで

前月の出版界

◉普通選擧

片山潜氏著

長野縣東筑摩郡松本町八百四拾六

信州普通選擧同盟會發行

直接國稅拾圓以上を納むるにあらされは選擧權を有せざる今の衆議院議員選擧法に依らず、罪人と乞食と不具者と浮浪人とを除く貳拾歲以上の國民に向つて選擧權を得せしむる所謂普通選擧法を主張するもの也、現在の政治が一部少數の意見に左右せられて國民全躰の輿論が無視せらるゝを憤るものは、此書を讀んで如何に普通選擧の利あるかを知るを得べし（拾五錢）

◉家庭の新風味二

堺枯川氏著

神田內外出版協會發行

此書の評價第一篇の出でし時已に定論あり、此篇は全部六冊中第二冊目にして、專ら家庭の事務、財政、家族の扱ひ方住居衣類交際等に就て述ぶ、流暢の筆、現時家庭の病弊と其救濟策を述ぶ、中等社會の家庭には是非一冊を買ふて讀むべきものなり、著者の自叙に曰く

予は此叢書の第一冊においては理窟を云つた。第二冊においては小言を云つた。第三冊と第四冊とにおひては歌をうたうつもり。第五冊においては無邪氣に讀者諸君と共に遊ぶつもり。第六冊においてはおこがましけれど讀者諸君に對して說教をするつもり。讀者諸君、願はくは予をして此叢書を全うせしめよ。

我等は早く第六冊までの完結を見んことを望む（二十錢）

◉謠曲歌占註釋

三好二水氏著

神田區淡路町一丁目四海堂發行

ひれくれたる謠曲の文を何處までも朧ろげなしに註釋せられたる所、熱心なる著者の心行きも見られて嬉し、趣味も無く理窟も解せず、徒らに唸るをのみ事とする世の謠ひ連中に讀ませ度きものなり（十錢）

◉新御伽話

山縣閑水著

神田南甲賀町內外出版協會發行

是は著者が歐米の少年雜誌、家庭叢書等より翻譯したるものにして漣山人のお伽話と同じく趣味多き書籍なり、初めに枯川の序をのせ、中に賢

い女、乞食の立身、熊と狐の組合等、十餘のお伽話を集めたるものにして、裝裝綺麗、少年少女の好讀物なり(二十錢)

◉老人讀本鶴之卷　堀内新泉著

此は家庭讀本と同し著者なり製本は前の御伽話に均しく美くし、中に老人倶樂部、かへり咲、かけ茶屋、の三編を收む、誰れにも分かり易き本なり。思ふに著者は略〻此の種の作物に成功せるものゝ如し　神田區雉子町三十二番岡崎屋書店の發行に係る(十五錢)

◉京にしき　第二號　京都東洞院御池南京錦發行所

是は京都より出づる美術工藝の雜誌にして意匠は飽く迄も上方風なり、柳櫻をこき交ぜて都ぞ春の錦とは是をや言ふへき(定價十二錢)

◉英學新報　一卷一號　神田表神保町三英學新報社發行

欄を社說、寄書、時報、會話、註釋、講說、雜錄、質疑解答に分かち附錄にはロングフエロー肖像、懸賞文等あり、初學者を教ふる頗る懇篤、編者の苦心左もこそと思はれたれ(八錢)

彙　報

●第一期以來　繼續當選せる衆議院議員左の十四名なり

島田三郎　尾崎行雄　大東義徹　中村彌六
河野廣中　工藤行幹　佐藤里治　犬養毅
井上角五郎　橋本久太郎　中野武營　箕浦勝人
佐々友房　長谷場純孝

●三府の教育　本年度に於ける教育狀況を比較すれば

	就學歩合	一戸當負擔
東京	七十六人餘	七十錢餘
京都	九十一人餘	四圓二十錢餘
大阪	八十八人餘	二圓七十錢餘

●日本の森林原野　最近の調査左の如し

森林	二千六十九萬八千八百八十町五反歩
原野	二百六十七萬九千二百九十六町七反歩
國有森林	千三百十三萬六千八百三十七町二反歩
同原野	百四十五萬二千三百五町四反歩
御料森林	二百七萬六千三百七十二町歩
同原野	十六萬六千五百五十九町一反歩
公有、社寺有私有森林	七百四十八萬五千六百七十二町三反歩
同原野	百六萬四百三十二町一反歩

●東京の人力車數　東京市中の人力車、四萬二千四百四十一輛、其中にて自分持の車を輓く者一万百七十人、借車を輓く者二万九千五百七十人、宿車の抱輓子が二千七百一人、車夫の最も多數なるは淺草區にして其數五千三百四十一人、其他本所區三千五百五十四人、深川區三千五百十八人、下谷區三千八百四人、神田區三千二百六十七人なり、今假りに一人一日平均七十錢の車貨を稼ぐとすれば總計一日二万九千七百八圓七十錢、一ヶ年總高一千八十四万三千五百七十五圓五十錢の金は人を馬に代用するに拂ふ所の料金にして其家族各平均三人と見積り抱輓子の二千七百一人を除くも尚其口數八万九千二百二十人の多きに至れりと

●公德養成の新著　帝國教育會に於て、公德に關する參考書類編纂委員を、去月七日に開會、編纂方を中島泰藏氏に委任し、書名を「公德養成」とし、其の内容として決定したる細目は左の如しと。

公德養成綱目

倫理總論

一、德と義務との關係、一道德の二大標準、一直覺說、一幸福說、一利己主義、利他主義、實利主義、形而上學的倫理說、一社會心理的倫理說、一理想派倫理說

一、直覺說と公德

一、利己主義と公德

一、實利主義と公德

一動機としての理性論、一個人の利害と國家の利害、一形式主義と自由主義

一、形式主義と自由主義との比較

英獨の長短比較、一我國の國體と形式主義、一形式主義過重の弊、一道德の變化

一、公德と私德との關係

一、公德の基礎

自治と服從、愛と正義の念

公德養成の方法其一、二、三

一、公德誤解の弊害

公德は私德と伴はざるべからず、一慷慨家と稱せらるゝものゝ中には往々精神不健全のものあるが如し、一社會の義務を盡さんが爲めには宜しく其方法を選ぶべし

一、自由寬容の精神

社會の倫理的制裁は宜しく嚴正なるべし、一寬容の必要其理由及び個人の行爲には社會も亦責任あり、一罪惡は瑕疵たることあり、一行爲の結果は複雜にして容易に測定するを得ず、寬容の精神は人の人たる眞性なり

一、公德の自然的發生と其養成

公德は自然の發生に放任すべからずと云ふ說を論ず、一公德は自然に發生進步すべし

放任主義を楯として不德を助長せしむる傾向なきか、養成論も亦公德の自然的發達の結果なり、されば養成を助くるは即ち社會進化の作用を助くる所以なり

●自由廢業の結果　昨年娼妓自由廢業の始まらざりし以前は東京府下に於ける現在娼妓の數六千八百七十一名にて此内吉原、洲崎の二廓に四千七百二十三人郡部四宿に二千百四十八人なりしが本年九月に於ける現在數を調査したるに五千二百四十九人の内三千六百六十人は吉原洲崎、千五百八十五人は郡部四宿に於けるの數にて差引一千六百二十六人の減少なり

●變死者統計　本年一月より八月迄に至る府下に於ける變死者の累計は警視廳第三部の調査に據るに左の如し

	三十三年	三十四年		三十三年	三十四年
精神病	五二六	六一七	他傷	二〇〇	一九二
他傷死	二〇	一六	自傷	一七	六六
自傷死	二二	三九	溺死	二九六	二九八
轢死	八五	五九	轢傷	五	五
縊死	一一六	一一二	凍死	四	三
中毒	一七	八	中毒死	一六	一五

縊死	一九	三五	壓死	四	一一
病死	一四三	七六	死兒	三〇	二七
疾病	二五	三四	火傷死	八	三四
餓死	一	四	其他	五	四
合計 三十三年	一、五五九	自一月			
三十四年	一、六六五	至八月			

●高等教育會議　第六回高等教育會議は、去月二十五日より、高等商業學校内に於て開會其結果否決になりたるは一件もなく夫々實施手續に着手する都合にて議員建議案の可決は左の如し

第一　中等教育以下の公立學校に於ける實業的教科目の教授に使用する文字及言語は成るべく俗語俗字を用ふる方針を取る件

第二　商船學校に練習船三艘を設備し適當の教官を乘組ましめ各商船學校席上學科修了の生徒を分乘練習せしむる手段を取るの件

第三　過日配賦ありたる高等教育會決議錄を百四十七頁に記載したる各高等學校所在地の尋常中學校に於ける獨逸語に關する建議案に就き本會の決議を以て文部大臣に建議せん事を建議する件

第四　月俸五十圓以上を受くる公立小學長にして成績佳良なる者の特に奏任待遇に進めらるゝ道を開かんとを希望する件

第五　文部省に於て各種の小學校教科用圖書を速に編纂されん事を文部大臣に建議する件

